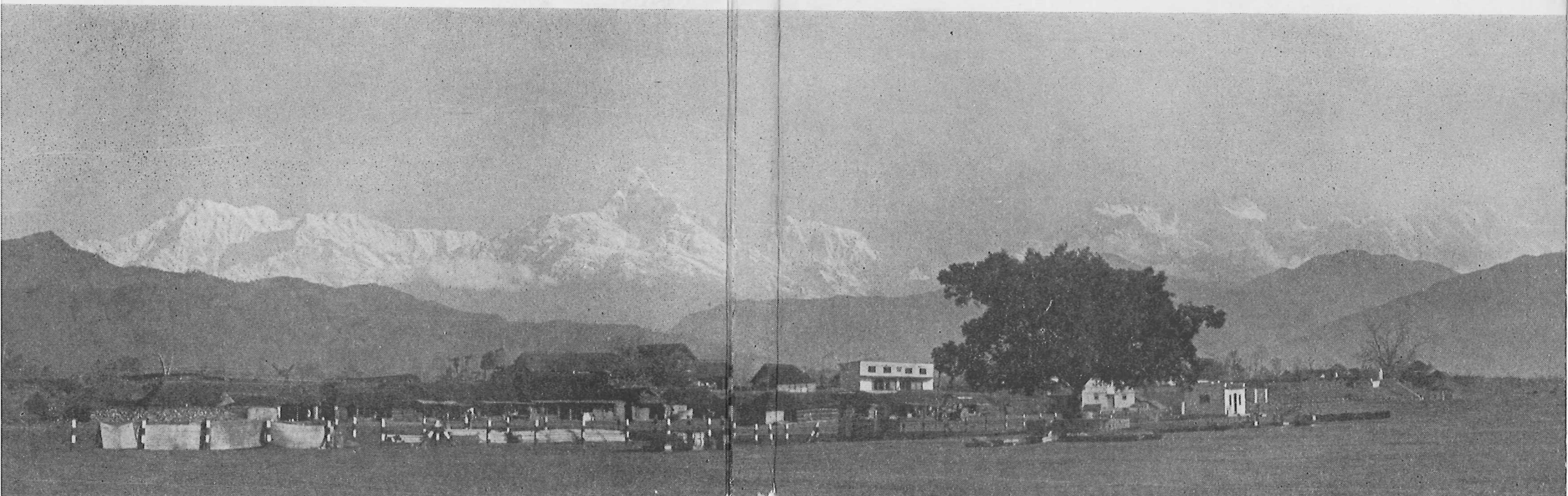
P 29 西面

篠田軍治著



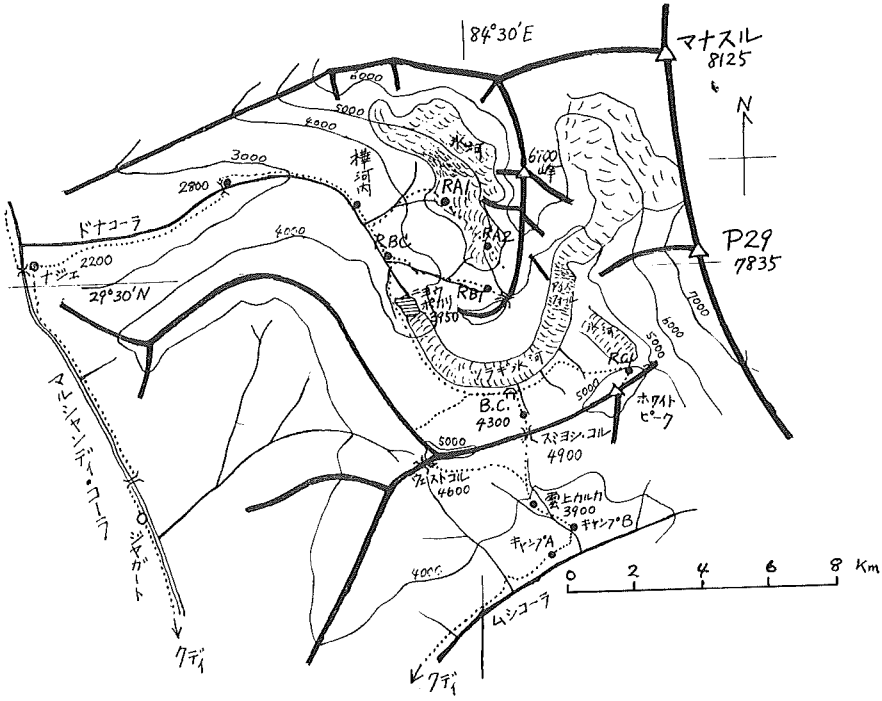
P二九西面

篠田軍治著

住吉コルから見たツラギ氷河の全景とアイスフォール
P 29（右端）マナスル（その左），6700峰（雲の中）の間から出た氷河はUターンして北に向い，さらに左に向きを変えてトンジェ方面に向かっている。〔1961. 4. 17 住吉仙也撮影〕

P29西面

篠田軍治著



大阪大学山岳会

はじめに

大阪大学山岳会がネパール・ヒマラヤのP二九に挑んだのは一九六一年のプレ・モンスーンの時期であった。P二九はマナスル三山の中の一つで、北から数えてマナスル、P二九、ヒマルチュリの順で高さは七八三五mとされているが、これは正確な標高ではない。我々がネパールの首都カトマンズに入って登山準備をしている間にヒラリー隊がアマダブランに初登頂をしたことを知ったが、アマダブランも有名な困難な山である。今度連れて行ったシェルパの言うところではアマダブランは下の方はP二九同様に悪いが上の方はあまり悪くないので登れるということであった。

昨年は英国隊によってヌプツェ、今年はフランス隊がまた懸案のジャヌーの初登頂に成功して、有名な七、〇〇〇m以上のむつかしい山がつぎつぎと登頂されて行くが、P二九はこれらと比較して高さの点でも、嶮しさの点でもひけを取るものでない。

ジャヌーをフランス隊が手をつけてから、もう相当な年月経っている。これと比較すると、P二九は漸やく我々が昨年、西面だけに手をつけただけである。西面を最初に狙ったのは東面は危険性が多いらしいということ、地形が全く未知であることが、おもな原因だったが、西面も少なくもプレモン

スーンには問題にならないほど困難だということが明らかになったので、あらためて東面を見直して見なければならない。P二九登頂の見通し――どの時期に、どちら側から登るか、また在来の登山技術で登れる山かどうかなどの点――は、その上でなければつけられない。

何れにしても、P二九は何とかして日本人に初登頂してもらいたい山である。そのためには幾多の困難な問題がある。それを解決するためには我々も多くの経験を積んでおく必要がある。昨年の経験を一応、纏めておくのも意味のあることと思ったので本書を編む気になったのである。

昭和三十七年十一月

篠田軍治

隊員

隊長　篠田軍治（大阪大学工学部）

副隊長　住吉仙也（川崎病院、外科）

尾藤昭二（阪大武田外科）

山本光二（大和銀行）

西川元夫（近畿日本鉄道）

兼清喜雄（日立製作所）

山本信樹（日産自動車）

小秋元隆邦（東京放送）

専門は住吉、尾藤が外科医、山本(光)が法律、西川が電気、兼清、山本(信)は機械関係の技術者で何れも大阪大学出身、小秋元は報道関係で東京放送から来て頂いたものである。

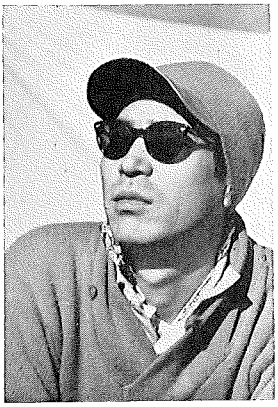
高所ポーター・シェルパは八名、ローカル・ポーターは二名で神原達氏の尽力でヒマラヤン・ソサエティーを経て傭ったものである。

目次

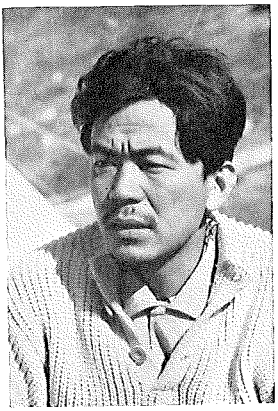
はじめに
隊員
ネパールとカトマンズ……一
登山隊と現地人……五
ルートの決定……九
ポカラ滞在……一五
第一次キャラバン……一九
住吉偵察隊と山本増援隊……二二
ルート発見、尾藤隊の行動……二九
クディ滞在……三六
第二次キャラバンと雲上カルカ……三八
ベースキャンプ設定……四四

ついに登頂断念……四七
ベースキャンプの滞在……五三
六七〇〇峰の試登とトンジェ・ルートの開発……五六
西尾根スノー・ピークの登頂……六四
ランタン・リルン遭難のニュース……六七
隊長発病……七二
樺河内へ下る……七八
ドナ・コーラの峡谷……八三
ポカラ帰還……八九
P二九の現地名……九四
ツラギ氷河のなだれ……九六
P二九の気象……一〇一
おわりに……一〇三

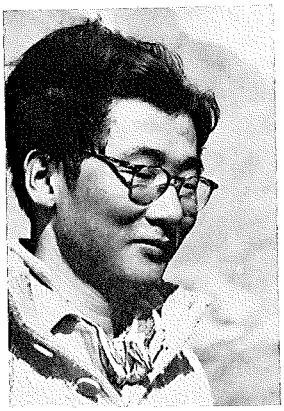
篠田軍治



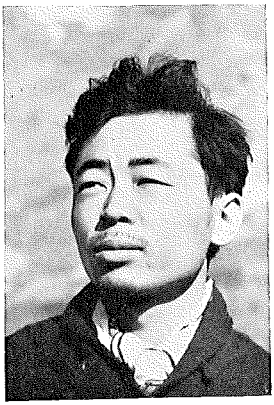
住吉仙也



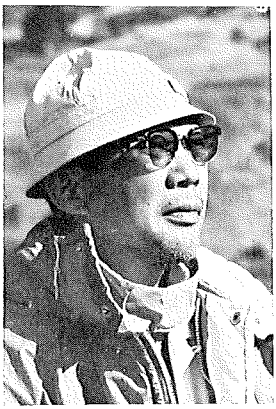
尾藤昭二



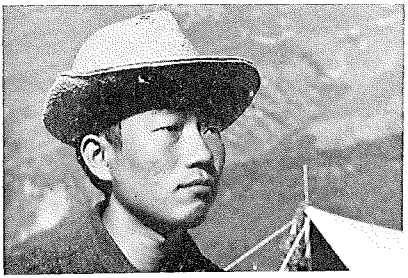
西川元夫



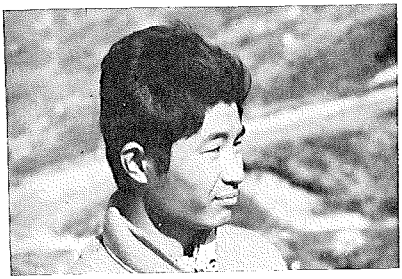
兼清喜雄



小秋元隆邦



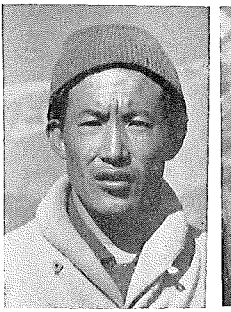
山本光二



山本信樹

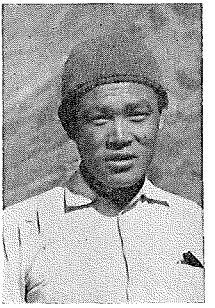
アジーバ
(サーダー)

ペンバ・ノルブ
(コック)

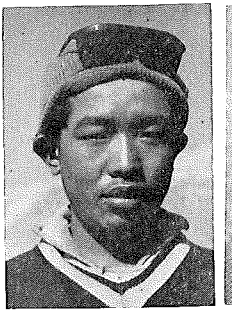


アンナンギャル
(シェルパ)

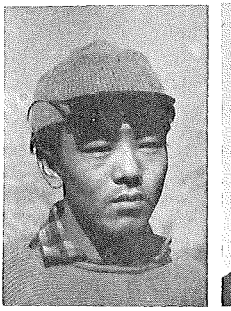
ダ・ノルブ
(シェルパ)



パサン・テンバ
(ローカル・ポーター)



アンダワ
(シェルパ)



カルマ・オンチュウ
(シェルパ)

クンガ・ノルブ
(シェルパ)

集まった人夫たち

リエゾン・オフィサー
パサデブ・ロカ

ネパールとカトマンズ

三月十四日に住吉、小秋元と共にカルカッタから空路カトマンズに入った。ネパールの首都カトマンズのことは今までに入ったヒマラヤ遠征隊の人達によって書き尽されているが、その割合に知られていない点が残っている。ネパールのような国、特にカトマンズは一年一年変ってゆくようだ。二年前とくらべて自転車の数が激増していたのに住吉も驚いていた。ネパールに入ると通貨もインド・ルピーからネパール・ルピーに換える方が便利だ。数年前の記録を見ると街の両替屋でレートを充分に研究すると有利な両替ができるとのことであったが、今の両替屋はすべて政府の許可証を持ったものばかりで、レートも過去六年間変化なく、ルピーはインド一・六に対しネパール一の割合で一定している。

カトマンズの王宮に近いホテル・ロイヤルはスイートピイなどが咲き乱れた立派なホテルで欧米なみにトラベラー・チェックが通用する。白系ロシヤ人のボリスが支配人をしているだけにときどきロシヤ風の料理も出る。

ホテルの前の舗装道路を、政府の綜合官庁であるもと独裁者ラナ家の邸宅の方へ向かって行くと、間もなくカトマンズの銀座通り、ニューロードの入口に出る。そのあたりに練兵場がある。三月に行ったときには柵もなかったが、六月に戻って来てみると煉瓦とコンクリートの柵ができていた。煉瓦は国産だからがまんもできるが、コンクリートはすべて輸入品である。どうしてこんな無駄をするのか理解できない。そう言えばカトマンズの電柱はすべて鋳鉄製である。そうして通っている電気は夜だけ、それも真夜中になると電圧が数十ボルトも上るので、電球はすぐ切れてしまうが、その電球もすべて輸入品である。こんな電燈をつけるのにどうして、外国から持って来た重い鋳鉄の柱を使うのか。お

そらくこの鉄柱を運んで来た頃にはトラックも通わなかったので、人間の肩でいく日もかかって運んで来たものであろう。

肩と言えば正垣氏に連れられて郊外のバドガオンに行ったときに、道路工事をしている人夫の天秤棒を見た。太い竹の棒で、日本のようにしなうものでない。あれでは少し早足で歩こうとすれば荷物がゆれてじゃまになるはずである。この点、日本の天秤棒は合理的である。体の重心の上下運動に応じて棒がしない、それとつるした荷物の振子のような運動が適度に合うようになっていて、荷物が不動点になって揺れない。天秤棒が発明されたのは、いつの時代か知らないが、ネパールへ来てみて日本人の知慧、やがてそれが西欧機械文明を消化する素地のあったことを感じた。ネパールにはいろいろなものが輸入され、国立の工芸指導所でも外国人技師（日本人を含む）の指導でいろいろな方面の技術の研修が行なわれているが、彼らは教わった通りを忠実に実行しているだけでそれを消化して、改良することは全くないようである。

工芸指導所（Cottage Industry）は随分多くの部門から成っており、相当数の外国人が指導していて、日本からも通産省の恵下湧氏が副所長格で活躍していた。恵下氏の前任の遠山氏（通産省）はネパールに豊富な竹を使って農具を作り大きな貢献をした。一方にジーメンスの最新式の自家発電装置があるかと思うと、他方にはガンジーの絵に出てくるような紡ぎ車がある。ラジオの組立てや製靴、家具などはドイツ人の指導で成績が挙がっているが、インド人の指導している部門はうまく行っていない。窯業の方では反射炉のような大きな煙突のついた炉を使っている。燃料は石炭らしい。外国の石炭を使わなくても、国産の薪はいくらもありそうな気がする。とにかく、ここへ来てみると外国人技師が、ネパールの国内事情などを少しも考慮せずに手っ取り早く手に入る装置を、自分の国から輸入して据えつけているだけだと言える。

ネパールへ来てネパール人の着ている服を手に入れようとしても既製品は売っていない。服はすべてオーダー・メイドである。これはネパール人がぜいたくなためではない。資本を寝かして、まとまった数の既製品を造るだけの経済的な余力がないのだ。そんなわけで家具など、デザインも出来上りもなかなかよいが、使っている木材は殆んど乾燥してないなまのものである。材木を買ったら、すぐ加工して売らなければならないので、乾燥に時間をかけるだけの余裕がないからだ。

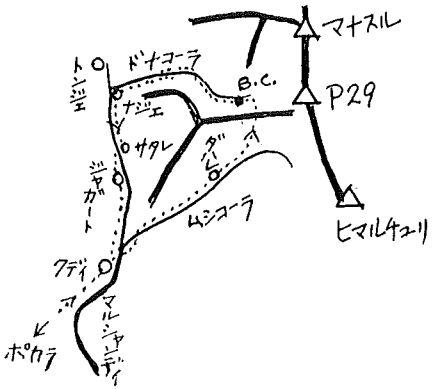
何れにしても、まだ封建時代も前期で、町人が経済的な実力を得るまでに至っていない段階にあると言えよう。しかし、こうした世界にも東西二つの世界の対立などの現代の悩みがひしひしと押し寄せている。アメリカはヒマラヤン・ハイツに大勢の夫婦者を入れており、ソ連・中共はチベットから横断道路の建設にやっきになっており、インドと米・英とは国境に沿って東西に走る道路の建設に急がしい。ネパール自身は遠征隊の使う通貨もインド・ルピーでなしにドルかポンドで持って来させようとして、インドから経済的に独立しようとしているが果してうまくゆくかどうか。

何れにしても二つの世界の対立がネパールという小さな山国で渦を巻いている。だから各国それぞれ思い思いの新らしい自国の製品を持って来る。しかし、ネパール人、特に奥地の人間は大半は文字を知らず、はだしで歩いている人達である。至るところに甚だしいアンバランスが見られる。

ヨーロッパを旅行してみると中世から現代まで、あらゆる面で完全につながっている点が羨しく感ぜられる。そこでは蒸気機関から汽船、汽車と順を追って、断層というものは見出せない。日本はどうか。蒸気機関も産業革命もなくて、いきなり汽船や軍艦である。日本人の生活に蒸気機関というものが、食い入っていない点が、長い間日本の機械技術者の欠陥となっていたが、近頃はだんだんとこれが問題にならなくなって、断層もほとんど埋まってしまった感がある。

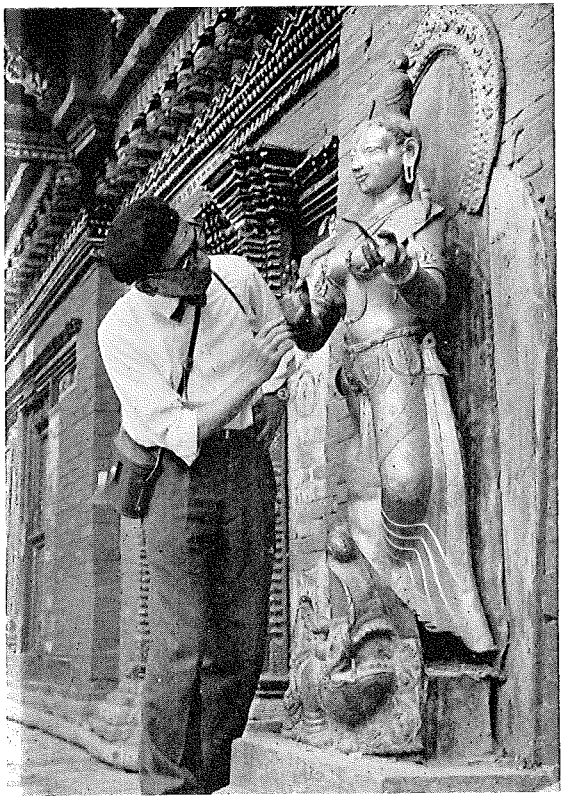
ネパールはどうか。車と言えば、荷車一つない国にいきなり自動車が入って来て、それから人力車、自転車である。断層があまりにも大き過ぎる。それでもカトマンズはまだよい方だ。カトマンズには電燈はあるが、ポカラには近くの湖の出口に発電所ができるまではまだランプの時代である。しかし、ポカラの住民は日本製のトランジスタ・ラジオをむやみに欲しがっている。電燈線もない所だから、トランジスタということになるのだろうが、ネパール人には少し無理だ。クディで滞在中、農業関係の役人がアネロイド・バロメータがこわれているから見てくれと持って来た。それは英国製の航海用のありふれたものだった。これを三〇〇〇米の高空を空輸して来て、しかも山国で使うつもりであり、その役人は英国人から晴とか雨とかいう針の指示をその侭信用するように教えられているのであるから念が入っている。

一週間もカトマンズに滞在したら、ポカラに出発できるつもりでいたが、カルカッタで通関、トラック輸送に手間取り、なかなかバイロワへ着かないらしい。ポカラはホテルらしいホテルのない所だから、荷物の到着が遅れれば行っても困るだけだ。一日、一日出発が延び、チャーター機の予約も取消したりまた予約したり、なかなか面倒である。電報はインドが握っているのでインド大使館へ行けば打てるが、無電だから空中状態に左右され、しかも配達に時間がかかるので、カルカッタから三日と見ておかなければならない。ネパールでの通信は戦線からの通信と同じように迂回した方が早い場合が多い。急ぐ電報ならばカルカッタ―カトマンズよりも、カルカッタ―東京―カトマンズの方が確実で早いこともある。

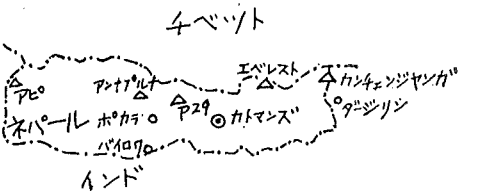


キャラバン　ルート

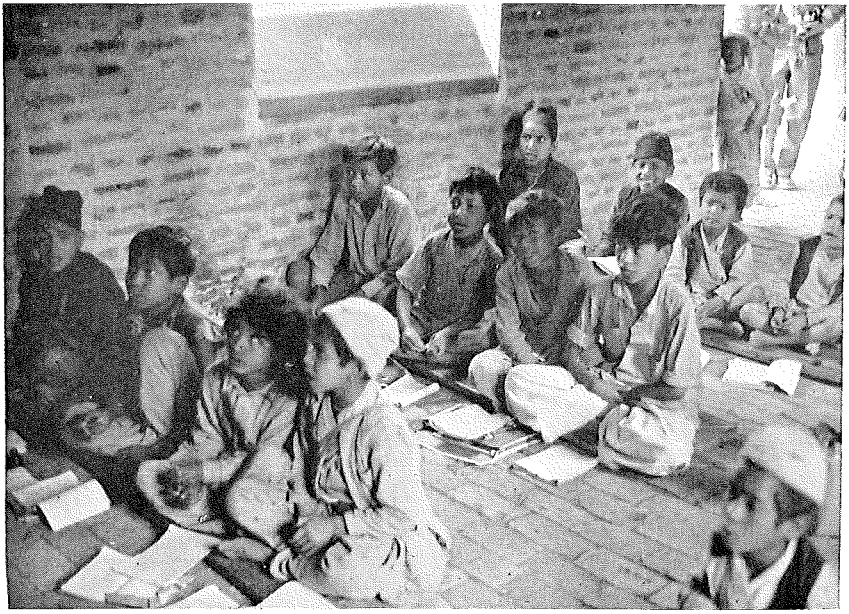
カトマンズの祭の鉾



ワーネル族の建築と仏像



ネ パ ー ル



村の小学校

国立工芸指導所にて

登山隊と現地人

第二次マナスル隊がサマの住民に阻止されて以来、登山隊と住民との摩擦はヒマラヤ遠征につきもののように思っている人も多い。登山の関係者はこのことをあまり気にしていないが、一般の人たちにはサマの事件がよほど深く印象づけられているようだ。

今度のマルシャンディの谷は、マナスル隊のブリガンダキと違って、豊かな谷であるから登山隊との摩擦はないものと予想していた。事実、本街道は毎年幾組かの登山隊が通るので全く問題はない。しかしネパールは完全に山の奥までも耕され、人が住んでいる。街道から少し離れると、大多数の住民は登山隊というものを見たこともない。登路を見付けるために、また聞き込みのためにこうした部落へ何回も偵察隊を出した。ボンダラのようにムシコーラとマルシャンディの合流点に近く豊かな大きな部落でも登山隊というのは尾藤、兼清らが始めてだったらしい。

彼らが入って数日たってからリエゾン・オフィサーのロカが村の自称詩人を尋ねて行った。そのとき、近所の老人が近頃、見馴れない外国人が入って来たので雨が降らなくて困るとこぼしていたそうだ。そこで、小生日本には三十一シラブルの詩で雨を降らせる術がある。その老人をここへ連れて来たら、小生試みるであろうと。本当に連れて来たら小野小町ならぬ小生三十一文字で雨を降らせるような芸当はできるはずはないが、幸にしてその頃から気圧は段々と下りつつあって、雨が近いことは予想されていた。だから小生大歌人になりそこなったのは誠に残念でもある。

ベースキャンプを徹収し、帰路マルシャンディの谷の本街道へ出て、最初の村ナジェで二、三日滞在した。ここはト

ンジェに二時間ほどの距離で、マルシャンディの本街道には近いがほんの僅かだけ街道から離れているために登山隊を迎えるのは始めてらしい。小秋元報導班員は旭光学の望遠レンズを持って撮影に出掛けたところ、望遠レンズを大砲か何かと間違えたらしい、やはり老人が登山隊が雨を追い払ったというデマを飛ばした。その日は今にも夕立ちが来そうになって、晴れてしまったので無理もない。

登山隊にポーターのストはつきものである。ムシコーラの谷のダハレの村というと最奥の村で、この附近ではヒマルチュリの慶応隊もストでなやまされている。今度の隊でもやはり同じだ。ストのやり方を見ていると必らずアジるものがいる。有力者と見えて多くの人達は村八分にされるのが怖ろしいのか、いやいやながら従っているようだ。

雲上カルカから先は雪があるのではだしのネパール人は歩けないが、フェルトの長靴をはいているチベット人には歩ける。カトマンズ附近のネパール人は紙幣も銀貨も区別しないが、チベットに近い所は最近まで紙幣が通用しなかっただけに、今だに銀貨には愛着をもっている。同じ給料でも銀貨でもらう方が有難がる。そこで、雲上カルカから先の賃金は全部銀貨で支払うと宣言した。村八分を怖れるネパール人は一人か二人しか帰って来なかったが、チベット人は全部残留した。こんなわけでチベット人の協力で住吉コルの間の地点までの荷上げは案外スムーズに終了して、それから先の隊員シェルパによる荷上げの労力も大部軽減された。

樺河内からドナ・コーラを下ってナジェへ行くまでの二日間のキャラバンは農繁期だけに人夫の集まりも悪く、下から連れて来た人夫の中には質の悪いもの、体力のない者などが多かった。果して第一日めから問題が起こった。樺河内から少し上に集結した荷物を運ぶことになっていた連中は容易に出発しようとしない。彼らには、隊がそこに棄てておく荷物は貴重品だから、何とかして一番後になって自分のものにして持って帰りたいのだ。彼らの意中は見えすいている。そこで彼らの目の前で石油その他、彼らから見ると貴重なものではあるが、我々からみると高い人夫賃や船賃を払

って持って帰っても意味のない物を川の中へどんどん放り込んで、またたく間に彼らが持って帰りたいようなものがなくなってしまった。こうなると彼らの重い尻もあがらざるを得ない。

こうしてキャラバンは始まったが、その夕方はまた夕方で大変であった。隊長はじめ隊員、シェルパの大部分は予定のキャンプ地、竹橋のほとりの岩小屋に到着したが、待てど暮らせど人夫は到着しない。シェルパの注進によると彼らは一時間行程ほどの所へ停滞してしまったとのことである。明日は難路であるから、一日のところを二日にするつもりなのは明らかである。腕つ節の強いダノルブとパサンテンバを説得に派遣した。彼らは第二組合の結成に成功して、ポーター七人を引抜いて来たが、この七人の持った荷物は隊員のテントや食糧だったので、お蔭で今夜は岩小屋泊りと覚悟をきめていたのが、快適な谷間のキャンプを楽しむことができた。

こうして帰りのキャラバンを楽しみつつ六月十一日、ポカラに到着して、キャラバンを終えたが、賃金支払いの段になると今度はシェルパとの間に問題が起こってしまった。シェルパは登山隊はカトマンズから出発して、カトマンズへ帰るものと頭からきめ込んでいる。だからポカラで賃金を払い、それから先はヒマラヤン・ソサエティの規定に従って帰りの旅費を支払うつもりであっても、これをなかなか承知しない。彼らは山では古い、前の隊から支給された装備を使っていて、我々の隊から支給された新品を使おうとはしない。だからポカラ解散のときには非常に重い荷物になって、とても一人で背負って、歩いて帰ることができない。賃金の支払を受けて懐中は温かくなっている。そこで飛行機でカトマンズへ帰りたいが、そうすると大変な超過荷物運賃をとられる。そこで超過運賃を払ってくれとか、いろいろなことを言って来る。これらは、まだ可愛らしい方であるが、最後にサーダーのアジーバがごね出したのにはいささか驚かされた。賃金の明細を示してカトマンズで前渡しした本人の署名の入った領収書を示しても、てんで領収書とか契約とかいうようなものは認める気はない。おそらく契約というもののセンスがないのだろう。すったもんだの末、彼の

言い分を聞いて、それに応じてこちらも反駁する。ついに結論が出そうになった。山本光二がそろばんをはじいてみると、彼の賃金は最初に示されたものよりも二割方減っている。それでも彼はサーブの示した領収書の中の一つを無効にしたことに気をよくして、納得してしまった。こんなストはネパールならでは経験できないことであろう。とにかく賃下げストは類のないものだろう。

こうは言うものも、このストはシェルパ全員が賛成したものではなかった。サーダーとその腹心の二、三を除いて他は明らかにサーダーに反感を示していた。サーダーといえどもストが解決してしまうと直ぐにケロッとしている。その点憎めない人種だ。

シェルパという種族はエベレストの山麓地方に住む人種だからカトマンズへ出ると全くの田舎者で巾がきかない。彼らの最大のプライドは大都市のカトマンズで住む都会人にも真似のできない、外国の登山隊の一員になることだ。だから彼らにとって登山隊の服装をすることは何とも言えない誇らしい気持ちになるのである。マルシャンディ沿岸のナジェの村へ着いた日に、ダノルブらは兼清サーブと共にトンジェの村へ出掛けた。そのときには真新らしい、遠征の始めに支給されても大事にして一度も使ったことのない靴をはき、服装も整えて、ピッケルまで携帯して出掛けて行った。これはその辺の人種と違うのだということを誇示するため、またこの方がチベット娘にもてるためでもあったろう。

ルートの決定

P二九の東面はマナスル隊がいく度となく眺めている。そしてリダンダの谷は確かにルートとして考えられることがわかっている。しかし雪崩れの危険性が多分にあるので、よほど条件のよい年でないと危険が多すぎる。これは村木潤次郎、松田雄一両氏はじめ、マナスル、ヒマルチュリの両方へ行った人たちの共通した意見だった。一九五九年の日本山岳会のヒマルチュリ隊はP二九の南側をよく観察している。その結果によれば南からの尾根は南峰を越えて頂上の近くまでは確かに行ける。しかし頂上直下にキレットがあって、それの登降がとてもできないので、南からの登頂ということは考えられないとのことであった。村木隊長の意見もそうであったし、阪大から参加した住吉は、既にその当時から阪大でP二九をということを考えていたので、つぶさに観察しているが、その結論も同じであった。

こうなると登頂は北からということが考えられる。北からのP二九には今西寿雄氏のマナスル頂上からの写真がある。それによるといつかの垂直の壁で尾根がずたずたに切れている感じである。北から尾根伝いに行くにしても、これらの壁を何とかして越えなければならない。横を巻くことができるかどうか、これは今までの資料では判断ができない。

それならば西面はどうか。西面も南半分にはルートは考えられない。頂上から少し南へ寄ったキレットのあたりから西へ向かって氷河が下りている。これへ根元から取り付くことはとてもできないが、北から尾根をあるところまで登って、頂上直下の垂直の一枚岩のような大岩壁の下を迂回して、この氷河の途中に達することはできるかも知れない。

こうなると、西北面というものの可能性がでてくる。西北面の方が東面よりも危険かも知れないが、東面には相当な危険性が予想され、西北面が全く未知である以上、西北面を探ってみる必要がある。

こうして西北面へという線が出た。そうなると偵察と言っても限られた範囲に限定されるので、若し適当なルートが見付かったならば登頂活動も可能なはずである。そこで登頂ということを考えで、酸素その他の登頂に必要な装備も全部持って行くことにし、隊員の編成も登頂に必要な人数だけは確保する方針をとることにした。

西北面が出ている写真には今西寿雄氏のアンプルナ遠征のときにナムン・バンジャンからとった写真がある。この写真は「マナスル」にも「アンナプルナ遠征」にも出ているが、少し遠すぎるので細かい所はわからないが、マナスルとP二九の間のコルへ出るとすればマナスルの西尾根から南に出ている六七〇〇峰の裾を通って行かなければならない。それならばどうして六七〇〇峰の裾に到達するか。これには二つのルートが考えられる。第一はトンジェ方面から、第二はムシコーラの谷からである。

トンジェ方面から行く方が距離的には確かに近い。またトンジェ附近、多分トンジェよりも少し南の方でマルシャンディの本流に六七〇〇峰の方からP二九とマナスルの水を集めた川が注ぎ込んでいる筈である。そしてこの谷は流域の広さから考えると相当な水量でなければならない。そうだとすれば今までにマルシャンディの谷を通った登山隊はマナスル踏査隊以来幾組もあるので、当然この谷が見付けられている筈である。今までの登山隊は帰りに通ったので、雨期の場合が多かったせいもあろうが誰も見付けた者はないようである。どうして、このような大きな谷が見付けられなかったのであろうか。大きな山行を終えた帰りというせいもあろう。しかし、これらの山行に参加した人たちは粒選りのヴェテランである。いくら帰りのキャラバンであっても誰かが見付けていそうなものである。それが見付かっていないとすれば、案外小さな、幾つかの谷に別れているのかも知れない。そう思って、住吉がヒマルチュリから帰りに取った

写真を検討すると確かに滝になって本流に落ち込んでいる谷がある。そして、これは幾つもある。しかし、どうやらトンジェに近い所にはないようだ。そうだとすればこれらの支流の合流点の滝は何れもあまり深い所から来るものではなく、P二九やマナスルの本峰に続く谷は別になければならない。

日本の山でも、黒部の下廊下へ入り出した頃は沼井鉄太郎氏の棒小屋沢を下った記録でも明らかなように支流の落ち口を見つけるのは容易なことではなかった。マルシャンディの谷は成長期の谷で今でも盛に浸食活動が続いている。黒部よりも遙かに大きいスケールである以上、そこに深い峡谷が入り込んでいて、その落口が見付からないとしても不思議はない。若しそうだとすればトンジェから入るには深い峡谷の遡行を覚悟しなければならない。どこかで尾根を横断して六七〇〇峰の麓へ出ることも考えられるが、ナムンバンジャンからの写真から想像すると相当な絶壁を上下しなければならないので見込は薄い。何れにして、多くの荷物を持ってのキャラバンは相当困難なものと覚悟しなければならない。

それなら南のムシコーラの谷から入るのはどうであろうか。インド測量局の地図によるとマナスルからの尾根は南西に延びてクディの近くに達し、この尾根とマナスル、P二九、ヒマルチュリと続く主尾根との間がムシコーラの流域になっているが、慶応のヒマルチュリ隊によってムシコーラの水源はヒマルチュリであって、P二九からは西に向かった尾根が出ていて、これが分水嶺になっていることが明らかにされている。この分水嶺から南の方はある程度わかっているが、北側は全く未知で、北側の谷がどこでマルシャンディに注いでいるものか、全くわからないことは前述の通りである。

ムシコーラ側からこの谷に入るには当然、この分水嶺を越えなければならない。五〇〇〇mを越える分水嶺を越えてキャラバンを進めることは大きな問題である。越えられるにしても相当な時間がかかることは覚悟しなければならな

い。モンスーンの襲来までには日時はあまりないので、ベースキャンプの設営が遅れることは登頂には致命的である。

このように考えて来ると、一発勝負でトンジェまで本隊のキャラバンを進め、それに先行して偵察隊を出す。うまくP二九の山懐へ入るルートが見付かったらそれでよい。見付からなかったらP二九登頂は全く断念して幾組かの小人数からなる小規模の遠征隊に切り換えたらどうであろうか。最初はこんなふうに考えて見た。しかし、この行き方はあまりにも常道から外れている。P二九遠征隊がP二九に全く接近せずに終ってしまう結果になるかも知れない。これに反してムシコーラの谷に入ればP二九に接近できることは確かである。やはり、ムシコーラの谷という常道を選ぶことにしよう。

日本を出るときには私の気持ちも、大体このように定まっていた。カトマンズでは市大の森本隊長と共にホテルへ訪れて来たギャルツェンにもいろいろと尋ねて見たが、彼もほとんど何も知らなかった。スイスの地質学者ハーゲン博士もあの附近は飛行機の上から、相当な距離で眺めただけで詳しいことは知らない。慶応隊のリェゾンのオフィサーを務めたブランドハンから西尾根の末端か、支脈に囲まれたあたりに湖があり、これと登路と何か関係がありそうだということを知ったが、彼もダハレの住人から聞いただけのことであるから、もちろん詳しいことはわからない。しかし、何れにしても西尾根は相当な高度までカルカ地帯になっていて、夏は牧童が入ることがわかったのでキャラバンを進めることも出来そうだと想像された。

カトマンズからポカラへ飛ぶ飛行機の上からこの西尾根は見える筈である。だから機上からの偵察が重要な意味をもつことになる。三月二十六日、いよいよポカラへ出発する日が来た。住吉は既に二日前にポカラへ行っている。その日は天気もよかったので、彼は充分に地形を観察しているであろう。今日も相当によい天気だ。空港にはカトマンズに滞在している正垣、恵下両氏、岳連隊の梶本隊長、市大隊の森本隊長、大島氏らが見送りに来てくれ、正垣氏からレイが

贈られた。森本、大島両氏にはこの日お目にかかったのが最後になってしまった。

一行は小秋元、マナスル隊以来の顔なじみのビナヤ青年を加えて三人である。カトマンズの空港を離れると間もなく山が見えて来た。まだ目指すマナスル三山は遠い。やがて村木隊の苦心したヒマルチュリの東尾根が見え出した。この分ならばP二九西面の観察も充分にできるだろう。

このあたりから時間にして十分ほどの間は誠に忙しい。双眼鏡で観察する。写真を撮す。肉眼で見ていてはよくわからないのでまた双眼鏡を取り出す。見ている間に地形が変化するので、また写真をうつす。こんなことを繰り返している間にマチャプチャリの尖峰が見えて来た。もうポカラに近い。今日は少し霞んでいるので、ポカラへ近ずくと共にP二九の西面も次第に霞んで来て詳しいことは全くわからなくなってしまった。

カトマンズでもこの年は雪が多かったと聞いていたが、何と多い雪だろう。一年前の慶応隊の写真から想像していたのと違って西尾根の南斜面は真白だ。下の方は霞んで見えないが、霞の上、三〇〇〇m以上は完全な雪だ。キャラバンを進めて、あのあたりへ行き着くまでには相当な時日がかかるから雪は消えてしまうだろうが、トンジェ側から谷を入るとすれば相当な雪を覚悟しなければならない。その上にトンジェ方面の地形は複雑で深いゴルジュがありそうな地形だ。そうなるとやはりムシコーラから南向きの斜面を登って西尾根を越えなければならない。尾根の向う側はもちろんわからない。だが、西尾根と六七〇〇峰との間は相当に離れているようだ。接近している所もあるだろうが六七〇〇峰の尾根が西尾根にT字形に衝突して、その凹所を氷河が流れているとすれば、平行した尾根と違ってどこかに相当離れた所がある筈だ。飛行機が進むに連れて西尾根の基部に近い、東に寄ったあたりが、ゆるやかな傾斜で六七〇〇峰との間の谷に下りているらしいことが想像できるようになった。これは確かに収穫であった。

ポカラ空港には先着の住吉が迎えに来ていた。彼は今日よりも、もっと好い天気に恵まれてヒマルチュリやP二九を

充分に観察している。彼の意見ではマナスルと六七〇〇峰との間の氷河が南に流れて西尾根に突き当たっているので、その附近に氷河の侵蝕による大きな断崖があるのではないか。そうなると西尾根を北に下るのはキャラバン・ルートとしては無理ではないかということであった。しかし、尾根の南側にあれだけの雪があるとすれば北側にはカール地形が発達しているだろう。カール地形ならばどこかに下るルートがあってもよい筈だ。こういうわけで自分としては偵察の重点をムシコーラに置くことを決心した。

ムシコーラへ偵察隊を出すとしても、他のルートも充分に検討しておくが必要がある。あらためて住吉は一昨年のヒマルチュリの帰りに取った写真を持ち出して来た。マルシャンディの谷に滝となって支流が落ち込んでいて、附近がカール地形のようになっているのが見付かった。これがジャガートの近くか、それともトンジェに近い所かどうもはっきりしない。その時のローカルポーターのパサンノルブを呼んでいろいろとただしてみたが、彼の記憶は住吉以上はっきりしない。後になってこの滝はタールと言って二棟の茶店があって、ナジェから二時間ほど下った所で、この支流を登ったら西尾根から北へ出ている支尾根へ達することが明らかになったが、そのときにはまだこれがマナスル、P二九、六七〇〇峰の間から出る川の本流かも知れないとも思われた。しかし、それにしても話の様子、写真などから考えて本流にしては少し小さ過ぎるように思われた。

こうして、住吉隊を先発隊としてムシコーラの谷へ入れた。隊員は住吉、西川、シェルパはクンガノルブ、ヒラテンジン、ローカルポーター、パサンノルブほかに定傭いのポーター二人とポーター七人の編成で、四月四日午後三時ポカラ空港のキャンプを出発した。

ポカラ滞在

ポカラの空港、そこは一面の天然の芝生で滑走路一つなく、飛行機が見えると鐘が鳴り出し、空港に集まった牛の群を追い出す。ネパール人の眼は早く、こうして数分間たつと我々の眼にも飛行機が見えて来る。

飛行機はロイヤル・ネパールのDC3で土、日を除いて連日カトマンズから来てバイロワへ行き、帰りにも立寄る。時には途中でグルカへ寄ることもある。定期航空とは言っても無線の設備がないのでカトマンズの天気が悪いとポカラはいくら晴れていても飛んで来ない。ネパール人の旅客は飛行機が来るまで時には幾日も幾日も空港入口の大木の下へ来て一日中待っている。そして空港のオフィサーが引き揚げてしまって、今日はもう飛行機が来ないことが明らかになると、あきらめて帰って行く。

空港の横には通りを隔てて藁葺きの家が数戸並んでいる。ここで煙草や食糧品を売っているが、煙草はネパール製のバットとかモーターカーとか言った安くてまずいものばかりだ。

この家並みの外れにクリシュナ・ホテルがある。ホテルと言っても藁葺きのお粗末なもので店先では簡単な食事や紅茶などができる。奥にはベッドが三つほどある室があって、食事さえ現地食でがまんすれば結構泊れる。

ポカラの空港も年中変って行くようだ。前の年にはなかった柵ができている。一キロ半ほど南へ行ったところに湖があるが、これの落ち口には電源開発で粗末ながら発電所ができかけていた。また空港の北端に近い所にはジュラルミン製の政府建設の宿舎ができていた。不完全ながら水洗便所もあり、ベッドも悪くない。

ポカラの町（バザール）は空港から二キロほど北へ行った所にある。相当大きな町であるが、カトマンズと違って電燈はなく、硝子窓のある家は見当らない。ポカラまで行くと両替はできないものと思っていたが、銀行があってカトマンズと全く同様に両替ができる。こうした事情は銀行屋だけに山本光二は素早くしらべ上げてしまった。町へ行く途中にマッチ工場がある。電燈線一つない工場というと今の日本では想像もできないが、明治初年のマッチ工場は似たものだったろう。

もうバイロワから荷物が来ている頃と思っていたが、まだ着いていない。午後になってバイロワから尾藤が一人で来た。西川、山本（信）はバイロワまで来ているが、荷物はまだベナレスにあって、山本（信）、兼清はまだノータンワに居るらしいとのこと。カルカッタの通関が手間取り、トラックの出発が遅れたりしたのでバイロワ――ポカラ間の飛行機をチャーターしていたのをキャンセルしたり延ばしたりしてカトマンズでは事務的な面倒が相当あった。それでも、カルカッタからカトマンズへの電報は空中状態が悪いと送信できないとか、インド大使館内の郵便局から配達されるのに一日以上かかったりする国であり、その上バイロワには滞貨が多いのでチャーターした飛行機はキャンセルされても会社の方には少しの迷惑にもならないためか、日取りを変更しても別にいやな顔もせずに引受けてくれる。

こうして荷物が遅れるとシェルパはただぶらぶら遊んでいるだけである。既に出発の日を予定して人夫を集めてある筈だから、その人夫の処置が頭の痛い問題である。ところがよくしたもので、カトマンズのヒマラヤン・ソサエティで契約した人夫頭（ナイケ）が来ていない。ナイケと自称する者が現われ、ヒマラヤン・ソサエティの証明書を持っているが、先日カトマンズの事務所で会って契約したものとは全く別人だ。にせのナイケでも正式のお墨付きがあれば立派に通用し、人夫頭の役目を果してくれればそれでよいわけであるが下請けは下請け相当の仕事しかできない。人夫はどうしても集まらない。去年までポカラ人夫の賃金は一日五ルピーであったのがヒマラヤン・ソサエティとの契約は一日

五・二五ルピーになった。〇・二五ルピーはヒマラヤン・ソサエティのピンはねである。政府機関と自称し事実は半官半民という形で、定款にはよいことばかり並べたてた団体であっても要するに登山隊のピンはねだけで経費を賄なっているのだ。悪いことに、先日出発したインドのアンナプルナのⅢ峰隊が大勢の人夫を動員して連れて行ってしまった後であり、インド隊は従来の慣習を破って一日六ルピーに値上げしている。ポカラの相場が上ってしまった以上、我々としてもこれに同調しなければ人夫は集まる筈がない。このナイケは人夫を三十人ほど集めただけで姿をくらましてしまった。こうなると自力で人夫を集めなければならない。ようやく四月四日になって百人だけ確保でき、あと十一人までは可能という線がでた。二日にバイロワから来た兼清はすぐカトマンズへビザその他の用件で行ってしまった。このときビナヤと同行したのでにせのナイケがカトマンズ空港にいることを見付け出してしまった。本物のナイケは彼に前渡金の中の僅かしか渡していないが、彼もまた相当なもの、それを着服して逃げてしまったわけだ。

こうして四月三日にはチャーター機がバイロワへ二往復して残りの荷物全部がポカラに集結し、翌四日には住吉先発隊が出発した。この日、宮廷機がポカラの湖畔の離宮へ愛人を伴なってやって来ていた皇弟バスンダラ殿下が訪問された。アメリカ人の愛人の方は写真に興味をもっているらしく、盛んにキャノンで写している。やはり登山隊の装備というと珍らしいらしい。いろいろなことを尋ねられた。翌日も帰りの飛行機を待つ間にまたやって来て、昨日のプレゼントのピースの缶入りがとてもうまかったと口を揃えて語っていた。

荷物が来たのでホテルを引払って四日からテントに入ることにした。住吉隊が出発すると間もなく大雷雨、それに伴なってネパールの鶏の卵くらいの雹が降り出した。ネパールの鶏卵は黄味だけと言ってよいくらいに小さい。この雷雨と雹は翌日も来て、突風で大きな屋根型のテントが倒されてしまったが、その翌日キャラバンを始めてからはついに一日も雷雨に会わなかった。ポカラは盆地の中心にあるから、やはり各方面から来る雷が集中するようだ。五月末になっ

てポストランナーがポカラから帰って来て報告したところによると、鶏卵大の雹が降って牛が死んだとのことであったが、まんざら嘘とも思えなかった。

六日はキャラバン出発の日である。例によって空は美しい。北の方を見るとポカラのシンボルであるマチャプチャリの尖峰、その左にアンナプルナⅠ峰の続き、右にⅢ峰、Ⅳ峰、Ⅱ峰と続き、さらにその右に遠くP二九、少し近くヒマルチュリが朝日に輝いて美しい。ポカラから見たマチャプチャリはよくツェルマットからのマッターホルンと比較される。しかしマチャプチャリの標高は七〇〇〇mを越え、ポカラの標高は九〇〇m程度で落差は六〇〇〇mを越えている。それと比較するとマッターホルンとツェルマットの落差は半分以下である。さらに上高地からの穂高の落差はそれの半分程度であるから、ヒマラヤのスケールというものがいかに大きいかがわかる。

太陽が上ると共にチベット方面へ向かって進む驢馬の群が大きな鈴を鳴らしながら通って行く。このキャラバンも中共がチベットに入って以来、次第に寂れ今は盛んな時の数分の一に減っているとか。出発の朝はなかなか忙しい。もうゆっくり景色を眺める余裕もない。予定しただけの人夫が集まらないので尾藤、兼清とリエゾン・オフィサーのロカに後のことを頼み、人夫に前渡金を渡して、出発したのはもう四時近くになってしまった。

ナルマの峠の村
(標高約 1600m)

ポーターにたばこを
配給する

ムシコーラの谷へ
中央の山はＰ29 南峰

ダハレ部落の奥
（脊後の山は
ヒマルチュリの下半）

第一次キャラバン

キャラバンの終点、ベースキャンプの位置は大体見当をつけている。しかし果して予定のベースキャンプまで行きつけるかどうか、またどのルートを選ぶべきかはまだわかっていない。とに角、ポカラから四日行程のクディまで行ってからの話である。だからキャラバンと言っても差し当り四日間だけ、それから先はクディを偵察のためのベースキャンプにして第二次キャラバンに移ることになるわけだ。

第一日は僅か二時間ほど歩いただけでアルブンビズブルの村外れの牧場泊り、翌七日出発して間もなく峠を登りつめるとポツバイヤの村、ここは右にルパゴテタールの湖、左にビッグナス湖が、また眼の前にP二九が見える。シェルパのカルマオンチュウを介して山の名を聞いて見るとラルケと言って船の意味であるとか。試みに他の山の名を尋ねてみるとアンナプルナ・マナスル・ヒマルチュリと少しも間違えない。その後ラルケという名は聞くことができなかったが、この地方のP二九の通称としては信用してもよいだろう。

湖畔に出て、また峠にかかり、タルベシの村から谷を下り、マディコーラの河畔に出て泊る。ここは海抜五五〇mで標高が低く蚊も多い。このあたり、こうろぎが鳴いているかと思うと螢が飛んでいる。俳句の季ではどうなるだろうなどと、寝苦しいままに考える。

八日の朝、シェルパのアンダワが連絡に来た。それによると昨七日、ポーターがなかなか集まらないので取りあえず兼清は十五人の人夫と共に出発し、昨夜は本隊が前日に泊った所に泊ったが、まだ全部の荷物を運ぶだけの人夫が集ま

らないので、尾藤とロカは遅れて出発することにしたとのこと。これではクディまでの間で追いつくことはとても不可能である。後に残された二人の個人装備類は本隊と一緒に来ているので、テントその他と共に、走るようにして本隊に追い付いて疲れているアンダワを残し、アンナンギャルと人夫一人を連絡に下ろすことにした。この日はマディコーラの支流を上り、急坂を登りきって一六〇〇mのナルマの峠村に泊った。

九日、六甲か奥多摩の稜線を歩いているような気持になって、正午頃パグルンパニ着。後から聞くと住吉たちはこの下でP二九の山名はツラギであることを聞き出したが、本隊の通り過ぎたときには山名を知った者に出会わなかった。

この尾根の途中でP二九がよく見えたが逆光線で見にくい。双眼鏡で六七〇〇峰とP二九の西尾根のジャンクションのあたりを見てもよくわからない。そこで目立の干渉フィルターを望遠鏡につけて見る。赤のフィルターをつけるとはっきり六七〇〇峰と西尾根とが離れていること、西尾根は西の方で分岐していることなどがわかる。偏光フィルターや写真用の黄色のフィルターを使っても同じように見える。写真用のフィルターの中で特に橙がかったものは干渉フィルターや偏光フィルターと同じ位の効果を発揮するものであるが登山者の間には案外知られていないようだ。

パグルンパニから一気に谷を下り、マルシャンディの本流に沿って少し登り、吊橋を渡るとクディ・バザール。ここは相当な町で日用品は大体何でもあるようだ。マナスル隊以来日本隊となじみの深い河畔のマンゴ園に泊る。

翌十日、人夫を大部分解雇し、後続の尾藤隊を待ったがなかなかやって来ない。漸く六時頃になって到着した。彼らは昨日、ナルマの下で泊ったため、今日は非常な強行軍で全員相当疲れていた。

久し振りに六人揃ったので、その晩は明日からの偵察行路のディスカッション、それも十時半頃漸く結論に達した。

住吉偵察隊と山本増援隊

四月四日、住吉、西川はヒラテンジン、クンガノルブとローカルポーターのパサンノルブ、常傭いのポーター二人、ポーター七人計十四名で出発した。常傭いのポーターはヒマラヤン・ソサエティでローカルポーターとして推せんされたが、経験が不足なので断わった者でポーター並みに使えるが、またある程度高所にも使えるという至って便利な存在なので便利屋と呼ぶことにした。以下は住吉の手記である。

四月四日、午後三時出発。夕立ち五日、チソコーラの奥で夕立ち。キャンプ。

六日、私にとっては二度目のヒマラヤである。西川と計十四人の小パーティは不安はおろか誠に気楽で快適な旅である。クーリーが文句を言えば解雇してすぐ別のを雇える。早く出発しようと思えば日の出と同時に出発できる。夕立ちでも来れば所かまわずテントで寝られる。茶店があれば大旦那よろしくあぐらをかいて茶をふるまう。四人が飲んでも日本円で十円くらいだから皆に二杯目とうそぶいたところで大していたくもない。「西川、本隊ならこんなに気楽にネパールを楽しむことはできんぜ。お前、先発で来てもうけものだぜ」と言うものの先発で偵察という重大任務にいささか気が重い。

愉快な旅ではあるが、なかなか忙しい。峠があれば横の山に登ってみる。現地附近まで四、五日かかるキャラバンだが、それまでにできるだけ聞き込みをしなければならない。ところが大きな誤算があった。連れて来たシェルパのクンガノルブは二番目に英語がうまいとのことだったが Tomorrow も Yesterday もわからない。大変なものである。今さ

ら仕方がない。二年前の記憶をたどりつつネパール語の泥縄を始めた。英語―ネパール語の辞書片手に手当り次第に話しかける。幸にも言葉の配置は日本語と同じである。男と見れば「オーダイ」おばさんとあれば「オーデデ」、娘がいれば「オーバイニイ」とぶち掛けてしゃべり出す。通行人には「タパイコ、ガウン、ナム、ケーホー」（お前の村の名は何だ）。マルシャンディ附近の村ならヒマール（山）のことから聞き始める。こちらの言うことは繰返すうちに何とか通じるが、相手の返事はなかなか解らない。それでもめきめきと上達は著しい。しかしかんじんのP二九のことは全然つかめない。マナスル・ヒマルチュリの名は知っていてもP二九というこの両山の間の山は名前すら「ター、ツアイナ」（知らない）である。

午後から歩きつづけた川沿いの道は徒渉七回で日も暮れかけ、キャンプする。ここから先がナルマへの長い登りになるのだ。

七日、二時間ほどの登りで全身汗だらけ。尾根の上はナルマの部落で、遙かにマナスル三山が見える。学校がある。大きい者も小さいものもまざった全生徒が王様の写真のかかった教室で授業中、国語の時間か、ネパール語で大声の斉唱をしている。私たちが通りかかると授業中止で全員外へ出て来た。これ幸いと先生にP二九を指して名前を尋ねたが全然知らない。こんなにもよく見えるのに名前も知らないとは、無関心にしてもひどいものだと、西川と共に苦笑した。授業中止で送迎してくれた全員の記念撮影をして先を急ぐ。

尾根の道はずっと続くが、正午近くなると雲が多くなって遠望はきかない。毎日のことだが白い山々が見られるのは朝の十時頃までだ。その代り今日はしゃくなげの紅が私たちの目を楽しませてくれる。

日も西に傾むく頃、長い尾根を後にふり返りつつパグルンパニから谷川への下りの道にかかる。道が二つに分れ、どちらに行くべきか迷っているときネパール人に会う。たぶんグルン人だろう。（二日遅れて同じ道を通った私も、やは

り迷っているとグルン人らしいネパール人に会って道を教えてもらった）道を聞き、ついでに何げなく聞いたP二九のことから長話になった。そのうちにどこから集まったか人家も見当らないのに十人以上の現地人があぐらをかいた私のまわりに座りこむ。不得要領な例のネパール語に、パントマイム、画を入れてのやりとりの間に意外な詳報を手に入れた。一口に言えば僅か五分か十分ですむことだが、何と延々二時間にわたる夢中の一刻、やっと腰をあげたときには既に暮色がたちこめていた。

信頼できるかどうかは怪しいものだが、ムシコーラに沿った部落の名をつぎつぎと挙げ、さらに上部にあるカルカを教えてくれる。マナスルは「とかげ」のこと、ヒマルチュリは「すばらしい山」（山の中の山）、その間の山はツラギと言う。ツラギの西側には高い山に囲まれた湖がある。なかなか行くのは困難だが見た者はいる。今度はやおらインド測量局の地図を出してムシコーラのことを聞くと、ムシコーラは上流の名で、下流はナディコーラと言うが、どこから流れてくるかという点では全然怪しい。地図による立体感覚は零である。「滝はあるか」という問いに「ボーツト、ツア」（とても沢山ある）と、わくわくするような答である。とにかくツラギ山の西に湖があり、ムシコーラの北側には滝が沢山あるというわけである。

予定のクディ部落までは行き着けないが、何とも嬉しくなるようなニュースに足取りも軽く、ひょどり越えの逆落しの急坂を一気にかけ下る。

八日、すぐにマルシャンディに出る。ときどき日射しが明るく照らすが、雨雲は低くたれ込めて暗い。二年前、ヒマルチュリ帰途の記憶がよみがえってくる。何となく顔なじみに会ったようになつかしい気持ちだ。ポカラからマルシャンディまでは雨期と乾期では道が違うので、ヒマルチュリのときと違った道を通って来たわけだ。

二年前にキャンプしたクディのマンゴー園が川向うにすぐに見定められる。それにしてもマルシャンディの水は何と

澄んでいることか。雨期とは全く違っている。上流に氷河がいくつもあっても、今年はまだ寒いのだろう、全然濁っていない。

クディの町は日本隊にはなじみ深い所である。おいおいと人が集まって来る中にツラギと言い出す者がいた。「カハン、ジャンネ」（どこへ行くか）と問えば「チプラ」と答える。P二九の西方、マルシャンディ左岸の部落である。彼は行商らしい、彼の言うところではツラギとは地域の名でP二九はツラギ山（ヒマール、ツラギ）、湖はツラギ湖と言う。また夏は行者がみそぎに入るが、冬はチプラのような所からは雪が多くて入れない。しかし南側のムシコーラからは冬でも入れるのではないかとのこと。お前も湖を見たかと聞くと、自分はないが友人が見たと言う。言葉のはしはしに本当らしい感じが出ている。

思わぬところでもうけものをしたと、マンゴー園を横目に見て先を急ぐ。物凄い夕立ちにふるえながらブルブレに着いたが、クーリーはまだ大部遅れているようだ。

びしょ濡れでキャンプ地を定める。すぐ横にチベット人の家が二軒ある。ヒマルチュリの時の経験からロキシー（焼酎）があるなとわかると寒い体が承知しない。飛びこんで二杯、三杯と呑むうちに、ほかほかと暖かくなり落ち着いて来た。ここは居酒屋兼木賃宿である。宿と言っても土間があるだけ。チベットから塩を運び、ネパールから米を運ぶ行商人や牛飼いの泊る宿である。二年前のことを一杯機嫌でもうろうと思い出すうちに変な錯覚に落ちた。横にチベット娘がいる。顔なじみの様に、ニヤニヤ笑っている。向うがこちらを知っているらしい。「タパイコ、ナム、ケー、ホー」（お前の名は何だ）「ソン、プチ、ドクター、サーブ」。ああそうだ。この前の帰路でマルシャンディに沿って十日近くもついて来たチベット娘である。今は結婚して旦那さんと一緒に行商の途中なのだ。偶然にも彼女の写真を持って来ていたので渡してやる。西川が横から「仏教や輪廻を信じるようになりますかね」と抹香臭いことを言い出す。

九日、今日から二、三日でムシコーラの奥まで入れるはずだが、今日は川の北側に沿って山腹をうねうねと歩くだけ。その間に一、二の寒村があるばかりである。今年はまだ寒く牛や羊を連れた牧人もほとんど見当らず、ときどき雉や鷲の飛び立つのに熊かと驚かされるくらいである。

時たま出会う村人に聞くと向うからマナスル、ツラギ、ヒマルチュリと山の名をならべて教えてくれる。中には十才くらいの少年もいた。カルカは随分多いようだ。それにしても人里離れた山地で、僅かばかりの畑、牛、羊を生活の糧に生きて行く人間の生活力には、今さらのように舌を巻かずにはおれない。ダハレにキャンプする。

十日、チトラカルカ泊り。

十一日、昨日、グルンの現地人を雇う約束をしてカトマンズ・クーリーを返してしまったのに、一向に現地人は現われない。重い荷を肩に西川とシェルパ二人、一日二往復する。ヒマルチュリはますます近くなり、昨年の慶応隊の登頂路を見せてくれるが、P二九の山頂は見えない。それにしても北側には滝が多い。果して右岸の尾根の北側に湖があるのだろうかとこれから先が楽しみである。

十二日、ムシコーラの水も少なくなった。右岸の岩壁を後にした。突き当りに、P二九とヒマルチュリの間の岩壁が雪もつけずにそそり立って見える所にテントを張った。ここは割合に広いカルカでキャンプAと仮称する。西川と二人でこの岩壁の東側を偵察する。これはP二九から西に出ている尾根への登路を見付けるためだ。とにかく、この尾根の稜線に出れば北側は一望のもとに開けるだろう。マナスルからの氷河が、この尾根のどこかを破ってムシコーラへ出ていてくれればと、はかない希望をつなぐのも、本隊の登路と日数を数えると先を急がなければならないからだ。急いだところで進むわけではない。道のない所を、足下に断崖を見下ろしてひやひやしながら岩を登ったり、ぬるぬるする苔の上を這ったり、傷だらけになって茨を分けて行くだけである。それでも所々に道か、獣道かと思われる踏跡を見つけ

てほっとする。

下りはこの踏跡と思われる所を辛うじて辿りながら帰った。僅かに一時間、登りに六時間を費しながら、下りは一時間というのは何と情けないことか。キャンプは高度三〇〇〇mを少し越えた程度だが、周りの冷気を集めて、夜は寝袋が嬉しい。

十三日、今日も例によって例の如し、西川と別れて共にシェルパ一人を連れ、西と東に分れて登ったが、やたらにかすり傷がふえるだけで高度はかせげない。しかし夕方、帰った西川は濁った谷を見つけた。氷河に続いているに違いない。この谷を遡行すれば必らず北側の氷河に出られる、と鬼の首でもとったように夕食の話がはずむ。

十四日、テントをかつぎ上げる。このP二九西尾根の南面は慶応隊がヒマルチュリからとった写真が沢山あるが、私たちの現在位置はまだまだ低い。上の稜線は五〇〇〇mを越えると思うと、全くため息しか出ない。

二人ともグロッキー気味で、日暮と共に美しいヒマルチュリの夕映えも見ずに寝袋にもぐりこむ。

この日、後から増援のために送った山本（光）山本（信）の隊が住吉隊と合流した。こんな具合でまだ西尾根の稜線へ出るルートも見つかっていない、やぶの中を傷だらけになって右往左往していたときであったから、山本（光）は反対側から遠望してルートを見つけるために慶応隊のベースキャンプまで登ってみたのであった。この附近の支流はムシコーラの河に近いあたりで滝や断崖になり、その上がカルカ地帯になっており、しかもまだ羊飼いの入っていない時で踏み跡がはっきりしないために上へのルートを見つけるのに相当手間取った。こうして何回も往復している間にルートは自然によい道になってしまって、本隊の通過には少しも支障がなくなった。以下に山本(光)の偵察日記を挙げよう。

四月十一日、十一時に住吉偵察隊の増援のため、山本（信）と共に人夫七人、シェルパのアンナンギャル、アンダワを連れてクディを出発する。ブルブレでマルシャンディを左岸に渡ってから約三十分進んだところで、隊長、尾藤パーティに別れ、ムシコーラを目指す。ツルベシの手前、約三十分行程のところで住吉隊の解雇した人夫十人と会い、隊長宛の手紙を見る。山本（光）だけ尾藤の到着を待ち、協議の結果尾藤パーティは始めの予定よりも長期、かつ高所での行動が望ましいということになって準備を整えるために引返すことにする。山本隊はムシコーラが登路になる可能性が大きいので、このまま予定通りムシコーラをつめることとした。ツルベシ泊り。

十二日、六時半出発、途中、羊飼いのどう猛な犬に崖ふちの狭い道で進路を遮ぎられ、びくびくものだったが、快調に歩き午後二時ダハレ着、住吉隊のことは、ただ通ったと村人が言うだけで詳しい消息はわからない。

十三日、八時出発、二時チトラカルカ着、テントを設営した後で、住吉隊のテントを発見した。

十四日、七時出発、九時にキャンプAで住吉隊と合流する。住吉隊は更にキャンプを延ばすべく、昨日迄の踏跡を伝って登って行く。山本（光）、山本（信）はテントの背後の草付きを調査する。

十五日、山本（光）、山本（信）はアンナンギャル、クンガノルブと共にキャンプAの背面の平均傾斜四十度くらいの草付きを登り、対岸に慶応隊のベースキャンプのあった地点が見える高さまで登ったが、踏跡がなくなったのと、地形から判断してキャラバン・ルートにはならないものと認めて午後二時引返す。

十六日、山本（信）はクンガノルブ、ヒラテンジンと共に住吉隊の設営したキャンプBに向けて出発する。山本(光)はムシコーラの対岸、ヒマルチュリ側のカルカに上って西尾根へ取りつくルートを見つけようとしたが、午後になってガスのため視界が狭く、西尾根を望見することはほとんどできなかった。

十七日、山本（光）はアンナンギャル、人夫一人と共に前日のカルカにテントを進め、一人で泊る。この日、下痢を

している山本（信）は休養。

十八日、早朝からP二九西尾根の偵察のためのスケッチをしていると人夫がやって来て住吉サーブはムシコーラを下ったという。ルートが見つかったのに違いない。直ちにテントを撤収、キャンプAに下り、正午出発、同行の人夫一人と共にぐんぐん飛ばし、午後七時ムシコーラ出合の本隊キャンプサイト着。

こうして山本（光）は本隊のキャラバンに加わるために下りて来た。このときには既に住吉は西尾根を越えるルートを発見していたので、山本（光）の反対側からのスケッチは直接役には立たなかったが、スケッチにはルートの附近がよく出ているので、住吉のルート発見が二、三日遅れたらこれが大いに役立ったことだったろう。

ルート発見、尾藤隊の行動

住吉の手記を続けよう。

四月十五日、さあ今日こそ濁った谷を溯行するのだと意気込んで起きたが、驚いた。昨日、あれ程濁っていた谷川が今朝は全く透明そのものだ。あ然として西川と二人で顔を見合わす。上流に土崩れでもあって、夜は凍ってしまうので、朝だけ透明なんだろうと、がっかりしながらも、また岩登りと茨はらいで、細々とした踏跡をたどる。正午過ぎ驚くほど広々とした台地に出た。やはりカルカだ。こんな所にこんなカルカがあるのかと改めて見渡す。谷あり、川あり、丘あり、南は開けているが北は岩壁が塀のようにそそり立ち、スカイラインはガスで見えない。高度は三九〇〇m余。（最初キャンプCと呼んだが、後に雲上カルカと呼ぶようになった所である。）東西に長いこの台地の上を端から歩けば三時間や四時間はかかるだろう。しかもモレーンのある谷が二つほど見られる。よし、明日はテントを上げてやろう。P二九奥の院を見る日も近いぞと、頭痛のする西川を慰めながら帰る。

十六日、早く登れば遠望できると、急いで出発。上のカルカに着くとまだ雲はかかっていない。見える。P二九西尾根の稜線、そして、その向うには頂上が高々と聳えている。あのコルに登れば謎の地域が見えると急ぎスケッチをするうちに早くも雲がかかってしまって視界が悪くなる。昨日見たモレーンのあった谷はただ西尾根だけのものだった。時間は早いが雪が降り出し、見る見るうちに台地一面真白にしてしまう。

西川も今日は頭痛もなく愉快そうだが、確かにグロッキーだ。明日こそコンクルジョンをつけてやろうと奥の地形を

想像すると、なかなか寝つかれない。

十七日、快晴にあけた。シェルパ一人と一番近いコルへ。西川は希望により他のシェルパ一人と東側ルンゼへ行くことにする。食事にうるさい西川の朝食準備がもどかしい。

昨日の雪のためかラッセルがある。雲が出ぬ間に稜線まで行き着かねばと急ピッチで登る。シェルパの方が後から遅れ勝ちで、ラッセルは自分一人だけ。コルから見た景色はどんなだろうかと胸がわくわくする。三時間で登りつく。コルは想像したようなナイフリッジでなくて一安心。急ぎ向う側をのぞいて呼吸を止めた。土をかぶった大氷河が一八〇度転回して北上しているのが足下に見渡せる。マナスルから南西に出る尾根（六七〇〇峰）の末端が視野の中央で急角度に聳えている。この尾根とP二九の間には既にガスが出始め、そのガスの上、遥かにマナスルが高々と尖峰を見せている。

P二九の赤茶色と対照的な六七〇〇本峰の白さ。そしてこの間から流れ落ちる氷河は一五〇〇mくらいの落差で、まぶしい蒼色に輝いている。赤と蒼。その両側にそそり立つ氷壁と岩壁。現われるかと思うとスーッと消えてしまうが、ガスの上にはマナスルの尖峰が浮かんでいる。

六七〇〇峰の近々とそそり立つ尾根の末端の左（西側）には土をかぶった氷河が雪のカールに抱かれ、蛇のように長々とうねっている。この一木一草ない荒漠たる視野の中、氷河の下流にはエメラルド色の湖水が宝石のように輝いている。

ああ、やはり氷河は北にまわっていたのかという地形の解明より、何とも言えない、その景色に呆然として見入っていた。

「登路」と気がついて、急ぎ足下を見下ろせば、嬉しいことに比較的緩い傾斜がカール状に氷河側縁まで下りている。

写真、スケッチと急ぎとるうちに早くもガスでP二九、マナスル、六七〇〇峰と見えなくなり、ただ赤と蒼色の断層とそれに続くエメラルド宝石をつけた土色の蛇のうねりが見えるだけである。このコルの高度は四九〇〇m。篠田隊長へ報告のため、急ぎ帰幕し、手紙を持たせてシェルパを走らせ、私自身も一人でキャンプAに下りる。

コルが約四九〇〇m、登路としてはどうかといろいろ考えつつ、見たいものを見た満足と登路としても一応使えそうだという安心感で間もなく眠りにつく。明日は一日で本隊のいるクディまで突走る予定。

十八日、コルから人跡未踏の地獄を覗いた興奮と何とかルートになりそうだという喜びで、来るときは十日もかかった五〇〇〇mのコルから一気に足取りも軽くクディの本隊へと突っ走る。同行のシェルパが遅れがちだ。

夕暮迫るムシコーラ河畔の黄色いキャンプでポカラ以来二週間ぶりに会った篠田隊長との握手は固く、また隊長の嬉しそうな顔は薄暗い中にも忘れられない印象を私に残した。

夕食のうまいことはもとよりのこと、二週間ぶりに安眠した。

こうしてベースキャンプへのキャラバンルートの見込みはついた。この氷河が登頂ルートとして使えるかどうか、その晩詳しく検討してみたが、氷河の右側を通ればアイスフォールの突破は不可能ではあるまいという結論に達した。それにしてもアイスフォールの危険性が問題である。そこで西川を三九〇〇mのキャンプに残留させ、コルに上って連日なだれの模様を観察させることにした。

キャラバンルートをムシコーラに選ぶまでにはこれが他のルートよりも有利という確証を得なければならない。ムシコーラへ入った隊がルートを発見する以前に尾藤隊はチブラルートが見込みのないことを確認していたので、住吉からの報告を受けると直ちにムシコーラへのキャラバンに移ることができた。もっとも、それ以前からキャラバン出発は二

十日頃と予定して人夫の募集には着手していた。以下は尾藤の手記である。

四月十一日、山本（光）、山本（信）の両隊員は住吉偵察隊の後を追って彼らを助けるためにムシコーラへ、尾藤、兼清はムシコーラとマルシャンディとの分水嶺をなしている尾根の頭に登り、できるかぎりの観察を行なうために相ついでクディを出発した。

ツルペシの手前の峠まで来ると待望の住吉偵察隊からの連絡に接した。それにはマルシャンディ側のチプラという所からの偵察の必要性を強調してあった。それは土地の人間はチプラから例のP二九の西懐の湖に行くということを聞きこんだからであった。こうなると、湖がP二九の登路と関係があるものとすれば、チプラから湖というキャラバンルートが考えられる。分水嶺からの観察という漠然とした偵察は考え直さなければならない。直ちにクディに引返し、隊長と協議の結果、翌十二日から五日間の予定で、チプラに焦点をおいてマルシャンディ側からキャラバンルートの偵察を行なうことにした。五日という期間は住吉隊からのつぎの報告のタイミングを考えてきめたものである。

十二日（晴）十一時クディ発。ムシコーラの下流、ナディコーラの竹橋を渡って峠へ出て、ムシコーラの上流に向かう道と分れ、四時過ぎボンダラ（一三〇〇m）着。マルシャンディの左岸で登山隊は珍らしいので大勢の村人が集まって来る。大きな紙をとり出して早速聞きこみを始める。その結果、チプラ部落への道程、P二九の方向にドウトウ・ポクリ（乳の湖）があること、ボンダラには前にこの湖へ行ったことのある老人がいるが今は留守であること、ヒマルチュリの方向にバライ・ポクリ、ミニイ・ポクリがあることなどを知った。このあたりでは湖のことをポカリと言わずにポクリと言っていた。

ダノルブ・パサンテンバの通訳に、さらにシャンゲで吊橋の建設に当たっているという男の片ことの英語で、ともか

くチプラが間近にあることを知って喜んだ。マルシャンディ側からP二九西面の内院に入るにはボンダラよりも遙かに北、ジャガートでもまだ南により過ぎているように思われるので、どうもおかしいと思ったが、明日着けるチプラに寄せる期待は大きかった。

十三日（晴）六時、モーニング・ティーだけで出発。一時間半でマルシャンディの河原に立つ。竹橋を渡り右岸に移って間もなく、戸数三、四戸のカニーに着く。

カニーでは誰もチプラを知らなかった。カニーから上流では道は河原から余り高くない所を進んだ。ジャガートの手前、道が高捲きの急坂に移る所で始めてチプラの部落が見えた。対岸の遙か高い所で人家が点々としている。すぐ下にある竹橋（増水すれば直ぐ流れてしまいそうな）を渡り、一気にチプラ部落に上った。河原からの高度差四〇〇m。畑仕事に出て部落は空に近かったが、ようやく数人をつかまえて聞いたところ、ポクリは噂には聞いたがよく知らないとのこと。せっかく住吉偵察隊が聞きこんだチプラ部落なので、夜まで待ってポクリに行ったことがあるという二人の男に会うことにする。

夜、彼らから得た情報はポクリまでは三、四日かかること、今は雪が多くて行けないことなどで、その位置とか、そこへ彼らの行く目的などは聞き出すことができなかった。

一向に要領を得ないので、チプラから適当に登って尾根に出てみてはと考えたが、他の人によるとチプラの南隣りの部落からは毎年家畜を追って多くの人が上るとのことであったので、期待して来たチプラに見切りをつけ翌日南隣りの部落を通って上へ出てみることにした。

チプラは二つに分れており、北にあるのがウブラ・チプラ、南がタロ・チプラである。

十四日（晴）七時半出発、マルシャンディ・コーラの河原より四五〇〇m高い所を水平にトラバースした道を南行し

て、ニーリョンの部落に着く。ここでも要領を得た聞きこみができなかったので、予定通りカルカの道を辿って急坂を直登した。四時半、森林限界の高度三三〇〇mの尾根の上に出た。残雪が見られる。

この尾根はムシコーラとマルシャンディの支流の分水嶺で、右手正面にはヒマルチュリが、左手には峨々とした西尾根の上に赤ちゃけたP二九の巨岩峰が実に間近にのしかかるように聳えている。後手にはナムン・バンジャンからアンナプルナ連峰が一望のうちに収められた。

明日はこの尾根を通って西尾根とのジャンクションと考えられる岩峰に出る予定である。（その後、この岩峰はジャンクションから南西に出ている尾根の瘤であることが明らかになった）。ここから北を望むとジャガートよりも北に上の方が大きく広く開けた谷がマルシャンディに落ち込んでいる。この地形を眺めると、やはりマルシャンディを深く北に入って偵察を行なうべきであったことを痛感する。

十五日（晴後曇）七時出発。十一時半四〇〇〇mに達した。その頃から出て来たガスの中を雪稜をたどって、岩峰手前のコルの高度四三〇〇mまで達した。岩峰はとても登れるものではなかった。従って岩峰の向う側と西尾根との関係については何ら知り得るものがなかった。

本偵察行は失敗に帰した形だが、今となっては再挙、マルシャンディをさらに北上することは時間的に許されない。我々の観察したところではこの尾根はキャラバンを進めて、隊全体が越せるような地形ではないと判断した。だからと言って偵察の方向をジャガート以北に切り換えることは許されなかった。ともかく、我々は一応本隊に復帰しなければならない義務のようなものを感じて、止むなく食い足りない不満足な気持ちで下山することにした。

十六日（晴）三三〇〇mの地点から一気に八五〇mのクディに下った。ニーリョンからサンジャプールに下り、ボンダラを経て往路と同じ道に出たわけである。

こうして尾藤隊は十六日、四時クディに戻って来た。それより一時間ほど前に人夫五名に托した山本（光）からの手紙が来て、十四日には住吉隊は有望なカルカを発見して、そこにキャンプしたことを知った（キャンプB）。尾藤、兼清も始めて四〇〇〇m以上を踏んだという喜びはあっても、主目的のルート発見が否定的な結果に終って、食い足りない気持ちで帰って来たが、ムシコーラ隊の方には何となく明るい見通しができかけていただけに「チプラ・ルートはキャラバン・ルートには使えない」というニュースは私にとっては決して悲観的なニュースではなかった。

トンジェ方面の偵察ということも、もちろん考えていたことであり、このことについては始めからの課題であった。ムシコーラからという線が強く出た後でも、念のため、せめて聞き込みのためにトンジェ附近まで行ってみることを考えてみたが、それには私とカルマオンチュウが当らなければならない。そうなるとクディの本隊には隊員は小秋元一人ということになって、人夫の出入、賃金の支払い、物資の調達、つぎのキャラバンのための人夫の募集等仕事はいろいろあって、とても隊長不在ではさばききれるものでない。

そんな事情で飛行機上からの観察の結果を飽くまでも確信してジャガート以北の偵察を行なわなかったのである。

クディ滞在

クディ到着の翌日、山本光二と共にブルブレの少し先まで行って住吉らは二日だけ本隊よりも先行していることを確かめて帰り、その晩、到着したばかりの尾藤、兼清を加えて明日からの行動を協議した結果、住吉先発隊が手薄なので強化の意味で山本光二、山本信樹をムシコーラの谷へ、尾藤、兼清をムシコーラ右岸の尾根へ登らせることにして、兩隊は翌十一日朝出発し、篠田、小秋元は当分ここに残留することにした。

十六日の夜に入って尾藤、兼清の隊が帰って来た。彼らはムシコーラの谷を渡って少し登ったところ、ツルベンとボンダラの分岐点のあたりで住吉からの手紙を持った人夫に会い、マルシャンディを少し上流まで遡る必要を感じて、態勢をたて直すために戻って来たのである。

彼らはマルシャンディ左岸のチブラの近くのサンジャブルから登って四三〇〇mあたりまでに行き、その先に湖があって、これがP二九の登路と関係があるが、今はキャラバン・ルートとして使うことができないことを確かめて帰って来たのであった。

クディのマンゴー園はマルシャンディとバランコーラの合流点に臨み気持のよい所であるが、つぎの行動を起こすには少し不便な点がある。そこで十七日キャンプを移動してブルブレの吊橋を渡って左岸に出て、ムシコーラの合流点附近の田圃の中に滞在することにした。マンゴー園の外れのところのしゃぼてんが大きな黄色の花をつけているが、道にその太い幹を倒している。何のためかわからなかったが、夜になると豹が出るためのようだ。このあたりの豹は羊や犬

を襲っても人間に危害を加えることはない。しかし、物騒なものであるから巡査にパトロールを頼んでみたが承知してくれない。理由をただしてみるとマンゴー園の前の河原は死骸の棄て場で、殺人もあったところで、幽霊が出るから巡査も夜は寄りつかないためである。ネパールの幽霊は骸骨で日本のと違って大部西洋のに近いところがあるようだ。

十八日、一泊の予定で、尾藤、カルマオンチュウ、パサンテンバ、人夫二人と共にムシコーラ左岸の尾根へ取りついて、できるだけ高い所まで登り、西尾根その他を望見するつもりで出掛けた。ムシコーラの左岸を溯行してツルベシの直下まで来て、竹橋のそばで休んでいると、そこの人家でツルベシの村へ登山隊員が二人上から下って来たという情報が入った。すぐにパサンテンバを連絡にやると間もなく、アンナンギャル、アンダワの二人と共に下って来た。彼らは住吉の手紙を持っており、それによればついに西尾根を越えるルートを発見して、P二九とマナスルの間のコルからアイスフォールを経て氷河湖に続く大きな氷河も見付け、これがルートとして考えられることを明らかにしている。非常に大きな収穫である。すぐにもキャラバンを進めなければならない。一旦ツルベシまで登ってキャンプ地に引返す。その夕方、住吉、山本（光）が下りて来て、キャンプはにわかに賑やかになった。

ここで登山隊は珍らしいものに出合った。これは長いワイヤロープを運ぶ一隊である。ワイヤロープを長く張って、それに大勢の人がつき、肩にかついで、ナイケの号令で文字通り長蛇の列をつくって運んで行くのである。スイス人の技師がジャガートの附近で吊橋をつくっているので、彼らはこうやって幾日も幾日もかかって山を越え谷を渡って、グルカからジャガートまでワイヤロープを運んで行くのである。

十九日は休養と準備、二十日午後になって漸やく第二次のキャラバンに移った。

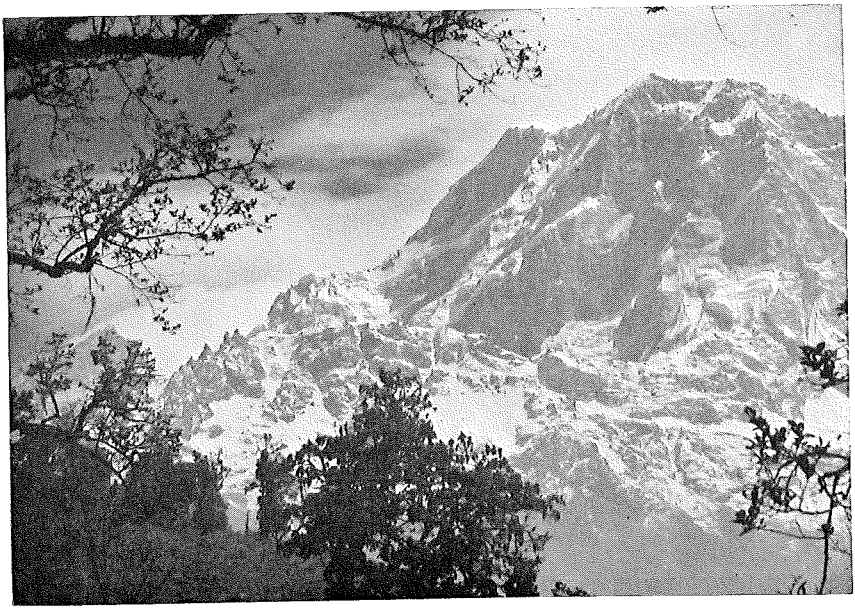
第二次キャラバンと雲上カルカ

四月二十日、一部の荷物はまだクディに残っているので、出発も遅れて午後になった。ツルベシ泊り、この登山隊には医者が二人もいるが、一人は先発、他の一人は後発で共に本隊に加わらず、医療品の箱とも別れて行動していた。だから今まで現地診療を見学する機会もなかったが、今度は隊員六名で医者が二人だ。例によってツルベシでも伝え聞いていろいろな病人がやって来る。医療担当は尾藤だから彼は応接に暇がなく、うみではれ上った足などテキパキ手術をして行く。翌朝は恢方に向かって、卵を持ってお礼に来るところなどは今までの登山隊と変りがない。

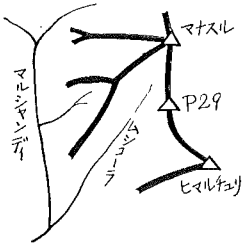
二十一日、キャラバン中最初であって最後の夕立ちに会う。海抜二〇〇〇mのダハレに近くなると道は断崖で、牛や犬とすれ違うときにはひやひやするところだ。

この崖のふちで突然プロパン容器の一つがふき出した。傍にいた住吉は小秋元やポーターを避難させ容器を谷へ放り込もうとしたが、しっかりくくった荷は簡単にははずせない。しばらくすると危険もなさそうだということに気がついて、急いでバルブを締めて事無きを得た。あまり大きなロスはなかったようであった。プロパンは噴き出しても、ブタンをガスライターのタンクにつめるときに経験するように温度は下るだけだから少し注意すれば少しも心配はないのだが、やはり経験がなくて、しかも危険な場所ではあわてざるを得ないだろう。

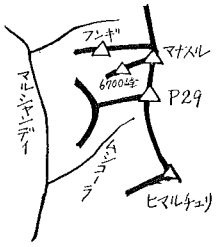
二十二日は空がよく澄んでいる。人夫も八時頃からぽつぽつ出発したが、昨日の難路に怖れをなして十一人が帰ると言いだしたので新しくダハレの村で雇い入れることにした。



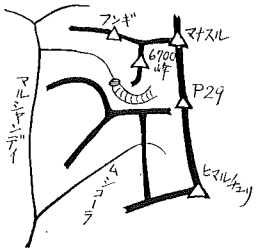
雲上カルカの登路から見たＰ29
（右の高いのが南峰，その左が本峰，左下の枝の間からマナスルが見える）



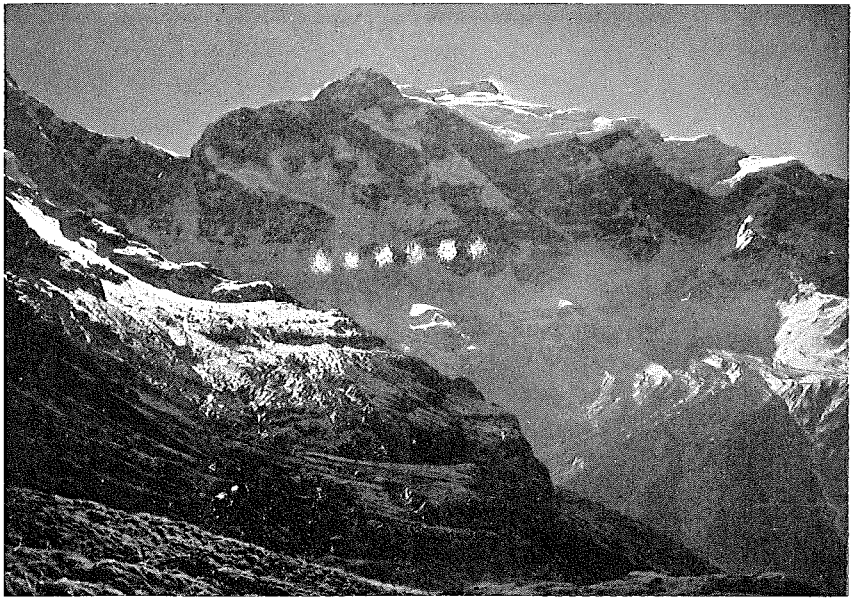
1956年
日本山岳会マナスル隊



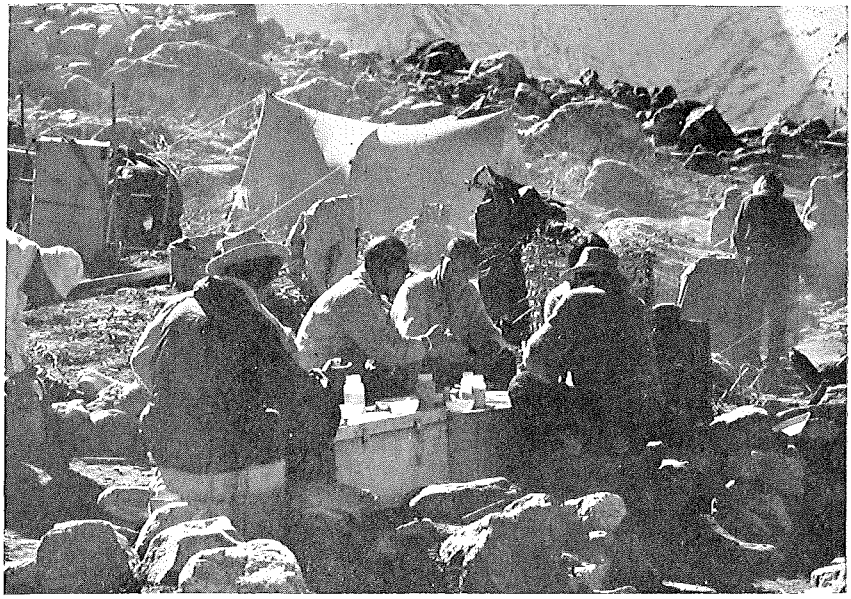
1960年
慶応隊の成果から描いたもの



1961年
阪大隊の得たもの



雲上カルカ付近から見たヒマルチュリ



雲上カルカの朝食

ダハレの村は脊後の巨岩、チベット語でグルンサマル、ネパール語でムリンチャムと言って共に巨岩の意味で特別な名はなさそうであるが、これがダハレのシンボルとなっている。この巨岩のほとりにはじや香鹿も棲んでいるという山奥で、冬には交通が杜絶する。こんなところへ来るとクディ附近のネパール人は元気がなくなる。何とか理くつをつけてサボリたくなるし、ストという形に発展する。

果してストが起こって人夫たちは前進をしようとしない。見ると老人がせん動している。アジーバやロカに説得させても彼らには説得するだけの能力はない。今日の予定はチトラカルカの上のキャンプA、明日は雲上カルカへ到着したい。それにはストを賃金の方で有利に解決しても、二日行程が三日になっては何もならない。そこで、もむだけもませて、時間を見計らって彼らの要求を呑むことにする。要求を呑んだと言っても二日分の賃金を要求するような無茶なものではなく僅か一日一ルピーの賃上げだから、賃上げよりも時間が浪費される方が隊には不利になる筈だ。チトラカルカに到着したのが四時少し前、ここは二七〇〇mに近く、人夫は遅れているのでこれ以上進むことは無理なので、場所は少し狭いがキャンプすることにする。

二十三日は朝食もとらずに出発、三〇七〇mのキャンプAまで登って朝食、ここで山本信樹に再会した。三四五〇mのキャンプBを経て尾根を登るとやがて三九五〇mのキャンプCに着いた。ここは誰言うとなく雲上カルカになってしまった。広々としたカルカで、今は時期も早いので近くの谷には残雪もあって、カルカの施設が残っているだけで、草もまだ萌え出していない。

隊員が到着したのは三時四〇分、その後数人の人夫が上って来ただけで大部分の人夫はキャンプBの上で停滞してしまった。事実、彼らとしてはこの高所、しかも吹きさらしの中では眠ることもできないだろうが、人夫が上って来ないのは困ったことだから、ロカとシェルパ三名を説得に下ろした。ここには西川がずっと残留して、住吉コルからのアイ

スフォールのなだれを観察していたので一応キャンプ地は整備されているが、隊員、シェルパ全員が泊るだけの余裕はないので、どうしてもシェルパの一部を下に降ろす必要があった。

この日のストでは例の老人はこれから上へ行く者は全部、足を折ってしまうと、いきまいて形勢は険悪であった。サーダーのアジーバはおどおどしてしまって何の役にもたたない。兼清は素早く小生のプライベイト・ボックスの中からシュラーフ、ザックを抜き出して登って来てくれたので大いに助かった。

二十四日も相変らず上天気、八時頃から人夫はぞくぞく到着した。ここまでは昨日の予定だから昨日の賃金六ルピーでよいはずだが特別にボクシス（チップ）として一ルピー与える。また住吉コルとの中間の雪と草の境目まで荷を運んだものには別に四ルピーを与えるので計五ルピーを与えると言い渡した。しばらくすると例の老人がやって来て六ルピーになれば荷を運ぶと言いに来た。こうなれば彼らの足元は既に見えている。これから先の荷上げは一日に二往復はできるので人夫全員の必要はない。老人の言うことを聞き流して追い返し、その間にチベット人の説得にとりかかった。チベット人夫はとにかく今日、一度荷を上げてみるという。こうなったらチベット人だけで荷上げができる。ネパール人は全員帰ってしまっても一向に困らない。

それよりも、今日のうちにある程度の荷上げがしたい。それにはネパール人夫を早く返してしまうことだ。

ついに今日の賃金一・五ルピーで妥結、結局クディからここまで始めの二日は一日五ルピー、後の二日が六ルピーづつ、今日の分を入れると合計二三・五ルピーだから強行四日として一日当り六ルピーに足りない。インド隊が本街道のキャラバンで一日六ルピー出しているのだから、この程度ならば仕方がないわけだ。今度の隊には、幸か不幸かナイケが逃げてしまって、面倒なことがあった代りにピンはねする者もいないので却って有利な面が多かった。とにかく本街道を離れてムシコーラの山道へ入った方が平均賃金が下がったのはこのためと言えよう。

賃金の支払には銀貨を使った。チベット人の中にも行商人がいて、これらは帰って行ったが、十人は銀貨の魅力のためか残留した。またネパール人の中にも、後からこっそり戻って来て使ってくれと言うものが二人現われた。

荷上げは翌二十五日も続いたが、二十五日の朝になるとチベット人は荷物一個について五ルピーを要求して来た。荷揚げ人夫が自分たちだけになったと見ると早速彼らの本領を発揮し出したわけだ。飽くまで突っ張る彼らをしぶしぶながら四・五ルピーで承知させ、ピースの空缶を見せびらかした、今日の中に二回荷上げした者にはデポ地で渡すと宣言すると、現金なもので早速荷上げにかかり、十一時に第一回を始めたにも拘らず、その日の中に全員二回以上の荷上げを完了して、万事予定通りに進行した。

雲上カルカの附近を歩いていると、四十年前、美ヵ原の高原地帯を歩いていた頃が思い出される。四月の美ヵ原も当時は全くこんなカルカ地帯で、まだ馬も登って来ていない。草の様子も全く同じようだ。

ムシコーラを隔てて前の年の慶応隊のベースキャンプの位置がはっきりわかる。そこよりも、ここの方が高い。今まで谷間ばかりを歩いて来て、漸く高原地帯に入り、しかもここで始めて隊の全員が揃った。ポカラ空港で極く短かい時間だけ、全員が揃ったことはあったが、その時はバイロワから飛んで来たばかりの兼清は直ぐにカトマンズに飛ぶよう命ぜられていて、荷物がぞくぞくと到着し、その整理に追われていたので、全員で揃ったことを楽しむ暇もなかった。

夕方、P二九やヒマルチュリの美しいアルペングリュンが消えると、食事、それから焚火のそばに集まって楽しい雑談がはずむ。今まで別れ別れに行動していて、例えば私も西川とは二月十七日に神戸で別れ三月十日カルカッタで会って、十四日に別れ、四月三日にポカラで会ったと思ったら、翌四日には住吉と共に出発してしまったので、また二十日間ほど顔を合わせる機会がなかったわけだ。こんなわけでお互いの間の話題は豊富にある。

二十五日には住吉コルに行き二十六日はウェスト・コルへ行った。西尾根に平行に何回も谷を越えて三時間ほどで達

することができる。標高四六〇〇m。西尾根はこのあたりで、北と南西に分岐し、北へ向った尾根は西に向きを変え、その末端近くに北アルプスの毛勝を思わせるような岩峰がある。ウエスト・コルは完全なジャンクションでなく、南西の尾根のジャンクションに近い所である。このあたりは標高は低いが残雪が多く、今まで何回もの聞き込みに出て来たドウトウ・ポカリという牛乳のように濁っていて、チベット人が信仰の対象にしている池はこのあたりのものを指しているようだが、池は大小数個あって今まで聞き込みから想像していたような大きな一つの湖ではなかった。

このあたりにはカルカが幾つかあって、チプラからもダハレからも達することができる。しかし、ここから西尾根を越えようとすると大きなガレと岩が邪魔して軽装備ならばいざ知らず、とても荷物を持って越えられるような所でない。雲上カルカからここまでの間、また東の方にも越えられそうな所は見当らない。ここまで来て、住吉は実によいルートを見付けたものだということをつくづく感じた。

キャンプに帰ってみると、既に人夫たちだけで五十八個の荷物を揚げてしまっていた。シェルパや隊員も荷揚げに加わっているので既に仕事は相当はかどったわけだ。

荷物のデポ地点からコルまで続々と荷揚げが進行している。既に滑車によるコルからの荷下げも開始されている。こうなると、つぎはベースキャンプの設置だ。二十七日、住吉、西川はコルを越えて、ベースキャンプの設置に出発した。

この日、東の方へ少し行って、西尾根から南へ出た尾根の末端がヒマルチュリから西北に出る支尾根と握手し、その下をムシコーラがトンネル状に流れている地形を上から確認しようと思ったが果せなかった。谷から登って来る途中では明らかに、この珍らしい地形が認められるのであるが、上からではやはり無理だ。

二十八、二十九日、共に天気はあまりよくない。滑車による荷下げは滑車は東京機器工業の特製で車は古河電工のプ

ロペラ材という一級品だが、カール地帯の雪が腐っているため快調とは言い難い。しかし、もう既に相当進んでいる。そこで三十日、肛門の病で寝ているヒラテンジンを残留させて、他は全部ベースキャンプに移ることにした。

ベースキャンプ設定

昨二十九日夕方に積雪があって、この日の出発は少し遅れて九時五十分になってしまった。天気はあまりよくない。住吉コルまでは半分は氷河の跡の草付き、それから先は雪の上を歩くわけだ。コルへ着いたのは一時過ぎ、この頃から最悪のコンディションになってしまった。

山本（信）、兼清が滑車を使って荷下げをやっているが、彼らはエンジニヤだけに安全確実を信条としているためか、どうも思ったほど進行していない。この悪コンディションではキャンプに必要な最少限の物資だけは至急下ろす必要がある。尾藤、山本（光）に至急下ろす必要のある物資の仕分けを頼んで、カールを降り、カールの底に設けた荷下げ用の中継テントに入って昼食。

本隊の中には雪の中を歩いた経続のないネパール人がいたが、コルからザイルを張ってあったので、大した問題もなかった。しかしリエゾン・オフィサーのロカは腹具合が悪く昼食もとらない。ポスト・ランナーのドルジェ少年も始めての寒さでアイゼンの紐を解くこともできないほど、寒さにふるえてしまった。

三時過ぎテントを出発、既に本隊はアジーバを先頭にアンナンギャルを後尾にして先行してしまったので、踏み跡も直ぐに消えてしまうような降雪の中を急行する。幸にヤッケを上下ともつけているので快調だ。間もなく追いついて、四時過ぎ住吉、西川に迎えられてキャンプ地着、

雪の中で雷が鳴っている。積雪は十センチに達し、この雪で昨日まで出ていた雪解の水も止まってしまった。夜に入

って雪も止んで月が出た。住吉が地獄のようだと形容した一木一草もない、土かぶりの氷河のふちから見るP二九、マナスルは誠に物凄いものがある。

防寒具も不足で、この晩は相当に寒かった。住吉も腰の痛みを訴えているが、それでも盛んに活躍して、ふるえているシェルパを督励し、とにかく、一晩の雨露を凌げるのに必要な施設を造ってくれた。

翌、五月一日朝、起きてみると昨夜の新雪は十五センチほどに達していた。昨夜、上のテントで泊った尾藤、山本（光）アンダワも十時過ぎには到着、物資も段々と集まって来てストーブも焚かれ、ようやくベースキャンプらしくなって来た。この日、上のテントとの間の無線通話に成功、感度はなかなかよい。

ベースキャンプの高度は四三〇〇m、ツラギ氷河の堆積の上だ。附近はまだ荒涼として緑というものを見出だせない。対岸、巾一キロの氷河を隔てて向う岸を見ると黒いものが見える。シェルパの眼はこれを枯木で燃料になると判断して、氷河を越えて取りに行くが、氷河は土かぶりで、起伏が劇しく、その上に所々に流れや水溜まりがあって楽な道ではない。左の方は六七〇〇峰の支尾根の終るところから、ゆるやかに北に曲がっていて、その先に氷河湖があるが、ここからは見えない。

右の方を見ると氷河の奥にマナスルがそそり立っている。ここから見たマナスルは障壁のような感じで、マナスルを「とかげ山」と言った、住吉がパグルンパニで会った現地人の言がもっともなこととうなずける。

氷河の本流は明らかにマナスル、六七〇〇峰の間から出て南に流れているが、支流はマナスルとP二九の間のコルに達している。

この分岐点まで行けばコルまでは大した問題はなさそうであるが、問題はそこまでどうして行くかである。ツラギ氷河はベースキャンプから二、三キロは土かぶりで汚れているが、その先がデブリで真白になっており、その先に露岩、

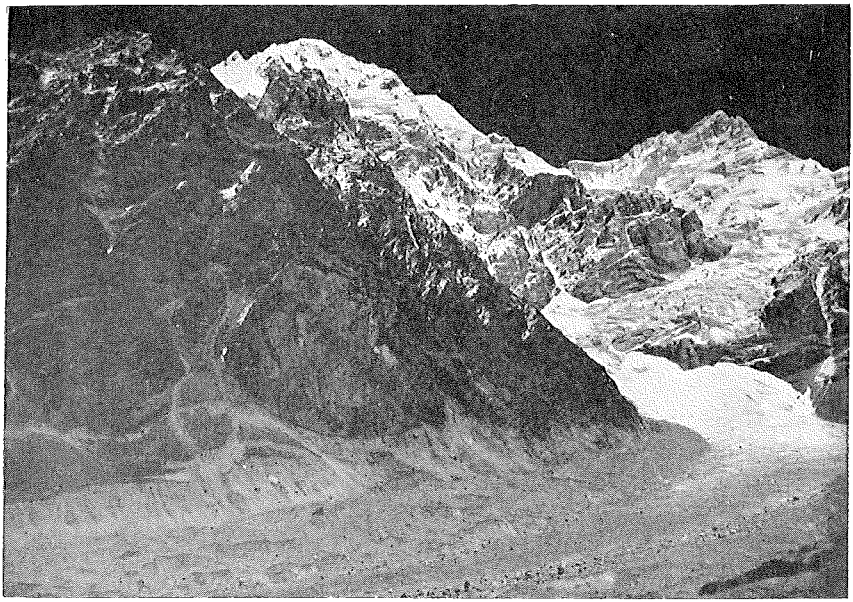
それから先は複雑な形のアイスフォールとなっている。

この氷河は未知のものだっただけに名前はないようだから、一応ツラギ氷河と呼ぶことにする。P二九をツラギと呼ぶことには問題があり、今までP二九で通って来たものを、今さら現地名がわかったからと言って改名するのもどうかと思われるが、この氷河は新発見のものであり、ツラギというのは、若しP二九の山名でないとすればこのあたり一円の地名の総称であるから、不自然な呼び名でもなかろう。

ここにもヒマラヤの例に洩れず定期便とも言えるような天気が訪ずれる。朝のうちは晴れているが、午後になると霰か雪がやって来る。それが落ちつくすとまた天気がよくなる。すると上昇気流がおこって雲ができ、しばらくするとまた降り出す。その度ごとに気温はテントの中で三十度というところから、一ぺんに零度くらいまで下る。ひどいときにはこれを何回も繰り返す。夕方近くなって積もった雪は翌朝まで消えない。これが強い日射で消え尽くすのは正午頃になるので、正午過ぎから、これが雪や霰になって降って来るわけだ。風は概して弱い。だから、盆地の中で太陽を熱源とする大きな蒸気機関が働いているような形だ。

水は夜になると涸れるが、正午頃から雪が解け出すと共に僅かながら流れ出すので、それほど不自由ではない。しかし、何と言っても北斜面で、谷の中の環境はよくない。ここにベースキャンプを定める前、雲上カルカをベースキャンプとして、ここをアドバンス・ベースにしようかという案も出た。登頂活動で疲れた体を休めるのにはここの環境はあまりにも悪すぎるというのが理由であったが、雲上カルカへ出るためには疲れた体でコルを越えなければならないし、雲上カルカは帰りに通るかどうかもはっきりしないので、結局、撤収して荷物も全部ここへ運んでしまったのであった。私の心の中には雲上カルカ滞在中にウェスト・コルへ行って、北の方を眺めたときから、帰りのキャラバンはトンジェ・ルートというように定められていた。

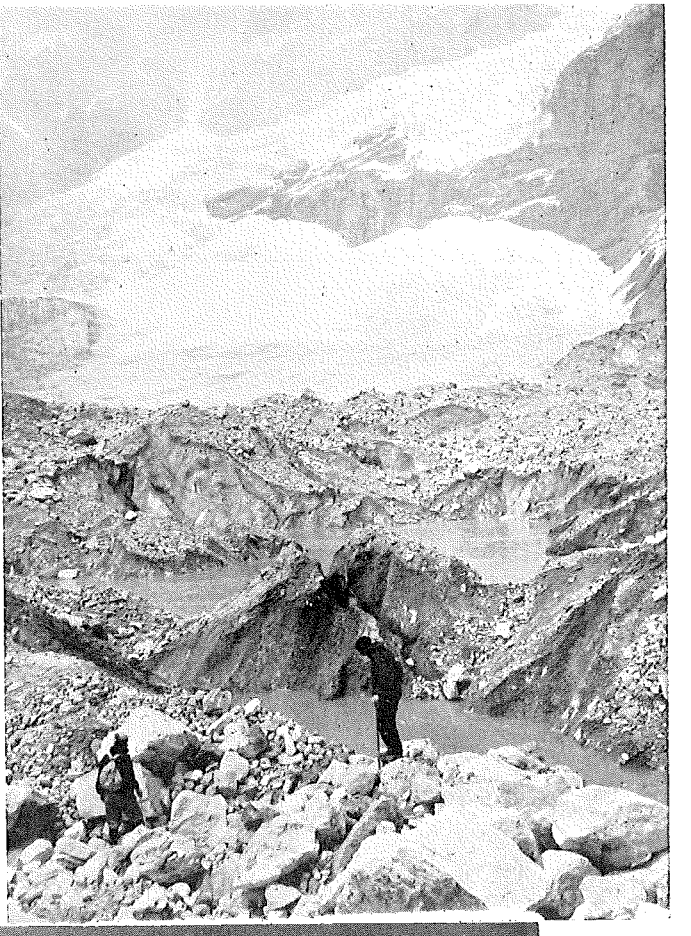
ツラギ氷河上から見たP29



ベースキャンプ附近からツラギ氷河の上にマナスル（右）と6700峰（左）を望む

P29本峰からのなだれ

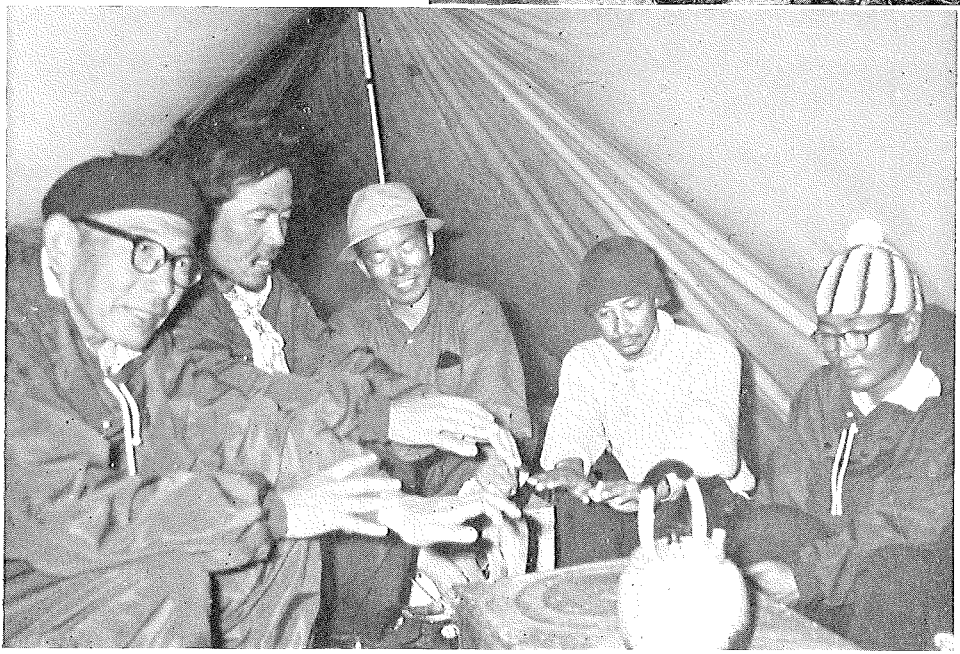
ツラギ氷河の上流，土かぶりの氷河の中の池



ツラギ氷河の末端と氷河湖
（遠くチベット境の山々を望む）

登頂断念宣言と
今後の方針の指示

ベースキャンプにて
食後の一とき



ついに登頂断念

四月十七日、住吉がコルから氷河を見たとき、これが登頂ルートとして考えられるという結論を出したのは、大きなアイスフォールがあっても、汚れて安定しており、何とか通れないこともなさそうだということからだった。しかし、アイス・フォールの下には岩壁が露出している。氷河の活動が激しくなれば当然、ここを落ちるなだれを予期しなければならない。また六七〇〇峰からは非常に急なルンゼが一本出ている。その上には氷が層をなしていて、オーバーハングになっている。当然ここからのなだれも予想される。

そこで、雲上カルカに残留した西川は連日コルに登ってなだれを観察した。前者、アイスフォールの末端の岩壁を落ちるものをAなだれ、後者の六七〇〇峰からのをBなだれと呼んでいたが、観察の結果では、一日七時間ほど見ているうちにAなだれは三回程度おこるが、Bなだれの方は三日に一度くらいだとのことであった。しかし、なだれは次第に激しくなる傾向があり、私が四月二十五日、コルに登ったときには既にデブリは相当に拡がっていて、A、B両なだれの末端以外にも各所にデブリが見られるようになっていた。その上に悪いことにはアイスフォール全体が美しく輝いて、到るところ活動を始めていることが窺われた。

Aなだれは小規模なので避けることもできようが、Bなだれは問題である。Bなだれは回数が少ないので何とか避けられるとしてもBなだれの少し上の方、右岸に長いなだれの通路がある。アイスフォールは長いので途中にキャンプを設けなければならない。果して安全なキャンプ・サイトがあるだろうか。

それにしても、なだれの頻度が問題である。既にベースキャンプに入った晩だけで、就寝前に六回もなだれの音を聞いた。こうなると、なだれの動向を確かめて、何とか早く結論を出さなければならない。既に荷物はぞくぞく到着して、キャンプを進める態勢はできつつある。

ベースキャンプへ到着した翌日から、アイスフォールの写真を毎日、定時に撮影して、動きをつかむこと、二〇〇〇ミリのキャノンの望遠レンズを組立て、これに接眼鏡をつけてアイスフォール、P二九の稜線などを観察し、写真撮影を行なうことにした。小秋元も活動を開始したが、これもなだれの撮影に忙しい。大きな望遠レンズを使ってなだれの十六ミリの撮影で、ぞくぞく収獲を挙げつつある。

五月三日はベースキャンプも整備されたので全員、休日ということにして、その日にゆっくり今後の方針を協議することになったが、その前日の二日は午前中Aなだれが特に激しかった。ベースキャンプに来て以来、暇があれば登路の観察とディスカッション。今までに提案された登頂ルートは

㈠　住吉の最初から選んだアイスフォール右岸のルート

㈡　西川らの提案のアイスフォールの向って右のクーロアールを登り、アイスフォール左岸に近い岩壁沿いに登るルートの二つであった。

前者はアイスフォールの様相が一変した以上、危険が増したことは否めないが、右岸の下の方にはまだなだれの洗礼を受けない所が少し残っているので、住吉はあきらめ切れない。彼として、アイスフォールを越えての登頂というところに大きな期待を寄せていたのだ。二度目のヒマラヤとなると今までの日本隊と違った行き方に魅力があるのは当然だ。今までの日本隊には本格的なアイスフォールというものは出て来ていない。このアイスフォールならば相手にとって不足がないどころか充分過ぎる。そういうわけで、雲上カルカからの帰りにも暇さえあればピッケルを揮ってアイス

カッティングの練習をして、豆をつくって、それをつぶしていただけに、このルートには飽くまで未練は残っているだろう。

しかし右岸に近い所には垂直の氷壁がいくつもある。それは何とかして乗り切っても、それから先がなだれの通路である。これを避けてアイスフォールの真中に入ったとしても、アイスフォールの活動が活潑になった以上、非常に危険である。

西川の提案したルートは私も何回となく双眼鏡で眺め、角度を変えて観察したが、結論から言えば単なる偵察に終ってしまうものである。また、クーロアールの上に顔を出している雪庇（氷の）が問題である。このルートは特殊の登攀用具を整備して、適当な時期を選んで二シーズンくらいかけて登ってみたら確かに可能性はあろうが、今は何よりも危険で偵察隊すら出そうという気にはならない。

こうして登頂活動を断念するという線が出たら、これから先の行動計画を早く樹立しなければならない。そして、隊員、シェルパ全員に申し渡すことが必要である。五月六日、朝、全員に今後の方針を指示することにした。

前日の五日、午前は特になだれが多く、六時と七時の間の一時間ほどの間にAなだれだけで八回を数えた。その後、数は減ったが十時過ぎBなだれの特に大きいのが一つ、続いてAなだれの中では大きいのが岩壁の右側に一つ、左側に一つ出た。これでは安全通路は全くない。左岸を少し登って右岸の氷河の縁を双眼鏡で見たが、一〇〇mに近い垂直の氷壁はどうにもならないから、これを避けるとするとどうしても、しばしばなだれの通路へ出るより外に仕方はない。

あらためてハントの「エベレスト登頂」を取り出してクーンブのアイスフォールの写真を眺める。始めてあの本や、それより前に出たアルパイン・ジャーナルで見たときには何と凄いものかと思っていたが、今、こうしてP二九のアイスフォールと現実に比較しながら見ると、クーンブのアイスフォールならば何とでもして歩いて見たい、近付きやす

い、しかし、このアイスフォールは何としても手がつけられない――これは全員一致した見解だった。数日後サーダーのアジーバと共に西尾根のジャンクション附近まで登ってみた。彼はスイス隊のエベレスト遠征に参加してクーンブを知っているので、このアイスフォールとくらべてどうかと尋ねてみたところ、クーンブのは悪い所が非常に短かいので通れるが、ここのアイスフォールは悪い所が長くて、途中にテントがいるから不可能だとの答えだった。

六日、九時全員を整列させて、柄にもない一場の訓辞と今後の方針の指示とを行なう。こんな高所では息がはずんで演説となると思うようには言えない。大体の骨子はつぎのようなものである。

「ポカラを出発してからちょうど一ヵ月、諸君の協力によってベースキャンプの建設ができたことを感謝する。つぎは登頂という順序であるがP二九へのルートは目の前のアイスフォール以外にはない。しかし、このアイスフォールは非常に危険で困難であることは諸君の知る通りである。大切な生命の危険を犯してまでもこのルートを試みることはできない。従って我々としては今の季節では登頂活動を断念せざるを得ない。P二九は非常に困難な山であり、その登頂は大きな意義があるものである。いつの日か登頂を試みたい。従って我々は将来に備えて、充分な偵察を行なうべきである。そのため、明後日、サーブ三名、シェルパ数名からなる偵察隊を六七〇〇峰の西北面に送る。しかし、この偵察隊も尾根に達することができないかも知れない。

またトンジェ・ルートを開拓するために数日後に一隊を出す予定である。場合によってはベースキャンプを移動させ、その附近の山に登って偵察を行なうかも知れない。残余の隊員、シェルパはアイスフォール偵察を主にした行動をする。しかしこれはアイスフォールとその上を見るだけであって危険を犯して、アイスフォールを通過するという意味ではない。

諸君の中には雪線以上での行動ができないので失望している者があるだろう。P二九の登頂は非常に大きな意義をも

つものであるが、それには諸君の今後の偵察が大きな役割をなすものである。この意味において、諸君の今後の行動は諸君の登山歴に輝かしい一ページを加えるものになるであろう」

ロカがネパール詰に飜訳してシェルパその他に伝えた。私は後からロカに心境を語った「命が二十か三十あればこのアイスフォールに挑んでもよいが、命が二つか三つくらいではやめにする」と。これが私の気持ちであった。

このベースキャンプはアドバンス・ベースのような性格のものである。ここへキャラバンを進めたのでベースキャンプということにしたが、ここに来るまでに隊員は何回も四九〇〇mのコルへ荷揚げをして充分に高所馴化ができている。また雲上カルカの上のデポからここまでは荷物は全部、隊員とシェルパとで運んだ。

こうした努力を重ねたのも、一つは今後のアイスフォールを越えての登頂活動をスムーズにやるためだった。しかし、これも今となっては意味が薄くなった。

もとよりP二九はむつかしい山である。これほどむつかしい山が一度で登頂できるということはまずあり得ないとは思っていたが、山がむつかしいだけにどこかに案外楽なルートがあるかも知れない。そうした場合にも悔いを残さないようにという配慮から酸素その他登頂活動に必要な資材は全部揃えて来た。

言うまでもなく登頂は最終目的の一つである。だから住吉コルに立つまで登頂ということを一途に考えて行動して来た。しかしコルからアイスフォールを眺めたときから果して、このアイスフォールを、この時期に登るということは登山活動として、またスポーツとして許されるべきものだろうかということが真剣に考えられて来た。こうして、登頂活動を断念してみると気持ちは楽になった。日本を出るときから、たとい登頂のチャンスはあってもモンスーン襲来の直前になる筈だ。私のように高校時代を北アルプスの麓で送り、雨があがったら雨具も持たずに軽装備で山へ行く、そして思いきり足をのばして、つぎの雨が来るまでには山を下るという山行をやっていたものには天候に合わせた山登り

というものに、相当な経験を積んでいるつもりでいた。いくら経験をつんでもこうした山登りはむつかしいものだということは知っており、ヒマラヤのスケールではさらにむつかしいことは知っていても、こうした面での失敗はしたくない。登頂を目前に控えるという幸運に恵まれても、モンスーンの襲来のタイミングを考えて、少しでも天候の点に不安があったらさっさと引返させようと心にきめていた。

しかし、P二九はあまりにもむつかし過ぎて、こんな苦労をする余地はなくなった。もともとP二九を選んだときから、表面は理解されやすいためにマナスル三山の中の一つで、日本人によって登頂さるべき第三の山ということにしておいたが、それ以外にまだこの山がどこの国の登山隊にも試みられず、偵察すらされていないこと、フランスが政府の援助で何回か試みているジャヌーのように最後まで残されそうな山であり、そのような山を日本の登山界におくりたいという気持が大きな理由であった。その望みが果されたということは何という嬉しいことだろう。

自分たちのような年令になると科学者も相当大勢の人の研究を指導しなければならない立場になる。そうなると、ともすると失敗を怖れてか、最初の見通し通りの結果になると、それで満足する傾向に陥入りがちである。もとより、意外に困難な壁につき当り、それを解決するには新らしい方法や手段が必要になる方が遙かに面白いことはよく知っている。しかし、立ち場上、好んでこうした道を選ぶことができない場合が多い。それが、こうして目の前に、科学の世界で言えば全くの新しい広いフィールドの標本のような、何年かかったら登頂できるかわからないような山があるのだ。

自分にとってヒマラヤは始めてである。本当に新人時代に返ったような気持ちでヒマラヤを学ぶことができた。ともすれば忘れがちなこの気持ちを取り戻すことができたのは自分にとって大きな喜びであった。

ベースキャンプの滞在

五月四日、朝のうちに日本、ネパール、インド、阪大山岳会、日本山岳会などの旗をたてて漸くベースキャンプらしくなって来た。ストーブも炊事用と煖房用と二つ使われるようになり、夜はプロパン・ガスのランプがともり出してすっかり明るくなった。雲上カルカでは十四羽もいた鶏もここでは七羽に減っているが、餌がよいためかよく肥えて来て卵も生みだした。鶏はネパール語でククラだ。山本(光)がコックのペンバノルブに半数だけ生かしたままで籠に入れてコルを越えさせるのをどう言って命令するかと思っていると「ククラ、ハーフ、コケッコッコー、キャリー」。これで結構意志が通じる。

十一日にポストランナーと一緒に、買物に行ったバグダ、バハドールらが帰って来た。ロクシーも持って帰ったがそれよりも山羊を一頭コルを越え、カールを引きずりおろして連れて来た。これで愛嬌ものがまたふえた。

外には気象観測の設備、二〇〇〇ミリ望遠レンズなどが組立てられた。この二〇〇〇ミリ、思わぬときに面白いものを見せてくれる。四日、山本(信)は自分のプライベート、ボックスを下ろす際にあまりいい気になって雪渓を勢よく滑らせたら途中で岩に当って真二つに割れてしまった。まわりに散乱したこまごました物がよく見える。彼も名誉恢復のためか実によく散らばった物を拾い集めた。そして失なったものは雪眼鏡の箱の蓋だけだと言っていたが、これも後から出て来た。

八日、全員で荷下げを兼ねて、氷河の左岸を下り、湖の左岸を巻いて、湖から出ている川に沿って少し下った所まで

往復した。湖には所々に氷山が浮かんでいる。このあたりへ来ると標高は約三九〇〇m、岳樺が現われ、しかも僅かながら新芽を出しており、常緑木の林もある。僅かな標高の違いで荒涼そのもののようなベースキャンプと大部違う。

翌、九日、トンジェ・ルートの開拓に向う尾藤、山本(光)、六七〇〇峰の試登に向う西川、山本(信)が出発する。ベース・キャンプは淋しくなった。シェルパもあまり残っていないが行動しない日は今までよりも賑やかだ。

夜は夕食のあと、話がはずむ。住吉は船医としての経験が長いだけに航海の話、鱶釣りの話など山国の人間にはなかなか興味があるようだ。猿を十六匹、船の中で比較解剖学の研究用と称して飼っていた話などが出ると、それから先の話の落ちつく先はきまっている。こうしている間に葛湯をつくる、時には蕎麦かきもつくるが、チベット人は蕎麦かきを知っている。トンジェの奥あたりでも同じようにして食べるとのことである。

何回となく雪男の話が出た。来る途中も香港での記者会見で雪男のことを聞かれた。日本には雪女郎というものがあるが、ネパールのは雪男だ。俺は男性だからスノー・メンにはノー・コメントだと答えたが、ネパールは雪男（イエティ）を観光資源にしているだけに雪男探険には非常な重税、五〇〇〇インド・ルピーをかけるので、うかつに雪男の話もできないわけだが、こんな山奥では問題でない。

アジーバの話もヤク飼いが見たとか、足跡に毛が残っていたというのが主だが、最後にナムチェ附近の村から来たアンシタから聞いた話をしてくれた。昨年のこと、村のヤク飼いが足を折って死んでいたイエティを見つけて持って帰って、こっそり村長に報告した。村長はこれを村の最も神聖な所に葬って礼拝し、村人を固くいましめて人に話すと祟りが来ると言ったので村人は誰にも言わないことにしている。だからヒラリーが来たときにも固く秘していた。アンシタが知っているのはたまたま、その村に親類があるからだと。

ナムチェのイエティは人真似をして、真剣とは知らずにチャンバラをやり、人間の真似をして毒水を知らずに飲んで

全滅に瀕したそうだが、インド境の方にもこれに似た話があるとロカが話してくれた。人間が焚火にあたりながら、ときどき体に水をつけるのをイエティが見ていて、水のつもりで油をつけていたところ、何ぶんにも毛深い体のことだから忽ち焼け死んでしまった。これがイエティの数が減った原因だというが、どうやらこれもシャクンタラ姫同様、日本お伽話の原型と言えそうだ。

イエティはネパールではどんな山奥でも自由に歩けるので二度と同じ所を通らないということになっているが、ダージリンの近くではイエティの通る路というのはきまっていて、特有の豹に似た臭気が残っているとのことである。もっともこれは本当のイエティでなくてソッバというもののことで、話には共通のものが多いようだが全く同じとは言えないようだ。

ときどき夜中に眼をさまして外へ出てみると外は夕方降った雪が一面につもっており、氷河を隔てて六七〇〇峰、その右にマナスル、P二九と何れも昼間見たときよりも高く嶮しく聳え、よく月の世界の想像図に見るような一木一草もない荒涼そのものと言ったような風景に接する。カトマンズで始めて澄んだ月、二日月の陰の部分も見え、月蝕のような円い月を見たが、この山奥へ来てみると空はさらに澄んでいる。月の光も思わず寒気を覚えるような光り方である。

六七〇〇峰の試登とトンジェ・ルートの開発

登頂活動を断念した今となっては、P二九の西面を徹底的に調査することがつぎの課題である。それには目の前に聳える六七〇〇峰は決して簡単な山でない。マナスル、P二九の近くにあって標高も低いが（もっとも標高の六七〇〇mというのは正確な数字ではない）、独立に登頂計画をたてても充分に価値のある山である。だから、稜線に達することもできないかも知れない。そうした場合を考えると、できるだけ、いろいろな地点、特に西尾根の上のいろいろな所から角度を変えて、アイスフォール、内院、稜線などを観察する必要がある。

目の前の氷河が氷河湖で終っていることは確かめたが、湖から出る川がどこへ行っているか、北へしばらく流れて西へ転向しているのでマルシャンディへ注いでいることは確かだが、合流点が果してトンジェ附近であるかどうか、またどうして、このような相当大きな川の合流点が今までの登山隊に気付かれなかったのか、こうした点をさぐる必要がある。また、若しこの川筋が通りやすいものならばムシコーラを戻るのと違ってコルを越えなくても済むし、短かい時日のキャラバンで本街道へ出られる。こういう意味でトンジェ・ルートの開発はぜひやりたい。こうした意味ばかりでなく、西尾根のウェスト・コルあたりから、西尾根が二つに分れ、北へ分れた尾根が西に向きを変え、マルシャンディで終るまで障壁のように立ち塞がり、その向う側を川が流れていることが明らかな地形を眺めると、あの川の行方をさぐりたいというのは自然に現われて来る衝動である。尾藤、兼清が、南西の支尾根に登って、この尾根を眺め、トンジェ方面偵察の衝動に駆られたのも、気持ちは同じ、共にこの地形のもつ魅力である。

こうしたことからもトンジェ・ルートの開発をぜひやりたい。トンジェ・ルートの開発は下へ向かっての山登りである。誰を出したらよいか。

阪大山岳部が積雪期下廊下横断に着手したのは昭和二十九年三月であって、その時のリーダーは尾藤で、彼は始めての新越乗越附近からの下降、どこを降りたらよいか全くわかっていない下降を相当なところまでやり遂げて帰って来て、山登りは下へ向かう方がむつかしいという名言を吐いた者である。尾藤をまずメンバーに入れるとすると、トンジェへ達した場合に、ある程度帰りのキャラバンのことを考えて下調査も必要である。それには山本(光)を加える方がよい。こうして、トンジェ・ルートのメンバーがきまった。

六七〇〇峰の試登にはできるだけ若い層に自主的に行動させたい。そういう意味で西川、山本(信)が選ばれた。二人だけでは弱体なのは明らかだから機を見て住吉、兼清は応援に出かけることにした。

まず西川の手記によって六七〇〇峰試登の経過から述べよう。

五月九日、晴、午後雨、夜遅く止む。十時ベースキャンプを出発する。西川、山本(信)アンナンギャル、アンダワの四人。氷河湖の下端から少し下った所が森林限界、その頃から雨が降り出す(このときベースキャンプは雪であった)。日本の早春を思わす針のような雨に濡れて、しゃくなげや岳樺の木々は新しい芽を含ませている。午後三時、昨日荷下げをした荷物をデポした所、広河原にキャンプする。このキャンプをRBCと呼ぶことにする。

十日、曇、雪、夕方晴。天気は曇、下流のマルシャンディの上空に少し青空がある。

八時、トンジェ・ルートの偵察に向かう尾藤隊が出発。我々も少し遅れて出発する。六七〇〇峰西面の氷河はこのキャンプのすぐ上で懸垂氷河となって消えている。その氷河に達するには氷河の北側の草付きの岩稜が唯一のルートに見える。高度差一〇〇〇m、はじめ鹿道などをたどって登って行くうちに、ぐんぐん高度をかせいで十二時半氷河の下

のガラ場、高度四六五〇mに達する。十時頃から降り出した雪がますます激しくなる。ガスも濃くなり地形の判断もつきかねるので引返す。

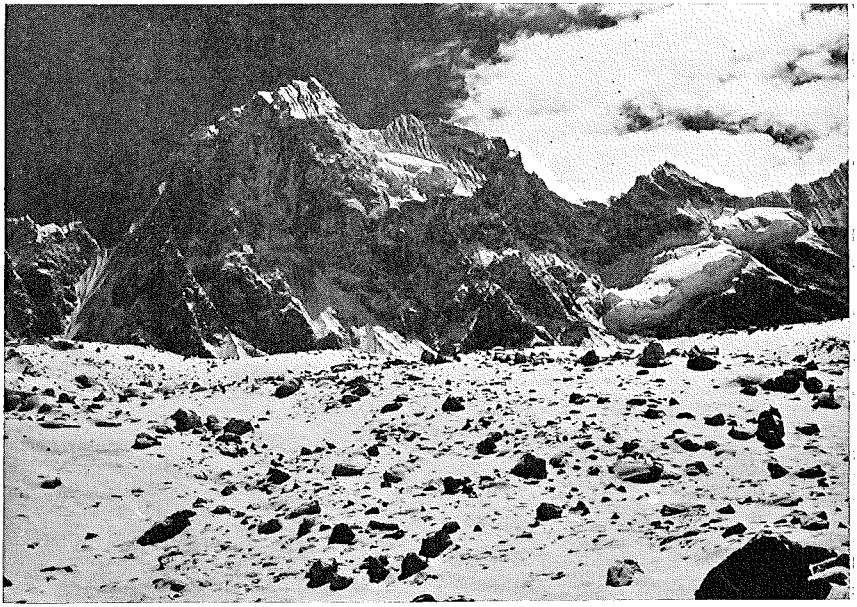
広河原のRBCに午後三時に帰る。尾藤隊は既に戻っていた。

十一日、晴。氷河上にキャンプを進めるためのボッカ。足ははかどり、岩のガラ場を通り過ぎて、一時半フンギからの氷河のセラワク帯の下端のあまり広くない雪原に達する。高度四九〇〇m。ここをキャンプ地にきめる。（RCA）半時間ほどいて引返す。広河原のキャンプへ午後四時半に帰る。

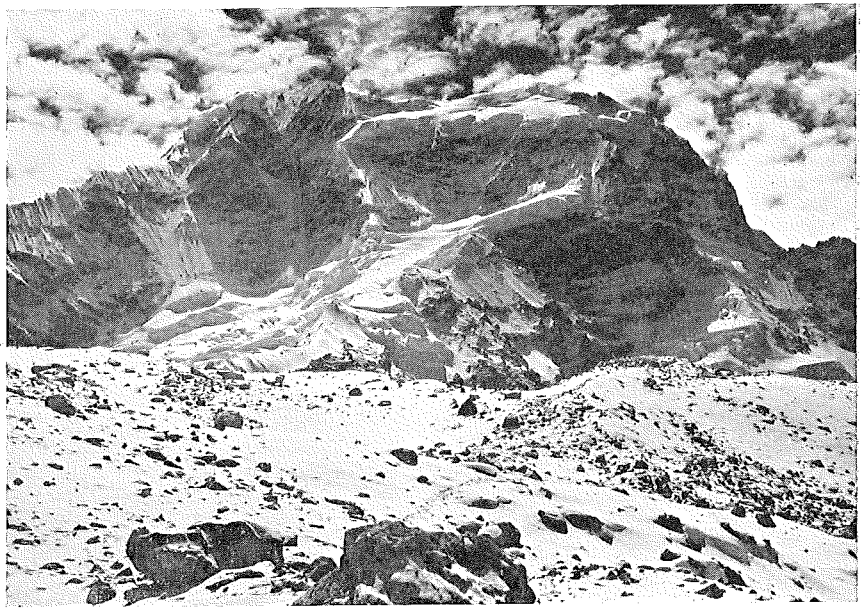
十二日、晴。広河原に来て今朝が一番良い天気である。アンナンギャルだけが今日再びこのキャンプに戻ることにして、他の三人は昨日みつけた四九〇〇mの雪原にキャンプ（RCA）を進めることにする。朝、良かった天気も四〇〇〇m余りの高さにある大岩庇のところに登りついた十一時頃には真上に青空を少し残してガスにかこまれてしまった。

午後二時半にキャンプ・サイトに着いた。アンナンギャルはすぐ広河原へ下る。四時過ぎ、ガスが晴れてきたのでキャンプの裏のこぶへ登る。六七〇〇峰から出ている上下二段の氷河の合流点が大雪原となって足下に広がり、西へアイスフォールとなって落ちている。上段の氷河は最後まで急峻なアイスフォールの連続で、奥はヒマラヤひだとなって稜線につき上げている。下段の氷河は所々に緑色の断層をみせているが、大部分が雪原のように見え、上段にくらべれば坦々としている。しかし稜線へ出るには、これもまた容易でない。氷河のつき当りの壁にはヒマラヤひだが見られ、さらに上部には懸垂氷河がかぶさっている。唯一の登路はあの三角形の北の一辺しかない。（この三角形は今西寿雄氏のナムン・バンジャンからの写真にも出ている）

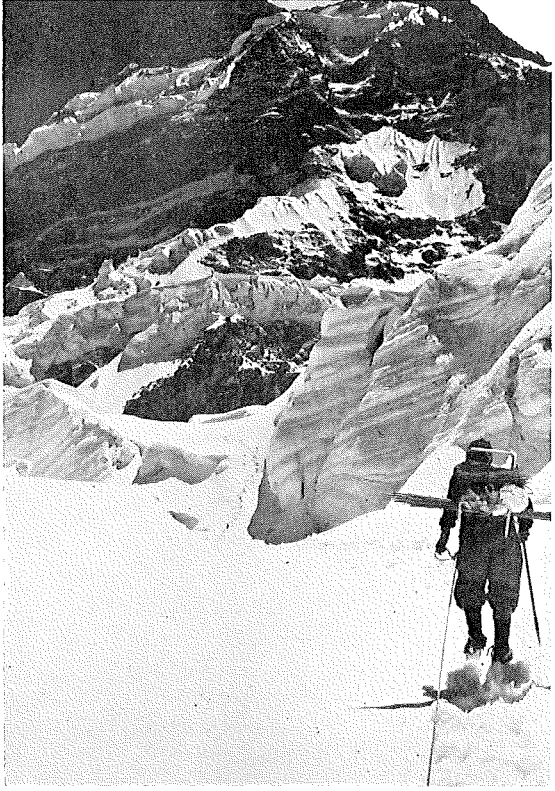
十三日、晴、午後雪。七時半出発、一旦氷河合流点の雪原まで下って、それを横切り、アイスフォール帯に入る。午後になると定期便のガスがやって来て、あたりを包んでしまう。ただでさえ視界のきかないアイスフォールの中で二十



6700 峰 中 腹 か ら の フ ン ギ

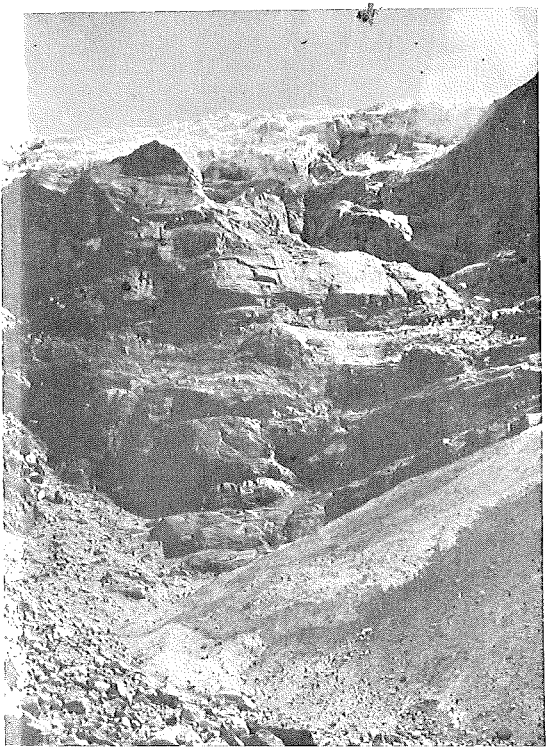


上 と 同 じ 地 点 か ら の 6700 峰 本 峰



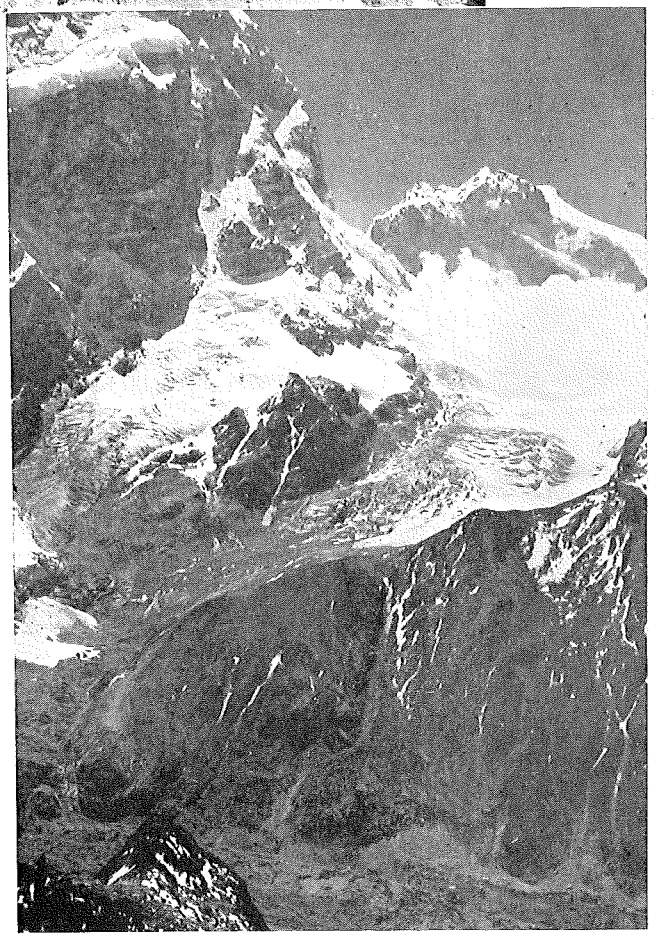
6700峰の下段氷河を登る

6700峰の氷河の末端



6700 峰 の 南 峰

(左は本峰に続き，右は
ツラギ氷河に終っている)



6700峰の支尾根のコル
から見たヒマルチュリ

(雲の中に西尾根のジャン
クションがあり，そこか
らなだらかな氷河が北に
出ている)

6700峰の中腹から見た
アンナプルナⅡ峰

西尾根ジャンクション付近から
マナスル，6700峰間の谷を望む

分もガスの薄れるのを待ったりして、午後二時荷物をデポする。高度五一五〇m。折から降り出した雪の中を二時間かかってRCAに引返す。キャンプには住吉と登って来た兼清が残っていた。

十四日、晴、午後ガス。休養のため停滞。

十五日、晴、午後ガス。山本(信)はせきがひどく体の調子がよくない。兼清と二人でRCBを建設してはいることにする。RCA発八時半。トレースがあるので足はよく伸び、一昨日苦労した氷の出ている急斜面も楽に通過できた。デポ地からさらに一段上った所に雪をならし、氷を削ってキャンプサイトとする。高度五三〇〇m。午後一時。サポートの山本(信)とアンダワはテントを張り終えてから下る。

十六日、晴、午後ガス。四時半に目を覚まして、ガタガタして出発できたのは六時半。キャンプ自体がアイスフォールの中にあるのだから、すぐアイスフォールの迷路的な上り下りとなる。今にも崩れそうなアイスビルの下を通ったり、悲壮な決心をしてからクレバスを飛び越えたりして、十時高度五四〇〇mの所で高さ二十m余りの、氷河の巾一杯にわたる氷壁にぶつかる。かなり手前の方にオーバーハングしているし、上の方に砕石を含んだ層があり、ここで二時間ほど、いろいろと手を尽くしたが、どうしてもこれを乗り越える方法がみつからない。とにかく、これから先はラダーとか縄ばしごなどベースキャンプにある装備が必要なことは目に見えているので、一旦ベースキャンプに引上げて陣容を立直して出直すことにする。兼清は非常に疲れている。朝はすたすた通れた所が雪が腐って定場がきまらず難渋する。ちょっと油断して歩るいていると、すぽっと腹のところまでクレバスに落ちこんでハッとする。RCBに午後一時半に帰着。

十七日、晴、午後ガス。十一時にRCAから山本(信)、アンダワが上って来た。十二時出発。二時半にRCAに戻り荷物をまとめて三時、広河原のRBCへ四人揃って下る。

十八日、晴、午後ガス。山本(信)と兼清を広河原に残して、ベースキャンプへ六七〇〇峰の増援方を頼みに出発する。ベースキャンプへ着いたのが十一時。尾藤さんから隊長の発病を知らされ、その午後に市大隊の遭難を知った。

この日、カルマオンチュウ、クンガノルブの二人はRBCとベースキャンプの間を往復している。西川、兼清の登った氷河は巾三〇〇m、アイスフォールの附近は左は六七〇〇峰から絶えず氷が落ちて来る、右は二、三か所フォールになって落ちているので、通路は中央だけという困難なものであり、アイスフォールの運動は相当活潑だったようだ。そういう訳で強行突破すべきかどうか迷っていたようだが、結局強行を中止した。なおRCBはアイスフォール中にあって危険なので撤収して引上げて来ていた。またこの日、六時RBCへ日立の無電で明日RCAを撤収すること、ベースキャンプへ帰る途中で六七〇〇峰からの尾根の末端に近いコルに登ることを指示した。

十四日にRBCから戻って来た住吉は内心ツラギ氷河のアイスフォールに挑むつもりであったらしい。なだれは標高の低いところでは確かに減って来たが、その代りに標高の高いところの大規模ななだれが増し、明らかになだれ頻度の最大は七〇〇〇mのあたりに移動していた。今までのAなだれは極部的のものであったが、この日の朝、六時五五分に観察されたものはアイスフォールの巾一杯に広がって、音も六五秒も続き完全に土かぶりの範囲にまで達した。

このようにアイスフォールの動きが活潑になっては、もうツラギ氷河のアイスフォールはもとより、六七〇〇峰のアイスフォールも通路として使える範囲が狭く、危険性も増大しているので、強行突破は行なうべきでない。私が発病していたので西川も住吉も各々のアイスフォールに挑むことを言い出さなかったが、この結論は病気をしていなくても変りはなかったと思う。

六七〇〇峰の支尾根のコルに向った兼清、山本(信)は二十一日十一時半ベースキャンプ対岸のコルの上に現われた。

二人の声がよく聞こえた。

トンジェ・ルートの開発

トンジェ・ルートはサーダーのアジーバはベース・キャンプから一日半と言っていたが、彼としても歩るいたことはもとより、聞いたことすらなく、ただ地形を見てそう言っているに過ぎない。ネパールの一コースは大体二マイルでネパール人の一日行程が十コースだから、距離的には大体そのくらいだろうが、登山隊が荷物を持って通るとなるととても一日半では行けるはずはない。距離はそのくらいとしても氷河湖のあたりまで、夏ならば相当よいカルカになりそうな所まで人の来た形跡はないのだから、果して氷河湖から下が通れるかどうか疑問である。RBCの位置は谷が広く開けており、標高は三七〇〇mと相当高く、マルシャンディまで距離は短かくて落差が二〇〇〇mとなると下の方は相当悪い谷になっていなければならない。

八日、氷河湖からの帰りに氷河湖の左岸の堤の下の岩小屋の中にカルカの材料らしい何本かの細い木材を見付けた。どうして、こんなものが、こんな所にあるか、カルカの材料としても附近にカルカらしいものはない。また材料はいかにも古い。この材料はどこから運んだものだろうか。ここまで人間が来たことがあることは確かだが、どこを通って来たかということになると全くわからない。住吉コルには人の通った形跡はなかったし、ウェスト・コルからは通れるルートはない。そうすると北から持って来たことは想像できるがそれも川を溯行して来たのか、尾根を越えて来たのか全く見当がつかない。

こうした未知の谷だけにトンジェ・ルートに向った尾藤、山本(信)は相当に悲壮な決意で出掛けたのであった。尾藤は偵察隊報告のまえ書につぎのように書いている。

「未知の谷を下ることの恐しさを知っている私にとって、この偵察は雪も氷もないというヒマラヤの夏山における極

めて困難な仕事と思われた。本偵察隊に敢えて山本光二君に加わって頂いたのはかかる理由によるものである。」

以下、尾藤の報告を記そう。

五月九日、曇。六七〇〇峰に向う西川、山本(信)と共に湖の下端の台地にあるＲＢＣ（三七〇〇ｍ）に下った。

十日、晴、後雨。六七〇〇峰に向う隊、谷を下る隊、それぞれの予備偵察に出掛けた。谷を下る我々には左岸を行くべきか、右岸を下るべきかはむつかしい問題であった。一応、右岸を、シェルパを先行させて下ると、湖よりの沢と六七〇〇峰の氷河末端からの沢の合流点を少し下った所で、彼らは早くも砂の上に裸足の足跡らしいものを発見した。さらに森林帯に入って間もなく、明らかな踏み跡を見つけた。それは次第に明瞭な山道となった。さらに人の泊ったあとのある岩小屋、小屋がけをみつけた以上、マルシャンディ・コーラに通じる道のあることを確認した。

人跡未踏の谷との予想を裏切って、容易に山道が見つけられたことはネパールが徹底した山国であることを物語っていた。かような平地のない所では、およそ人間が歩るけそうに思われる地形の所はどこでも人の足に踏まれているのである。

十一日、晴後曇。朝九時ＲＢＣ出発。一気に下降してマルシャンディ・コーラに出た。夕方の六時、ナジェ部落に着いた。ナジェ（グルン、一八五〇ｍ）の住民から聞いたところでは㈠湖の名はニョー・ポクリ（乳の湖）㈡六七〇〇峰の名はドンナ・フンギ（フンギとは肩の意である）㈢この谷をドンナ・コーラと言い、ナジェの住民だけが、この谷に入って狩猟をしているとのことであった。

十二日、晴。日本の五月頃のような快適さに休養。

十三日、晴後雨。ナジェの部落民を一人ポーターに雇って、途中、道の補修工作を行なった。シェルパの道工作は立派なものだった。大木の切り出し、運搬、それを使って実に要領よく道を作る。

右岸へ渡る竹の橋のところで一泊した。

十四日、晴後雨。八時出発、帰りの本隊キャラバン通過の際に起こりそうな諸問題を考えながらＲＢＣに帰る。

こうして、トンジェ・ルートは案外すらすらと開発されてしまった。この谷がどうしてマルシャンディの本街道から見えなかったかは後に本隊のキャラバンを進めてナジェへ達してからわかった。またこの谷はナジェの住民だけが猟に入るので、他の部落の者にはわかっていないようだ。ＲＢＣから少し下ったところに後に我々が樺河内と命名した岳樺の多い徳沢を思わせるような広い所がある。こうした地形にも拘らず、どうしてカルカがないのかということは尾藤も疑問に思っていたが、谷を下ってみて、竹橋を渡って左岸に移ると所々に悪い所があって、人間ならばなんとか通ることができるが、羊などでは不可能な所が多かったことで理解できた。なお、この谷に入っている猟師は数十人の集団で、じゃ香鹿などがおもな獲物のようだ。

西尾根スノー・ピークの登頂

ベースキャンプから少し氷河の上流の方へ行くと頭の上に氷河がのしかかって、今にも落ちそうになっているのが見え、その近くに独立峰の形をそなえた峰が見える。P二九やマナスルの近くにあるから問題にならない標高であるが、登ってみるだけのものはありそうにも思える。

登頂を断念し、しかも尾藤、山本(光)はトンジェ・ルートの開発という雪も氷もないヒマラヤの夏山へ送られたとなると、自己の最高記録が四九〇〇mの住吉コルということになって、本格的な雪と氷の洗礼を受けずにヒマラヤを去らなければならないことになる。何とかして、彼らも雪線以上で一度は行動してみたいだろう。それには、これらのピークが時間的に見て好適だ。そこで一応偵察してみようと思って五月十三日、アジーバを連れて西尾根のジャンクション目指して登って行った。九時半にベースキャンプを出たときには天気はよかった。出発がこんなに遅れたのはこの日、八人の人間が一人二〇キロずつの荷を持ってRBCに出発したり、小秋元、ロカ、アンダワが氷河の横断に出掛けたりしたので、彼らの荷物やランチの世話など一切を片附けてからでないと出発できないからだ。このところ、隊員を全部偵察に出しており、後に残った人夫や便利屋で荷下げをやっているので、隊長一人で食事掛りも装備掛りも一切引き受け、その上に気象観測その他の用事もあるので、どうしても朝は九時半頃でないと自由な行動はできない。

斜めに高度をかせいで一時半、四八〇〇m程度の北へ出た支尾根のコルに達した。この頃から天気は次第に悪くなってきた。

やはり想像したように西の方のスノー・ピークまでは緩い登りの雪原状の地形で、頂上までの間には問題になるような所は一か所もない。この支尾根とP二九本峰との間には氷河があって北に向いているが巾が広く、アイスフォールはもとよりクレバスのようなものも見なければ、両岸から落ちたデブリのようなものは全く見えない。誠に穏かな氷河で、ヒマラヤにもこんな、アルプスにでもありそうな、氷河があるのかと、今さらながらヒマラヤがいろいろなものを持つ偉大さというか多様さに驚かされた。この氷河はツラギ氷河の近くまでは達しているが、途中で消えていて、両者の間は推積物で分離されている。

このコルより少し上の五〇〇〇m程度の所にキャンプを一つ設ければこのスノー・ピークへの登頂は楽なものであり、しかもここまで来るとマナスルと六七〇〇峰の間が相当よく見えるので、相当な収穫が期待される。

とにかく、よいみやげができた、また氷河がも一つ見付かったというわけで満足した気持ちで折から降り出した雪と雷の中をベースキャンプに戻った。三時五〇分帰着。

十四日夜、私の発病、尾藤が十五日に帰って来てようやく住吉も行動できるようになり、二日間の絶食の後におも湯をとるようになったので、住吉は十七日、アンダワ、パサンノルブを連れて出発、予定した五〇〇〇m附近にキャンプして、翌十八日にはスノー・ピークとロック・ピークへ登頂して十九日に帰って来た。

十八日には山本(光)は昨日、連絡のために帰って来たパサンノルブを連れて同じキャンプに向かった。十九日には彼もスノー・ピークの登頂を済ませて帰って来た。

これと入れ代りに二十日、尾藤、小秋元はダ・ノルブとイラテンジンを連れて同じテントに入り、イラ・テンジンだけその日のうちに帰って来た。

尾藤は翌二十一日、スノー・ピークの登頂をして帰って来た。あの尾根のあたり、見渡すかぎりの雪田でいかにもス

キーの欲しくなる所である。アルピナ・スキー・クラブの会長である小秋元にとってはスキーを持って来なかったのが、いかにも心残りであったろう。

スノー・ピークの標高は五〇〇〇m台と思っていたが、最初に登頂した住吉の推定では六二〇〇m程度とのことである。しかし、これは正確なものでない。

ムシコーラの谷を歩いていると相当に標高の低い所に氷河地形が見られる。こうしてこの西尾根のジャンクションの近くは雪原が見られることは、昔の氷河が衰退する以前には、このあたり一面にマナスル、六七〇〇峰の中間から出た氷河に掩われており、これがムシコーラの遙か下流まで及んでいたものではなかったかと思われる。若しそうだとすれば、インド測量局の地図に近いような地形になっていたものであったろう。

ランタン・リルン遭難のニュース

五月も中旬に近ずくにつれて、アイスフォールのなだれは下の方で起こる小規模なAなだれは減って来た。その反面、五月始めまでは七〇〇〇m程度のところからのなだれは殆んど無かったのが、漸やく目につくようになって来た。高所でのなだれは数は少ないが凄いものである。

日本から来ている二隊はどちらもキャラバンの距離も短かいので、もう相当な高さまで登っているだろう。ビッグ・ホワイト・ピークの方は問題ないであろうが、ランタン・リルンの方はいささか、なだれが気になる。

毎日行動していると、他の隊のことを考える余裕もないが、病気をしてテントの中で寝ながら、ときどき聞こえるなだれの音を聞いていると、いろいろなことが気になり出すものである。

こんな状態のとき、十八日の午後、西川はランタン・リルンの遭難を知らせて来た。十九日の朝になると遭難のあったのは朝の五時三十五分（AP電では四時四十五分）C3の全テントが流され、ギャルツェンの死体だけ発見され、森本、大島両氏の死体は発見されないこと、ミンマツェリンは重傷で、一行は既に帰りのキャラバンに入り、二十四日カトマンズ着の予定ということまでわかった。

ランタン・リルンとここでは相当離れているから、あの方面の天気はわからないが、ここでは九日までは毎日、同じような天気、十日だけは少し悪く、朝から曇っており最低気温も晴天の日は零下五度程度なのが、この日は零下一度と相当暖かった。午後も時々霰が降り、天気は恢復せず、氷河湖より下の方では雨だった。十一日にはまた恢復し、夕

方、珍らしく晴れ、十二日も晴で午後の雪も少なかった。

内地の山のなだれならば、こうした天気となだれとは関係があるが、ヒマラヤのなだれというと一種の山崩れだから、天候との関係もはっきりしないというか複雑なものだ。

ヒマラヤへ来ていては内地でどういうことになっているか、大騒ぎになっており、誰か留守隊の責任者がカトマンズへ急派されるだろうということは想像されるが、それ以上具体的なことはわかる筈がない。

十八日に、このニュースを聞いたときには全くシュンとしたが、詳しいことが十九日になってわかると共にいろいろなことが思い出されて来た。大島、森本の二人がいつもコンビになって、隊の事務を一切引受け、カルカッタでも同じリットン・ホテルに泊っていたので、阪大隊とも接触が多かった。カトマンズにも少し遅れてやって来たので、よく会い、またお互いに情報の交換も行なった。

小秋元と共にポカラに発つときは両氏とも見送りに来てくれた。あのときに別れた二人の元気な顔が今でも残っていて消えない。ギャルツェンとは前に来日のときに新大阪ホテルで会っただけである。カルカッタでは行き違いになって会えなかったが、カトマンズではホテルへ訪ねて来てくれた。P二九の山名のこと、そのほかいろいろな話が出た。

そんな思い出よりも、日本隊として始めての大きな事故、しかも我々としてもヒマラヤへ来ている以上、何とか打つ手はないものか。

同じヒマラヤでも距離は相当離れている。交通の不便なネパールでは距離というものが絶対的なものだ。日本からのカトマンズはカルカッタに一泊しても一日半だが、ここから新らしく開いたトンジェ・ルートを通って急行したとしても八日。都合よく、その日に飛行機の便があったとしても、二十八日でなければカトマンズには着けない。

市大隊は二十四日にはカトマンズに帰るとのこと、またマカルー隊のなだれ事故のように患者の空輸を行なえば、相

当な重傷者でも充分な手当てはできるだろう。日本でも十八日にはこのニュースを知っている筈だから、一週間かかったとしても二十五日には誰か来ているだろう。

こう考えると二十八日にカトマンズに着いても、あまり役には立たないかも知れない。その上、ニューデリーその他から朝日の特派員その他も大勢来ているに違いない。カトマンズの恵下湧氏はてんやわんやだろうが、人手はもう、相当に集まっているのではないか。今さら、カトマンズへ行って見たところで、とも考えてみたが、またその反面、市大の留守隊にはヒマラヤの経験者はいない。そうなると泉隆次郎氏が来ることになるだろうが、カトマンズは始めてだし、同氏の天賦の外交手腕をもってしても、カトマンズでの問題の解決は容易なことではない。戦後の混乱の時期にやって来て、日本山岳会関西支部長に就任するよう説得されたこと、それが縁になってちょうど十年間在任したことなどが、今さらのように思い出された。

やはり誰かを派遣することにしよう。役に立たなければむしろ幸いだ、後始末が順調に行ったことを意味するからだ、と考えて住吉の帰って来るのを待った。

住吉は西尾根から三時頃帰って来た。すぐに隊員全員が集まるようにと連絡したが、なかなか集まって来ない。夕食後になって、やっと全員の顔が揃った。

既に登頂断念後の偵察行動も大体、峠を越えたので隊員を二人くらいは割くことができる。住吉は副隊長で医者だが、まだも一人医者がおり、幸いなことに私の病気も次第に快方に向かっている。何と言っても住吉はヒマルチュリの往復と今度で都合三回カトマンズへ行っており、カトマンズに馴れており、外務省その他をよく知っていることでも外に代る人はない。その上に外科医ということが日本人の負傷者には大きな助けになる。住吉の身になってみれば医者であり副隊長である自分が病気の隊長を残して、カトマンズに去ることはでき難いだろうが、そこは何とかして承知して

もろうことにしよう。

も一人はどうするか。これにはある程度、社会経験のある者がよい。医者の尾藤、会計の山本（光）は帰りのキャラバンに絶対に欠かすことができないとすると西川しかない。幸いなことに西川は一番、英語が達者で、先発隊でも住吉とよいコンビになっていた。こんなわけで住吉、西川という線がでたが、果して隊員との話合いでは急にはきまらなかった。住吉としても去り難い点があるのは無理はない。漸く納得してもらって、明日、この二人が出発ということになった。

翌二十日、尾藤、小秋元の二人は上のテントに向かった。住吉、西川もいよいよヒマラヤとお別れということになると仕度に時間がかかり、出発したのは午後三時半になってしまった。同行のパサンノルブと便利屋二人は二時半に出発した。いざ出発となるとポカラでまた会おうぜと元気に言ったものの、流石に去り難いものがある。今にも降り出しそうな空の下を、五月末とは言え、まだ緑も萌え出していない草原の中を下って行く二人は何回も何回も振り返って手を挙げていた。

後になって知ったことであったが、住吉はトンジェ越夏を計画していた。また始めてのヒマラヤで行きにキャラバンの経験をしなかった西川は帰りは本隊でキャラバンをということを楽しみにしていたものであったが、二人ともこの希望は果せなかったわけだ。

住吉はトンジェに立ち寄って、ヒマルチュリ以来の旧交を温ため、ベースキャンプに帰すシェルパに托して病後の隊長用にと入手した卵やじゃがいもと帰りのキャラバンの注意、私の病気の予後などを細かく書いた手紙を尾藤に届けてくれた。

彼らは二十八日夕、カトマンズに着き、住吉は外務省、ヒマラヤン・ソサエティとの交渉に、西川は通訳や、ダージ

リンで読み上げる弔慰文の翻訳に、泉氏を助けて予期した通りの活躍をしてくれたことは、同じ大阪の大学山岳部から来た親類同志の隊として、また森本隊長も私の日本山岳会関西支部長時代の委員であっただけに、自分としても、ささやかな手向けの花を供えることができてよかったという思いをした。

隊長発病

隊長が発病する前に住吉副隊長が一時どうなることかと思ったくらいの病気をした。四月三十日、ベースキャンプを設置した日から腰が痛いと言っていたが、翌日も翌々日も元気によく働き、また若い隊員を指揮しており四日にも午前中は荷下しまでやっていたのが急に午後三時頃から寝込んでしまった。病人が医者であり、また尾藤ドクターもいることだから、素人の我々が出る幕ではないと思っていたが、その晩はひどい血痰（肺炎）で本人はよほどコルから酸素を下ろしてもらおうかと思ったくらいだった。翌日になると熱も三十七・七度に下がり、相変らず体はだるそうだったが午後からは話をするようになった。翌七日には午後から起き上り、夕食は皆と一緒にとるようになったので、安心した。全く抗生物質のお蔭で、これが戦前だったら大変なことになったところだろうと、後からひゃっとした。

私の発病はこれと入り換りの観があった。十一日まで全く自覚症状はなかった。十一日に住吉、兼清と氷河の上を歩いているとき、ときどき軽い胃けいれんの感じがしたが間もなく収まった。十二日は別に何もなかったが、十三日にアジーバと共に西尾根のジャンクションへ行ったときも、二、三回軽い胃けいれんを経験した。胃けいれんというものは小学校四年生のときに胃炎をやったとき以来、全く覚えがない。持病でない癪もヒマラヤへ来ると出て来るものか、そう言えば今朝あたり、便の色が黒いのが少し気になる。これから少し養生してみようかと思った。

十四日も同じような便で、その日の日記には「今日は朝から胃の調子が悪く、何だか貧血の気味で、九時の気象観測の後で少しふらふらする。無理せずに一日休養。しかし、やることはある」この日、昼飯にはイーストを使ったパンを

作らせ、夕食にも何か適当なものをさがそうとしたが、食糧品のボックスは積み重ねてあるので、なかなか適当なものが見つからない。体も疲れているので、ついその侭にして、夕食はカレーを作るようにクックのペンバノルブに言い付けてしまった。

四時頃、住吉が下のキャンプから戻って来て、隊長用にと明治のクラッカーを二箱持って来てくれた。これで助かったと思ったが今日の夕食はもう準備にかかっているので、これは明日からの楽しみにしようと思って、とっておいた。

夕食後の六時、七時のRCAとの定時通話や住吉と共にやった神戸工業の無電器のテストの後、例によって雑談がはずんだが、あまり気分もよくなかったので、少し早目に切り上げ、テントの中で日記その他の用事を片附け、就寝したところ、夜中、急に気分が悪くなり、起き上ると同時に吐血してしまった。始めは単なる吐気と思っていたが、懐中電燈で見ると明らかに吐血である。今は一刻も猶予する時でないと、転ろげるようにして住吉のテントに入った。住吉の毎日新聞古市氏宛の手紙にはその模様がつぎのように述べてある。

「最夜中、就寝中の私のテントに隊長が顔面蒼白で来られ、〃吐血〃とのこと。急ぎ私のテントに寝ていただき、真夜中のこととて小秋元（B・C・唯一の隊員）、シェルパを騒がしても困るし、無意味なので、私一人で隊長テントの吐血処理、湯たんぽ準備ショック剤止血剤注射などをしました。

夜、二時半頃やっと私もシュラーフにもぐりましたが、隊長の年令を考えると夜明けが待遠しく、かつ今後のことを考えて、なかなか寝つかれませんでした。

明けて十五日、隊長吐血は再度となく、気分も落ちつかれた様子で、やや愁眉を開いた次第です。それにしても、十四日、予定（六七〇〇峰偵察を続行中、私もそれに加わり、指揮する）を急変してベースキャンプに私一人で帰って来たのが、全く不幸中の幸だったと、小秋元氏、アジーバなどに言われるまでもなく、私自身不思議に思った次第。

十五日夕刻、尾藤、山本（光）帰り、隊長治療および今後の方針もきめられる態勢になりました。

十六日、隊長の様子は静かに落着いておられますが、疲労はかくせず、気の強い隊長が作り笑いながら「こうなると、全くズクがなくなる」とおっしゃっています。作り笑いでも、とにかく笑いが出るように、十四日夜ショックから回復された状態です」（中略）……

以上、隊長の病気（吐血―胃潰瘍？）に関しましては御家族には報告しておりません。徳永にのみ詳細知らせてありますし故、御相談の上、適当に御配慮、御処置下されば幸甚に存じます」

この手紙は十六日夜書かれ十七日のポストランナーでポカラに送ったものである。十七日にはおも湯が飲めるようになり、大部恢復したので、内地へ向けて同じ便で手紙を出したくらいであった。ポストランナーは新しく開発されたトンジェ・ルートを通ってポカラに出て、カトマンズまで手紙を空輸、カトマンズからは例の通りビナヤ君の手で内地へ送られ、毎日新聞社についたのは五月三十一日夕刻であった。このときには真相を誤り伝えられるのを怖れて電報は打たなかった。

ところが二十八日夜にはＮＨＫがニュースとして取り上げ、二十九日朝刊には「篠田隊長重態」として大きく報道された。カトマンズからの二十八日ＡＰの通信はつぎのようなものであった。

Karthmandu, May 28 (AP)

Prof. Gunji Shinoda, Leader of the Osaka University Mountaineering Club, is seriously ill with ulcer, according to a message received here Sunday. The message, dated May17, said Shinoda is leaving treateded by Dr. Shoji Bito, Physician of Osaka Univ. Hospital, The message from the Base Camp did not mention the expeditionary doctor, Senya Sumiyoshi. The Japanese expedition is trying to climb 25,706 ft. Dakura peak also known as Peak

29 in remote western Nepal.

これが二十九日の朝刊に重体として報告された原文である。「毎日」には重体の下に？ を附け、「二人の現役外科医が参加、臨床経験がそれぞれ五、六年と豊富であり、また開腹手術、気管支切開などのできる外科手術用具や、六千時間分の酸素ボンベを携行しているので阪大山岳会は両医師を信頼して治療の面ではさほど困難視してはいない。」と書いてある。また「朝日」には阪大関係者は楽観という見出しで、「徳永事務局長は、こんどのニュースはニュースソースが明示されておらず、登山隊からの正式な連絡でないところから〝重体〟というのは誇張された表現で、篠田隊長はベースキャンプ（四、三〇〇m）で病気の静養をしている程度ではないかとみている。」と結んでいる。重体は Serious ill の訳で正しい訳であるが、なかには重症と一段重い病気にしてしまった新聞もあった。ulcer に gastric とも stomach とも、形容詞がついていなかったので腫瘍とするか胃潰瘍とするか問題になったようであった。

どうして、こんなニュースが入ったか。実はニュースソースはリエゾンのロカで彼がネパール外務省へ報告を出したのであった。この報告は前述のように十七日、ポストランナーに托してトンジェ・ルートを通り、ポカラに二十二日頃着き、カトマンズに空輸され、ビナヤ―郵便局―外務省と通って二十五、六日頃外務省の役人に見られものであろう。二十七日の土曜はネパールの一日ずれた休日であるから、二十八日発表となったものと思われる。外務省も市大隊の遭難直後のことでもあったので少しあわてたものと見える。これと同時に登頂断念の報告も入り、この方は二十九日のAPおよびUPから報導されたので三十日の新聞には登頂断念と私の発病とを結びつけて報導したものが多かった。

これが三十日「毎日」夕刊から三十一日の各紙になると「篠田隊長快方へ」と変って来たのはつぎのような事情である。先に述べたように十八日午後カトマンズ放送で市大隊の遭難を知って、後始末応援のため住吉、西川をカトマンズ

へ急派した。彼らは二十日出発、二十八日、夕方カトマンズに着いた。着いたらすぐに、インド大使館にある郵便局へ行って、住吉、西川が市大隊の応援に来たことを打電するように頼んでおいたが、西川も強行軍の疲れで電報を打つのは翌日になった。「毎日」の古市氏も隊長病気というのに医者である副隊長がカトマンズへのこのこ出て来たのはどうしたことかと判断に迷われたようだった。この日、住吉はビナヤからAPで隊長重体が日本へ知らされていると知り、ビナヤの軽卒をなじると共に、直ちに真相を毎日に打電し、これが三十日の夕刊に出たというわけであった。そして翌三十一日には隊からの手紙も届いたので万事がはっきりして六月三日には「毎日」に「P二九遠征隊長から詳報」が出たのであった。

真相が誤り伝えられるのを怖れて、隊長発病のことを打電するのを避けたつもりであったが、実はリェゾン・オフィサーから洩れたことはポカラに着くまで知らなかった。何か気のせいか、住吉、西川がカトマンズへ着いたことは可及的速かに知らせておいた方がよいと思って、電文まで書いて渡しておいたのだが、西川も内地でこんな騒ぎが起こっているとは想像もしていないので晩に打つところを翌朝にのばしたまでのことだった。

こんな訳でポカラへ着くまでは私の病気が内地の新聞に大きく報導されているとは知らなかった。ポカラに着いてみると、見舞状やら新聞の切抜きが沢山来ていた。ここに見舞状を頂いた方々の名前を一々挙げることもできないが御好意に対して厚く感謝する次第である。また帰国してから、数名の方に、新聞社に電話をかけたり、AP通信の原文を見たりして、心配するほどのこともないと判断したから、見舞も差し上げなかったと言われ、その方々の目に見えない好意と卓見にあらためて敬意を表した。

阪大本部には二十九日十時に田中名誉教授、中村事務局長、鈴木助教授らと徳永留守隊長などが集まって善後策を協議して、隊からの正式な報導を待つことにしたが、このときに徳永の下した状況判断は後になって、実に正確なもので

あったことが明らかになった。この日、毎日の本田記者の活躍は目覚ましいものがあり、住吉の尊父、大島輝夫共によく働いて頂いた。

こうして、始めは絶食、その後おも湯、ミルク、ウェファースと、まるで子供がだんだんと成長して行くような具合に食事が進んで行って、いよいよ樺河内へ転地することになった。

樺河内へ下る

五月二十三日は樺河内へ下る日だ。昨日からアジーバは私の椅子を作っていたが、彼はアンナプルナ隊のエルゾーグ隊長で経験がある。背負子に後向きになって腰掛け、足は縄梯子の桟をつるした上に乗るようになっている。日本流の子供のおんぶと全く逆で、日本人でも神様か仏様なら出開帳のときにこんなかつがれ方をするが、人間ではどうもおさまりが悪いが、考えてみるとこのかつがれ方が一番楽だ。

八時、この椅子に乗って、パサンテンバの肩に収まった。彼とダノルブとが強力無双で二人で交互にかつぐことになっているのだ。

昨日もあまり天気はよくなかった。今日も晴れてはいるが雲が多く暗い。後向きになって、登頂を断念した山を眺めながら、病にたおれた隊長が山を下って行くのだから、できるだけ深刻な顔をしてくれということだが、生憎、そんな気にはなれない。ヒマラヤで入院十日、いよいよ退院で気持ちも、うきうきしている。断念するまでは何とか登頂路を最善を尽くしたつもりだが、今となっては断念したことに悔いがないばかりでなく、P二九という山がこれだけ困難な山だとわかって非常な喜びを感じている。深刻な顔をするのもなかなかむつかしい。

しかし、よくしたものだ。小秋元は慎重に何度も何度も露出計を見ていて時間がかかる。恢復したとは言っても病後で、すっかり痩せており、また長く立っていると非常な苦痛だ。こんなことで、たくまずして深刻な表情が顔に出てしまった。

一行は交互に椅子をかつぐパサンテンバ、ダノルブに尾藤とアジーバを加えて五人、二人のシェルパは椅子をかついでいる間は実にしっかりした足取りで、ガレ場も、岩や苔の上も絶対にスリップしない。そのくせ、二五キロの個人装備をかついているときにはときどきスリップする。これだけ気をつかっているかと思うと、嬉しくなって来る。

後向きだから山が段々遠ざかって行くのは当り前だが、こんな経験は始めてだけに感慨がないわけではない。しかも、天気は大部悪くなって来て、十日前に行った西尾根のジャンクションが雲に隠れ、住吉コルのあたりも次第に雲に包まれて来た。こうなるといささか感傷的にならざるを得ない。

カトマンズに戻ってカイザー元帥に招待されたときに、自分は、はじめミルク、つぎにウェファースとなり漸くビスケットが食べられるようになった。だからネパール、それもツラギ氷河のほとりで生まれたベービーであると言ったら、大いに喜んでおられたが、これは冗談ばかりではない。四十八年ぶりに病気らしい病気をして寝ていると、安静にしていてもいろいろなことが考え出されて来る。大病をすると大人になるのが普通だろうが、私の場合は何か若返ったような、これから再出発だというような気がしてならなかったからだ。

十二時少し前にＲＢＣ着、天気も大体もつようだから、更らに下まで行くことにして、一時前に出発、一時間ほどで谷が開けて広々としたところに着いた。

附近には岳樺が多く、猿の尾がせがかかっており、ちょうど新芽が現われたばかり、また桃色と白のしゃくなげも盛りは過ぎたが、まだ美しい。川のほとりの広い台地には白馬あさつきそっくりの草が一面に立枯れており、雲上カルカの下で見たような小さな竹も所々に密生している。

テントが張れるまで草原で寝ころんで、谷川の音を聞く。谷川の音と別れてから、もう一か月以上になるので懐かしい。

ドナ・コーラはこのあたりで西へ方向を変えていて、谷の奥（下）にはアンナプルナⅡ峰が見え、東の方には六七〇〇峰とその二段の氷河とがよく見える。通って来た谷はカーブしてしまったので、よく見えないが六七〇〇峰に続く尾根、兼清、山本（信）の登った谷とコルのあたりがよく見える。

何となく、往年の徳沢のあたりを思わせるものがあり、神河内にちなんで樺河内という名になってしまった。

ここまで来ると標高も三五〇〇m程度になるので雨は降っても、雪は降らない。標高が低くなって、緑が見られるとなると病気は目に見えてよくなって来る。ここへ着いた翌日の朝は二十歩ほど歩くと少しめまいがしたが、午後になると百歩、またその翌日、二十五日になると、もう二百歩いても別に気分が悪くなるようなこともなくなった。

ベースキャンプにいた頃、酸素を吸うことを考えてみたが、医者がその必要を認めていなかったことでもあるし、酸素を使ったとなると隊の中に多少の動揺は予期しないわけにはゆかなかったので、思いとどまった。そして、その代りにできるだけ早く環境のよい所へ少々無理をしても下ることにしたが、その結果、病気再発ということもなく、めきめきと快方に向かい、医者であると同時に住吉がカトマンズへ去った後は事実上の隊長の役目もしなければならない尾藤の用事を少しでも軽減できたことは幸いだった。

二十四日の午前中は尾藤とペンバノルブが左岸の山へ六七〇〇峰、フンギなどの偵察に行ってしまったので、一人で日向ぼっこをする。前日、カルマとアンダワが下流の竹橋のところで熊に会ったとのことで、ネパールの熊は月の輪をもった日本熊に似たものだが猛獣でないので、出て来ても別に何ともないわけだが、二十歩あるくとめまいがするような体ではやはりあまりよい気持ちはしない。

二十四日、夕、山本（光）、小秋元、ロカらが着き、翌朝山本（光）はアジーバ、パサンテンバ、カルマなどと出発した。アジーバとパサンはナジェまたはトンジェへ行って人夫を募集するため、他はキャラバン・ルートの道普請のためだ。

この日、兼清、山本（信）は氷河の彎曲点附近からウェスト・コルの北へ伸びている尾根のコルへ登って、ツラギ氷河の内院の附近の写真を取って来た。この尾根のウェスト・コル側は凄い断崖で、とてもウェスト・コルから達することはできないことを確かめた。私がウェスト・コルに行ったときにも、ここを通ってツラギ氷河へ越えることは不可能だろうと思ったが、これで、それが確認されたわけだ。これでチプラの住人がみそぎに行くというドウトウ・ポカリはウェスト・コル附近のものであって、ツラギ氷河の氷河湖でないと断定できることになった。そして、尾藤隊の見た岩峯も、このコルから確認でき、このあたりの地形は余すところなく明らかになった。

彼らはカールの雪の上を一気に下って、草付きの所に出たところ、そこに平らな所があって、平らな石を数枚並べてあったのを見付けた。一緒に行ったダノルブは羊に塩をやる場所だと説明したが、附近に外に人の入った形跡は全くなく、焚火の跡らしいものもなかった。夕食後、これが果してカルカの跡かどうかで議論が沸騰した。湖岸の堤の下の岩小屋にカルカの材料が少しあったことは、既に五月八日に見付けているが、何れにしてもカルカの跡はかすかである。結局、未完成のカルカではないかということになった。そしてこのカルカへ入って来た人間はこのドナコーラを登ったことは確かであろう。

二十六日、朝、尾藤はペンバノルブを連れて川を渡り、左岸の山へ登って行った。尾藤にとって久し振りのやぶくぐりだ。やぶくぐりで時間がかかって充分な成果とは言えないようだったが、それでも二段氷河の地形を明らかにし、六七〇〇峰とマナスルとの間の尾根は越えられそうな所はないことなどが確かめられた。

この日、兼清、山本（信）はベースキャンプを撤収して、樺河内に合流した。これでサーブは道工作に下っている山本（光）を除いて全員揃ったわけだ。夕食の賑かなこと。私も大部、恢復したので、焚火を囲んでの夕食に出ることになったが、日魯漁業の真空乾燥のほうれん草のスープ、卵の黄味、ウェファースという食事、ここへ来てから漸やく醬油を入れるようになって味もよくなって、食事が楽しみになったが、それでもすぐに済んでしまう。これにくらべると

サーブ連の食事は時間がかかる。鶏のてり焼きができたが、ロカを加えるとサーブは五人、それに対して足と手は四つしかない。ロカにジャンケンを教えて、勝った者から順々に取って行く。段々に食べるところがなくなり、果ては骨まで焼いて食べるような始末。このあたり、竹があるだけに筍があり、鈴蘭に似た葉の若芽も食べられるので、山の幸に恵まれているという感じだ。

二十七日は午後になると雨、今日あたりポストランナーが帰って来るはず、そして古市さんの心尽しの「毎日新聞」の大きな束も来る頃と思って待っていたが、雨が降り出してもやって来ない。多分、山本（光）に引き留められて、途中のキャンプに停滞しているのだろう。

帰りのキャラバンのための荷物の整理も済み、帰りの荷物の数は上のキャンプに三十六個という数字が出た。今はアジーバの集めた人夫が来るのを待つだけだ。もう雪線以上の行動は完全に終って、後は段々と人里へ、そして本街道から都会へという順序だ。すっかり、のんびりしてしまったか、また散髪が始まった。隊員中で一番髪の伸びていた山本（信）もすっかり男前になって見違えるようだ。

翌、二十八日、予想通り山本(光)が引留めたポストランナーが戻って来た。この前のときと違って手紙が実に多い。兼清も彼女からのだろう。すっかり上機嫌になっている。マナスル隊登頂記念日の会合からの槇隊長始め皆様のお手紙も面白い。新聞もほとんど一月分が一度に届いた。むさぼるようにして読んで回覧する。

ここのキャンプの荷物も整理を終えたので、もう出発できるのだが、人夫はまだ上って来ないので出発できない。

二十九日になって、やっと人夫が上って来た。チベット人が多い。中には顔見知りもいるが、大部分の者には登山隊が珍らしいと見えて、しきりとテントの中を覗きこんでいる。これで漸く出発できるようになって、キャンプサイトは急に賑やかになった。

ドナ・コーラの峡谷

五月三十日はキャラバン出発の日だ。例によって小鳥の声で眼が覚める。東南の六七〇〇峰のスカイ・ラインのあたりは漸やく、くっきりし出しているが、谷の下手のアンナプルナⅡ峰は、まだ月夜に見るように、白くぼんやりと見えるだけだ。

日の出が近ずくと共に六七〇〇峰のあたりの空は次第に光り出し、複雑な稜線で遮られた光が、線になって、御光のように射出している。

ヒマラヤのこの標高では確かに塵埃は少ない。だから複雑な色とか、光とかいうものはアルプスあたりよりは見え難いので、山は概して、くっきりして、色も地膚そのものを、いつも見せているが、まだこの高さでは塵埃も、水蒸気もあるので、やはり夜明けともなれば相当に複雑な色と光の変化を見せてくれる。しかも山は高く、谷は深い。峰と谷とのコントラストはきつい。

やがて、六七〇〇峰の支尾根の末端のピークが光り出した。こうなると夜が明けたという感じだが、まだ近くの岳樺の林は眠っているようだ。六時にモーニング・ティー、六時半には尾藤、兼清は上のキャンプRBCに出発した。

この頃になると、もう岳樺の幹も光り出しキャンプ地にも日が射し込んで来た。ここの荷物は少ないので人夫は十五人だけ、ここに残して、他は全部、上のキャンプ地まで引張って行かなければならない。

昨日、アジーバの連れて来た人夫の中には素質の悪そうなのも相当雑っている。人夫への賃金のことも、大体諒解し

た。アジーバの片言の英語にもすっかり馴れたが、彼は字が書けなく、表情も少ないので、支払い条件と言ったような細かい点になると、どこかに意思の通じていないところが残っているに違いない。何れにしても、雨期を目の前にひかえているので、早く本街道へ出る必要がある。それにはキャラバンを動かすことだ。隊長は早く出発するにかぎると、七時五十分出発。ダノルブ、アンダワ、パサンテンバが交互に椅子をかついでくれ、山本（信）が付き添いというわけで、五人で先発する。

右岸を下るにつれて、次第に谷は狭まって来る。川の傾斜は日本の山に見られないような勾配である。日本の山ならば、これだけの水量で、これだけの急勾配ということは考えられない。必らず滝があったり、瀞があったりというところだろうが、一様な勾配で急流が流れている。黒部の本流に匹敵する水量で十キロあまりの距離で落差二〇〇〇m、その間に滝は全くないのだ。

漸やく、岩壁にぶつかった。ここで昼食、と言っても無糖ミルクとウェファースという簡単なもの、このあたりまで来ると、緑も濃くなり、しゃくなげの花も白と桃色が目立ってふえ、六七〇〇峰も谷の奥になって来たので高いという感じがして来た。

谷は次第に狭くなり、二、三か所に山本(光)が手入れをして、ザイルを固定したところがある。ナジェの猟師の泊り場もあり、その附近には対岸に渡る竹橋がある。竹橋は古く、昨今作ったものでない。この谷を下って来ると水量の変化、特に雨期の増水が少ないように思われる。猟師の泊り場は、優に数十人収容できる程度の広さだ。

樅の木の新芽が美しくなった、と思ったら、目の前に竹の橋が現われた。大きな岩小屋がある。ここが今日のキャンプ・サイトだ。一時五十分着。

四時半頃には尾藤、山本（光）も到着して、サーブは全員揃った。クーリー達は例によって出発のときにゴタゴタを

起こした。腰の重い十人ばかりはなかなか出発しそうもない。荷物の量にくらべて、人夫の人数が不足しているので、当然、荷物が残る。そこで最後になった人は、その中から目星しいものを失敬しようという算段だ。尾藤、山本（光）は不要になった食糧を焼き捨て、彼らにとっては貴重品だが、キャラバンを終るまでには使いきれない石油も川の中へ放り込んで、後には彼らのかつぐ荷物以外は一物も残らないようにしてしまった。これで漸やく彼らの重い腰もあがった。

ところが、彼らはも一つ上の岩小屋のところでストップしてしまって、一歩も動こうとしない。荷物の中にはサーブのテント、食糧など、今日の泊りに必要なものがある。そこでパサンテンバ、アンダワ、ダノルブという腕っ節の強い三人と便利屋を派遣した。三人のシェルパは人夫七人を連れて六時半頃戻って来たが、彼らは見事に第二組合の結成に成功して、そのお蔭で、楽しいキャンプができたわけだ。この腕前にはサーブ連すっかり感心してしまった。アジーバとアンナンギャルは人夫たちと一緒に泊った。

人夫達のストの気配は昨夜からあった。ナジェの年寄りは、ここから下の道は危険だから、上の旧道を通ろうと主張していた。これでは一日だけ予定が延びる。彼らの言いそうなことだが、彼らの言い分は言葉の通じないことにかこつけて聞き流していたのだ。それで明日も、この問題が蒸し返される可能性があるので、明日の対策を打合せて就寝。

三十一日、七時過ぎ出発左岸へ。昨夜は谷川の音が相当やかましく、今朝はほととぎすの声を充分に楽しんだ。日本の五月の山を思い出すような所だ。悪場が四か所ほどある。一か所は六甲山の保塁岩のような所を下るのだ。アンザイレンした所が二か所ほど、他は固定ザイルを利用する。負われたままではこういう所は、あまりよい気持ちはしない。しかし一昨日あたりから、目に見えて手に力が出て来たので、万一の場合でも何とかなると、安心した気持ちになれるだけ幸いだ。

十時半に岩小屋に着いた。ここで私はしばらく、ヒラテンジンと共に残留し、山本（信）はシェルパ三人と共に人夫の激励に再び谷を登って行った。岩小屋は相当なスケールで奥には水が流れており、上からはマグネシウム塩らしい鐘乳岩が垂れ下がっているが、あまり綺麗なものではない。例によって、この附近にも支流が大きな滝になって注ぎ込んでいる。

人夫たちも悪場が通過してしまったようだから出発することにした。これから先の道は上り下りは多いが悪場はない。下るにつれて峡谷は深くはなったが、次第に開けて来た。松の木が出て来た。南画のような風景だ。岩までも南画だと思っていたら、達磨のような人間に会った。布をまとった老人、グルン人だろうが、顔付きも達磨のようだ。

ナジェに近ずいて、道もよくなり、材木運搬の道に出るあたりまで来ると、目の下に麦畠とナジェの村が見える。麦秋で収穫に忙しい。二時、予定のキャンプ地着。ここはナジェの村の下で、神社の横、附近は全部麦畠だ。この神社のような所は日本で言えば鎮守の森と言ったところで、伐木を禁ぜられていて、大きな木が茂っている。ナジェの村まではじゃが薯畠の中を登って行って、数百米。村の人家はチベット風に石を積み重ねて作ってあるが、種族はグルンである。

村の人間は大きな籠を持って来て、麦の穂を摘んでいる。鎌で刈るのではない。ここはトンジェまで二時間だが、村、自体が本街道からほんの少し入ったところにあるためか、登山隊は珍らしいらしく、子供や女だけでなく、西南戦争の頃に使われたような歩兵銃を提げた人間も現われて来た。

三時頃になると人夫も続々到着、これで漸やく、未知のルートを通ってのキャラバンを終って、人里へ出たわけだ。ここまで来ると日本の六月のような気候で急に暑くなったので、木蔭で休む。これからは本街道のキャラバンという安心感か木蔭の風が快ろよい。

竹橋のところで、人夫が一人、山の上の旧道へ登ってしまったとのことである。彼は新道の危険を怖れて上を廻ったのだ。いつになったら、やって来るか、少し心配したが七時前になって、やっと到着した。これでみると旧道というのも使えない道ではないようだ。旧道を使わなくなってから、相当な年数がたっているようだから、若し、氷河湖の上のカルカらしいものが、本当にカルカであったとすれば、この道をカルカ道に使ったものであろう。

賃金支払いの段になって、果して問題が起こった。チベット人はトンジェから連れて来たので、三ルピーの割増しがいると、アジーバが言い出した。彼の言い分では樺河内でサーブに言ったとのことだが、こんなことは誰も聞いていない。多分、昨夜、人夫たちと一緒に泊ったときに強要されたのだろう。これではサーダーとしてなっていない。小生パジャマを着て、テントの中へ入り込んで、病気が重くなったような形で狸寝入り、尾藤がやっと彼を説得して、あやまらせるために小生のテントに連れて来た。

ここまで来ると、晴天続きで水不足とのことであるが、今にも雨が降りそうな曇空になったり、また晴れたりして、梅雨頃のような空模様である。今年はから梅雨というところだろう。漸やく農繁期に入り、その上に街道の橋の補修に大勢の人を出しているので人夫は容易に集まらない。この地方の最有力者はトンジェのインド軍の無電を預っているチェック・ポスト・マンだから、彼を通して人夫を集めてもらう。また、ナジェの村長の息子もチェック・ポストに勤めているので、その関係をたどって村長にひと骨、折ってもらうことにするなど、百方手をつくしたが、なかなか必要な人員を確保するところまではゆかない。

この間に、隊員たちはシェルパを連れてトンジェへ行ったり、尾藤は現地診療で忙しい。

六月一日、兼清はシェルパ三人を連れてトンジェへ行って来た。そして、ドナ・コーラの落口を充分に観察して帰って来た。落ち口は両岸切り立っていて、自分がドナ・コーラを下って来て、あの辺に落ち口がある筈という見込みをつ

けて見るから落ち口がわかるが予備知識も予想もなしではとてもわからないとのこと。マナスル隊やヒマルチュリ隊が帰るときには雨期に入っていたのだから、落ち口の対岸を通っても発見できなかったのは当然なことだということが明らかになった。この日の兼清は大した元気だった。トンジェからロキシー多量のほかにロキシー娘と称する女性まで連れて来ている。彼女は真珠のネックレースをしている。これは住吉サーブのプレゼントなのだ。シェルパに彼女の名前を聞いてもスミヨシ、サーブ、ワイフと言うだけで笑って答えない。ただし、これはシェルパ連の知っている英語の中に女性をあらわす言葉がワイフ以外にないことを彼の名誉のために付け加えておこう。

この晩はサーブもシェルパもすっかり浮かれてしまった。一時頃になっても籠の鳥や炭坑節が聞こえる。果して翌日はサーブ連中昨夜のチベッタン・ダンス練習のお蔭で足首がすっかり疲れてしまっている。八時頃住吉隊のポーター等四人が帰って来て、帰りのキャラバンの見込みもついた。

この日、漸やく人夫三十九人集まる見通しもつき、残り六人は明日、手配すれば何とかなるので明三日にいよいよポカラへ向けて出発することにする。

ポカラ帰還

六月三日、例によって一行よりも一足、先に出発する。アジーバだけは人夫の募集に出掛けている。彼は残りの荷物を新らしく集めた人夫に持たせて、後から出発して本隊を追うことになっているのだ。

ナジェの村を通って、始めてマルシャンディの大峡谷を見下ろす地点に着いたときはもう八時を過ぎていたが、谷の底は如何にも暗い。壮年期の谷で谷が深い上に、光を散乱する塵埃のようなものも少ないためか、下の方の暗さは格別だ。ここで始めて壮年期の、まだ盛んに成長しつつある谷の景観に接した。今日の泊り場、タールに着いたのはまだ十一時前だ。ここは一面の河成丘で、灌木がまばらに生えていて、人家が二戸あり、とうもろこしの畠がある。左岸の崖からは華厳と霧降りを一緒にしたような滝が落ちている。支流はすべて、このように吊掛け谷、滝になって本流へ注いでいるのだ。本流の侵蝕が如何に甚だしいかがわかる。ドナ・コーラでも支流は滝になって注いでいるものが多かったが、この点本流なみである。

ここで休んでいると湖が欠潰したために増水して橋が流れ、修理に二、三日かかるとのこと。橋というのはジャガート附近のマナスル隊以来のなじみの橋らしい。そうなると完全な川留めである。

翌、四日、キャラバン開始以来、始めての雨、十時前にサタレに着いてしまった。ここに橋があったのだが、それが落ちてしまったのだ。ここは本街道の橋でスイスの技師が来ているが、ワイヤ・ロープが一本通っただけで、ロープの端は一時的に留めてあるだけで、利用するにも危険を伴なう。その上、滑車を利用しようとしても、なかなか思うよう

に取付けられない。仕方がないので停滞することにする。山本(信)、兼清のエンジニヤは滑車をタンデムにして、ワイヤロープを使って荷物の輸送をやろうと、機械工作に忙しいが、こうなると工具が充分とは言えない。

対岸にはスイス人技師、ネパール政府の役人などがいる。手紙を対岸に投げて、荷物の輸送について協力方を要請する。

対岸には技師のほかに、カトマンズでチーズ作りの指導をしている老スイス人も来ている。漸やく、六時頃になって彼の投げた手紙で、明日十二時頃には竹の橋ができることがわかったので安心する。

このスイス・チーズ作りの老人、始めネパール語で返事をよこしたが、通じないと知って無理をして英語で返事を送ってくれた。判読するのに骨が折れたが、彼の好意には感謝せざるを得ない。

五日、橋は三時間かかる予定のところ、一時間半で、できてしまった。ネパールにしては珍らしいことと思ったら、橋作りの名人が来たからだとのこと。橋は吊橋で、ロープは皮をはいだ竹をなったものだ。完成までには、まだ何本かロープを渡す必要があるが、もう通れるので一人、一人通る。ザイルを張って万一に備える。というのは流石に雨期で、マルシャンディの濁流、急流は全く物凄いからだ。橋と水との間はいくらもない。これでは橋が少し古くなれば直ぐ流されてしまう筈だ。便利屋のラルがトンジェでストーブと物々交換の山羊を背負って渡って行く。山羊くん始めのうちはメーメー泣いていたが、そのうちにあきらめたか、おとなしくなってしまった。

スイス人アシュマン夫婦はもう半年もここに住んでいる。ワイヤロープは着いてもセメントが着かない。僅か二十五キロの家庭用一袋だが、グルカから送って来る予定になっているのが十週間待っても、まだ来ない。セメントがないのでワイヤロープの固定ができないので弱っているとのことだ。彼は戦前からシェルパとして活躍したアンツェリンを使っていて、これが彼の仕事に大いに役立っているようだ。

スイス人技師の住んでいる所の少し先にサタレの部落があり、その先の部落がジャガート、ここで一泊することにした。思わぬところで川留めに会って、予定が一日遅れたが、近代式の吊橋も秋には完成するので、これもこれから先は昔話になってしまうことだろう。

六日はシャンゲを経てゴプテ泊り。午前中は雨、午後には上った。このあたりへ来ると道もワイヤロープを渡したり、棧道を造ったりして相当手入れをしてある。

シャンゲの対岸にウブラ、タロの両チプラが見える。このあたりまで来ると支流との合流点も今までのような吊懸谷ではなくなって来る。ジャガートあたりまでは滝が天上から落ちて来るような感じであったが、ここまで来ると山から落ちて来るという感じである。

七日はクディに着く日だ。対岸のボンダラは実に耕作が行き届いている。このあたり田を耕しており、苗代も見かけるが、苗代の苗の色がいかにも黄色で、耕地面積の二割以上もありそうな所もあった。こんなところまでネパールらしい。十一時半、ブルブレ着、これで往路と合したわけだ。ここまで来ると日用品は何でもある。往路では物を買う気もしなかった茶店で、たばこ、乾ぶどう、肉桂などを買って喜んでいる。

この日はクディのマンゴー園泊り、往きには花が咲いていたが、もう実がなっている。

八日もパグルンパニを通らずに少し右手の寒村マテラ、ガオンから尾根へ出た。こんな所に相当な戸数の村が隠れている。往路住吉がパグルンパニの少し下で聞き込みをやっていると、いつの間にか大勢の人が集まって来たというのも、この村から来たのだろう。

往路と別の尾根を通って、マリンの村からミディ・コーラの河畔に下ってキャンプ。

九日は朝の水量の少なくなったのを利用して、ザイルを張って渡渉、昨夕と違って簡単に渡れた。峠からほぼ水平に

ギーレンの豊かな村で昼食、そこから一直線に下るとルディ・コーラの吊橋に出た。昨年と違って例のアシュマン技師の造ったワイヤロープの立派な吊橋がある。もう暑いのでサーブ連、特に往年の飛込選手小秋元はよく泳いでいる。

十日は峠を越えてマディ・コーラの畔に出て、河に沿ってトンシコートを経てバグバティ・バザール着。ここまで来るとポカラに近いためか物価も高い。

マディ・コーラの道にはとうもろこしの畑が多い。幹は細く、実はあまりついていない。一本平均して一個を少し下廻る程度だ。それも歯がかけたようなのが多いのだから恐れ入らざるを得ない。茄子もトマトもあるが何れも小さく、じゃがいもも平気で花を咲かせている。

十一日、モンスーンはビハル州の北面にあるというのに、このあたりは上天気で甲州の猿橋と同じ構造の橋を渡って峠にかかるとマチャプチャリが見えて来た。峠から山腹を縫って行くうちに往路で見た二つの湖が見える。やがてセチ・コーラに下ると流石に暑く水牛も水浴をやっている。二時半、ポカラ空港着、住吉、西川に三週間ぶりに再会、再び全員の顔が揃い、キャラバンは終った。

ここで始めて、日本からの新聞、「篠田隊長重態」の記事を見たり、大勢の方々からのお見舞の手紙に接した。

賃金支払の段になって、アジーバがごね出した。彼の言い分を聞いても損はなさそうだからすっかり呑んだら彼の給料は一、〇〇〇ルピーほどが八〇〇ルピーと二割も減ってしまった。それでも彼は満足している。アジーバ直系以外のシェルパはアジーバの態度に反感を示していた。

十七日になってやっと飛行機が来たので尾藤、小秋元と共にカトマンズへ。マナンの奥で診療に従事しているスイスのイスレル博士と楽しい四十分間を過ごした。

帰国

カトマンズの滞在は万事型の如く。外務省ヒマラヤン・ソサエティの訪問、恵下氏、ハーゲン博士などと旧交を温める。二十一日には全員また揃った。この日、ナラ大将が訪ねて来て下さった。夜は全員、カイザー元帥に招待される。令嬢とその夫の大将も列席し、賑やかな誠に愉快な一夕を過ごすことができた。私の病気の ulcer を単なる腫瘍と思って不思議に思っていたようだったが、胃の方の ulcer だと言ったら、それでやっとわかったと言っていた。私が、まだ食事に困っていると知って若くて美しい夫人はわざわざ英国製のビスケットを持って来てくれた。帰りがけ、元帥の握る手は処女の手のように軟かい。

二十二日、カルカッタ、そして二十五日、真夜中、羽田着、空港には深夜にも拘らず日高会長、古市さん始め大勢の方々が迎えに来ていて下さり、思いのほか元気だと喜んで頂いた。

P二九の現地名

P二九というのは言うまでもなくインド測量局の記号である。我々はこの山にはP二九という名を永久に残しておきたいとも思うが、その反面、現地で何と呼んでいるかということも、登山隊としてはしらべてみなければならないことである。

カトマンズ滞在中にも、各方面の人に尋ねてみたが、こんな問題にはカトマンズ人種は無関心である。ただ一人、UPIの通信員のグブタはDakuraだと言っていた。

後からギャルツェンが来たので聞いてみると、サマの村ではP二九は見えるが名前はない。ダクラというはトンジェ人の地方名だろうとのことであった。そしてraは峠の意味だとのことであったが、峠ならば一般にlaでraではない。しかしlとrはネパールではそれほど厳重な区別はないようだ。

ポカラに近いポツバイヤの峠の村でラルケという名で呼ばれていることは既にキャラバンのところで述べた通りである。

ナルマからパグルンパニまでの間の尾根ではP二九はよく見えるが、遂に山名を知っている者に出会わなかった。パグルンパニで本隊も聞込みをしてみたが、山名を知った人を見付けることができなかった。住吉がその直ぐ下でツラギということを聞き込んだのは、通りすがりの人で、土地の人ではなかった。

ムシコーラの谷で住吉が聞き込んだのはツラギという名であった。これは山名というよりも、そのあたり一帯の土地

の名と見た方がよいかも知れないが、土地の名に岳をつけると山名になる場合も多いので、山名と見ても差支えなかろう。私もツルベシの上の村でツラギという名は確認することができた。

尾藤隊がチブラ方面で聞いたところではツランギであり、ロカがトンジェの役人その他から聞き込んだところではThulanagiであるとのことであった。トンジェではPhungiがPulneyとなっている。結局フンギ、プンギ、プルニ何れも同じと見ればThulangi, Thulagi又はThulanagiのなまったものと考えてよかろう。そうなるとツラギまたはツランギでThulangiとnを入れて綴った方が適当ではなかろうか。

トンジェのチェック・ポスト・メンはチュはチベット語で峰、ラニは女王の意味だと説明してくれた。またカトマンズのビナヤはP二九はTurugiで、これはサンスクリットの鞍の意味で、マナスルが馬の首とすればP二九は鞍に当るからだと言った。そう言えば山の色は栗毛の駒を思わせるものがある。山名の意味を別問題にすると山の名はツラギまたはこれに似た発音と見てよいだろう。

六七〇〇峰はドナ・コーラの肩に当るのでドナ・フンギだということを聞きこんだが、これはどうやら氷河湖に近い瘤のことらしい。トンジェで聞いたところではCheaw Pulneyだがこれもマナスル以来の習慣に従えばCheaw Phungiとなるわけである。一応これを取っておこう。氷河湖はナジェの住人の習慣に従ってニョウ、ポカリと呼ぶのが適当と思われる。

我々が樺河内と呼んだところはBangoy Khalkaと呼ぶということも聞いたが、トンジェで聞いただけで疑がわしい点があるので本書では一応、樺河内と呼んでおくことにした。

ツラギ氷河のなだれ

ツラギ氷河のアイスフォールのなだれが実に劇しいこと、最も回数の多いのはAなだれと名付けたことは既に述べた。アイスフォール下部の岩壁の露出した部分に滝のように落ちるもので、小さいのは白糸の滝と言いたいようなもの、大きいのはナイヤガラの瀑とでも言いたいような岩壁の巾一杯のものであった。Bなだれと呼んだのは六七〇〇峰のルンゼを落ちて来るもので、この方は回数は遙かに少ない。そのほかにP二九本峰直下から落ちるもの、マナスルの七〇〇〇mあたりから落ちるものなどを観察したが、これらは回数は少なかった。

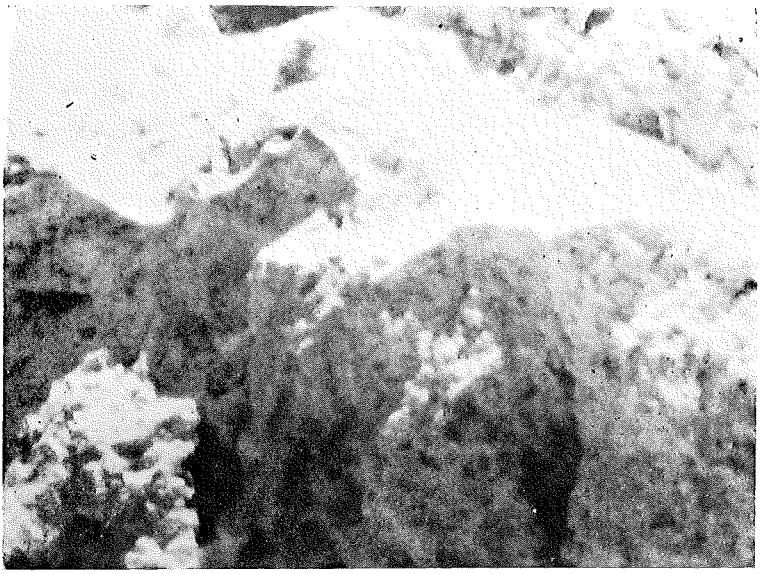
アイスフォールのなだれを見ていると、その様相は時々刻々変って行くような気がするが、アイスフォールの形は複雑だから、果して変ったのかどうか、はっきりわからない。そこでベースキャンプから毎日、定時に写真をとったが、まだそれらの写真の検討は充分進んでいないので他日に譲ることにする。

ベースキャンプに滞在したのは四月三十日から五月二十三日までであったが、その間に行動をした日も、病気で寝ていた日もあって充分な記録はとれなかったが、当時の日記から拾ってみると

五月一日、夜半から暁方にかけてなだれの音六回。朝、Aなだれ七―八分に一回、十一時頃まで同じ状態

二日、午前Aなだれ活潑、午後から緩漫になる。

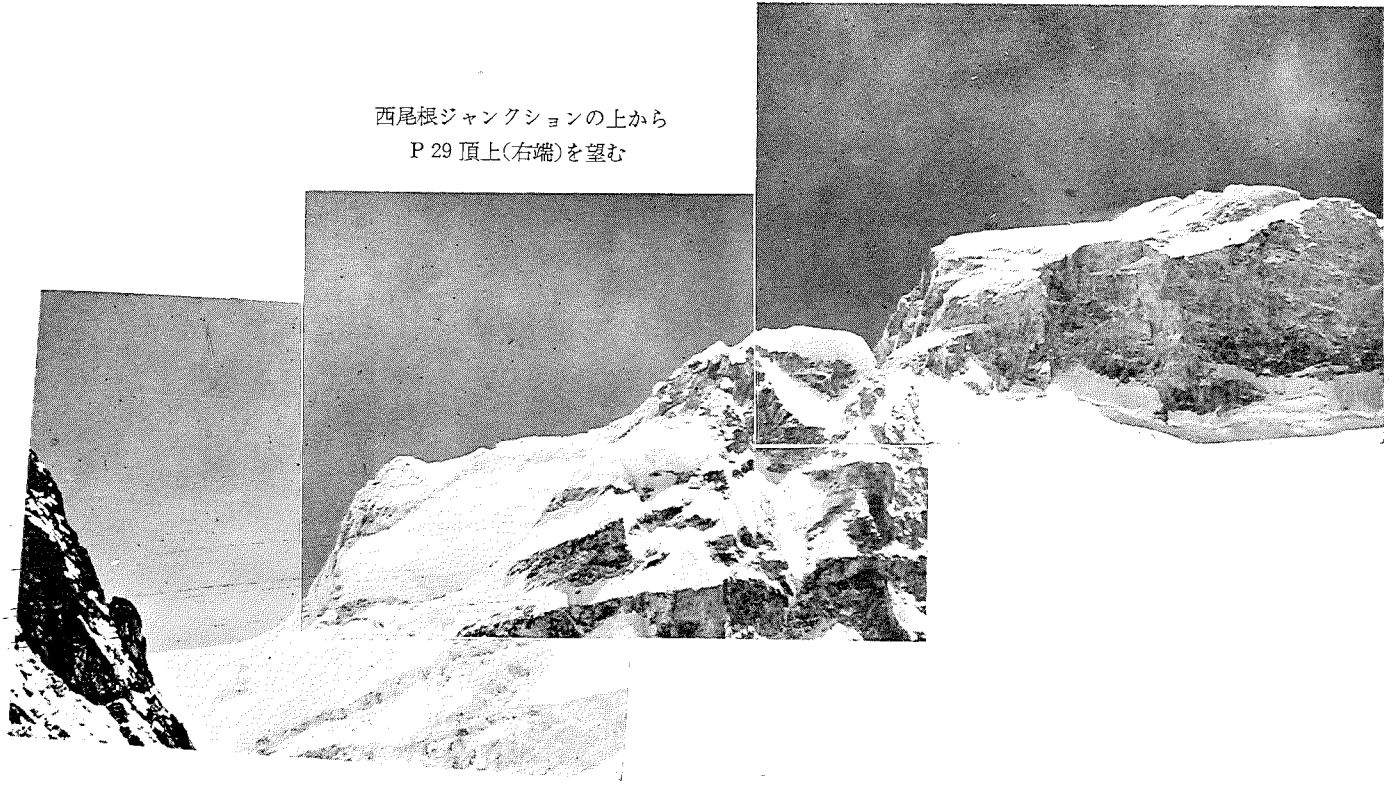
四日、P二九本峰直下からと六七〇〇峰からマナスル側へ、共に非常に大規模。Aなだれも比較的大きいもの右岸、左岸に各一回



（上）なだれの前　　（下）なだれの直後

キャノン 2,000mm 望遠レンズでとらえたなだれの前後

西尾根ジャンクションの上から
P 29 頂上(右端)を望む



五日、特に多く午前六時から七時までの間にAなだれ八回、十時過ぎBなだれの大規模なもの一回、続いてAなだれの大きいもの左岸および右岸に各一回。

九日、なだれの状況は変らない。この日、なだれの前後の望遠写真撮影成功。

十日、アイスフォール下部は安定期に入った感がある。

十四日、Aなだれ多少活潑になったが、Bなだれは起こらない。Aなだれは五時過ぎ、十時五十分、十一時三十五分、十五時三十五分に起こり、最盛期に比較すると遙かに少ない。マナスル頂上直下一〇〇〇mあたりから十時五分、十五時三十五分に起こった。

十八日、暁方、音が一分内外続いたものが二、三回あった。Aなだれは九時前後に二、三回。六時五五分にはAの範囲全面に広がり音も六十五秒続いたものが発生した。

十九日、朝十時前後、Aなだれ二回（全面）夜、三十八秒続いたもの一回。Bなし。

二十一日、Aなだれの小さいもの現われる。

十五、六、七日の記録がないのは病気で寝ていたためである。Aなだれの記録を見ると五月上旬が特に激しく、それも午前中に多いことが認められる。天気は午前中、晴れ、午後は雪であるから、午前中に多いというのは新雪なだれと新雪によって不安定になった氷塊のなだれとが雑ったものと言えよう。

P二九本峰直下から出て、一面にひろがり、巾二―三キロに、及ぶかと思われるような大規模のものが落ちて来て氷河に近ずくとルンゼを埋め尽くして、その先端はツラギ氷河のアイスフォールの下に達するものは五月四日に観察されたが、その後同じような大規模のものが数回おこった。

十日を過ぎるとAなだれの回数は確かに減り、その代りにマナスルの七〇〇〇m附近から落ちるものが目立って来

た。これはなだれ活動の中心が次第に上の方へ移って行ったものと見てよいだろう。

十四日、夕六五秒続いたなだれの音を聞いた。アイスフォールの上の方は雲がかかって、どこから落ちたものかわからなかったが、仮りにアイスフォールの上部から落ちたものとすれば、落差一、五〇〇mで反響と音の発生した場所までの距離を考慮すると音は約七〇秒続いたことになる。そこで等加速度運動と仮定すると終速は毎時約一五〇キロmとなって、特急よりも速いことになる。もっとも、速度が速くなると抵抗もふえるので、これよりは少し小さい値になるであろうが、大体これに近い数字になるものと見てよいであろう。

三十八秒続いたなだれはマナスル又はP二九頂上直下から起こったものとして、落差二五〇〇m、音は四十一秒続き、平均傾斜を六十度とすると秒速一二〇mすなわち毎時四百キロを越えることになって、飛行機級の速度と言えよう。ベースキャンプの位置ではなだれの末端までも三キロ以上あって、七倍の双眼鏡でもブロックは見分け難いが、一キロ半ほどに近ずくと、一つ一つのブロックが見えるので、末端附近まで進むと氷塊は小さく分裂してしまうのは当然であるが、それでも一トン内外のブロックも相当多量に残っていると見てよい。このような大、小いろいろとまざった氷片やブロックで、できた流れが、毎時一〇〇——四〇〇キロの速さで落ちて来て、遠くから見ると汽車の煙が進行するように見えるのである。

五月九日前九時三十分頃Aなだれの起こりやすいアイスフォールの末端と岩壁との境目をキャノン二〇〇〇ミリ望遠レンズで撮影した。望遠レンズをそのままにしておいたところ、撮影したと思われる所から小規模な小便なだれと呼んでいたような、なだれが起こった。そこで再び写真撮影をして、帰国してから現像してみると図のように、なだれの前後で氷の様子が違っているのが、明らかに認められた。その上に、前日から望遠レンズを据えつけたままにしておいたために、方向は少しずれているが、同じ場所を写した写真が得られた。

これらを重ね合せて見ると、前日の午後一時半から、この日の午前九時半までの間に氷が岩壁に沿って滑り、それに伴なって、オーバーハングになった部分が四角な柱が倒れかかったように突出して来て、つぎにこの突出部が崩れて、なだれとなって落ちたことがわかった。

氷の移動した距離を写真から測って、氷までの距離を四キロとすると、氷は四mだけ辷ったことになり、ここの傾斜を六〇度とすると氷の辷りの速度は一日に六mとなった。この数字は氷河の流れの速度にしては大きすぎるが、アイスフォールの末端で、しかも活潑に動いている時であるから、部分的にはこのような大きな速度の所があっても不思議はないと思われる。

ついでながら崩れ落ちた四角な氷柱の体積を算定してみると高さ四〇mで八m角であるから、氷の見掛けの比重を〇・七にとれば一八〇トンとなって、小規模なものであることがわかる。もっとも、この場合にも、この角柱以外に附近の氷も崩壊が誘発されているので、実際には二〇〇トンを上廻るものと見た方がよいだろう。何れにしても、小便なだれと言ってベースキャンプにいると見向きもしないような小さいなだれのスケールが、これで大体見当がついたわけである。

なだれに伴なって、上のオーバーハング気味の氷壁はどうなるかというと、やはり図から明らかなように、前日から、なだれ直前までの間は下の方へ辷っているが、幾分なだれに近い方が速く、少し回転気味であり、なだれとなって崩れ落ちる部分は開き気味である。言い換えると崩れ落ちる部分と崩れずに残る部分との間に割れ目が入るような気味で〇・八mほど開いて来る。つぎになだれが落ちると突然、氷壁は左の方へ移動する、換言すれば前述の割れ目は急に口を開けたようになることがわかった。このとき、氷壁の岩と接した部分には変化はないので、全体として氷壁が左の方へ傾いたとも言えよう。

一方、またなだれ直前の写真で、なだれ落ちた部分を見ると、その部分が前日よりも発達し、同時に、その部分（突出部）の両側が既にある程度落ちてしまって、突出部は孤立して顕著になっているので、このような突出部は氷河の運動を大規模な塑性変形と見ればこれは一種の extrusion と見られ、extrusion によって不均衡になった部分になだれが起こったものと考えられよう。言い換えれば、このなだれはアイスフォールの運動が各部不均一になって、速度が速く、割れようとする傾向を生じている所に起こったものと見てよかろう。

今年の一月十日午後六時、ペルー・アンデスの Nevado Huascarán, 22, 205ft に大なだれが発生して、三、五〇〇の人命を奪った。このなだれは三〇〇万トンの氷塊が頂上直下から落ちて来たものと言われている。〔National Geographic, 121, 855（'62）〕我々が目撃したP二九頂上直下の大なだれは岩壁の中段から発生したものであり、氷壁は巾二キロ、断面の厚さは一〇〇mを越えているので、二〇mもオーバーハングになって、これが一度に落ちたものとすれば氷塊の重量は三〇〇万トンになる。このようなことから考えると、ペルーで大惨事を起こしたような大なだれはしばしば起こるものであろうが、幸なことに通路が人界を離れている場合が多いので、大惨事には至らないで済んでいるものであろう。

P二九の気象

プレ・モンスーンのマナスル附近の気象についてはよく知られているので、山本信樹の観測結果を中心にして簡単に記述しておこう。

この年もインド気象庁とカルカッタのオールインディア放送の好意により、日本の三登山隊のためにIST午後五時三五分から五分間、二十四時間先までの気象、気温、風向、風速などの予想を放送してくれたので、大づかみに明日の天気を予想するのに大いに役立った。またインドのアンナプルナⅢ峰隊への放送があり、アンナプルナがP二九より西にあるだけに、これもまた大いに参考になった。

観測器具はアネロイド高度計四個、棒状温度計、最高最低温度計、自記温度計、毛髪湿度計、風車型簡易風向風速計などであった。

キャラバン中はずっと晴天であったが、四月十三—十五、午前六—九時、P二九とヒマルチュリの上に笠雲を見ている。霞は高度三五〇〇m以下では濃くなっていた。

四月二三—二七日は終日快晴であったが、それ以後天気が崩れ出し、四月二八—三〇日は朝のうちからガスが発生した。

P二九の西面は西尾根でツラギ氷河とヒマルチュリ側に分けられ、また西尾根のウェスト・コルから北に伸びる尾根でツラギ氷河とマルシャンディ・コーラが分けられている形である。日中、山の斜面で暖められた大気が上昇、冷却す

ると共に積雲を発生するのであるが、西尾根の南斜面は広いが、ツラギ氷河の北側には広い斜面が少ないためか、積雲の発生はムシコーラ側や、マルシャンディ側に多く、これが尾根を越えてツラギ氷河側に来るに従って、ツラギ氷河側も雲が増してくる。しかし、谷の中央部には明らかに下降気流があって、雲が消失してしまう場合が多かった。しかし、それも時間の問題で、午後になると山全体が雲に包まれ、しばしば雷を伴なった雪や霰が発生した。

五月中旬から下旬になると上層雲の動きは次第にゆるやかになり、三十日にはほとんど動かなくなって、モンスーンの近いことを思わせた。しかし、六月四日、マルシャンディに入って始めて朝から霧雨が降った。アンダマン諸島にモンスーンの発生が告げられたのは五月十九日であったから、このときには上層雲の動きからどうやらモンスーンの近いことはある程度想像がついていた。

プレ・モンスーン期間中のベースキャンプの天候は安定していて、日の出前に五月上旬では零下五—六度、下旬になると零下二—三度といくらか上昇した。最高温度の平均は十七度程度であったが、これも五月末になるといくらか上昇した。午後の気温は典型的な鋸歯状であった。

気象状態の悪かった五月十日、十一日はその前日の最低温度が高く、夜間の冷え込みが少なく、気圧の谷の通過を明らかに物語っていた。

湿度は気温の変化と対応し、午前六時には八五％であったものが正午には六五％に下るのがふつうであった。風は天候の悪かった五月十、十一日には瞬間風速五—十m程度のものが吹いたが、他は概して弱く、全く無風の状態も続いた。また五〇〇〇m程度の尾根でも五m程度がふつうで強いときでも一〇m以下であって、風向風速は地形の関係もあって一定の法則らしいものをつかむことができなかった。

おわりに

こうしてP二九西面を対象とした遠征を終ったが、帰国後は留守中にたまった用事の整理その他に追われ、まだ遠征で得た写真その他の資料の整理を終っていない有様である。ツラギ氷河のアイスフォールの様相の変化など充分に検討した上で発表したいし、地形その他についても同様である。また装備の面でも各方面の御援助を頂いているので、整理ができ次第、別の形で発表したいと考えている。

この遠征を行なうに当り、外務、文部両省はじめ関係各官庁、日本山岳会、特に前会長日高信六郎氏、今までのヒマラヤ隊の槇有恒氏はじめ村木潤次郎、松田雄一、石坂昭二郎、田辺寿氏や在阪の今西寿雄氏、山田二郎氏はじめ多くの方々の御厄介になった。また毎日新聞、東京放送の両社には絶大な御後援を頂き、また毎日新聞のヒマラヤ事務局の古市美津雄氏には計画の当初からお世話になった。

また現地ではWHO在勤の正垣博士、東洋史専攻の神原達氏にいろいろとお世話して頂いた。特に神原氏にはヒマラヤン・ソサエティ関係の面倒な仕事を大部して頂いた。

カルカッタでは領事館の方々以外に赤嶺正夫（当時）三井物産支店長、西井康雄氏、日立、日産の事務所の方々、また各寄港地では外交関係、毎日関係の方々の御厄介になった。

阪大当局からも赤堀総長、正田前総長、中村事務局長、岩見前庶務部長、森河前学生部長はじめ多くの本部関係者のお世話になったほか、遠征の後援会、実行委員会、準備委員会の方々の熱心な御協力を得た上に、左記のような各方面

の御援助を得たことに対し厚く感謝の意を表する。

大阪大学山岳会ヒマラヤ遠征隊後援会（敬称略）

赤堀四郎、青木大、今村荒男、大島堅造、岡田実、小田原大造、左藤義詮、正田建次郎、杉道助、関桂三、中井光次

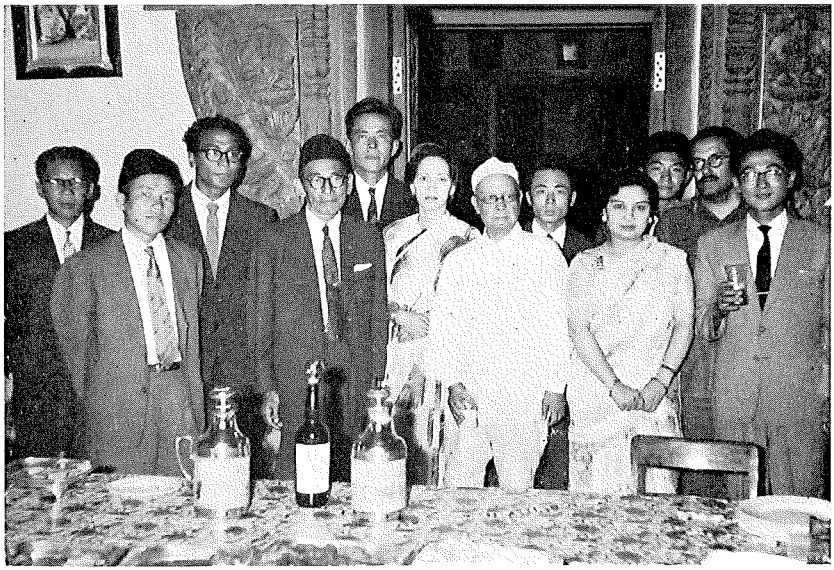
日高信六郎、堀田庄三、本田親男、槇有恒、水野祥太郎

募金に当っては関経連副会長工藤友恵氏、大和銀行副頭取峰村英薫氏、そごう社長（当時）若菜三良氏などに相談に与って頂き後援の両社以外に

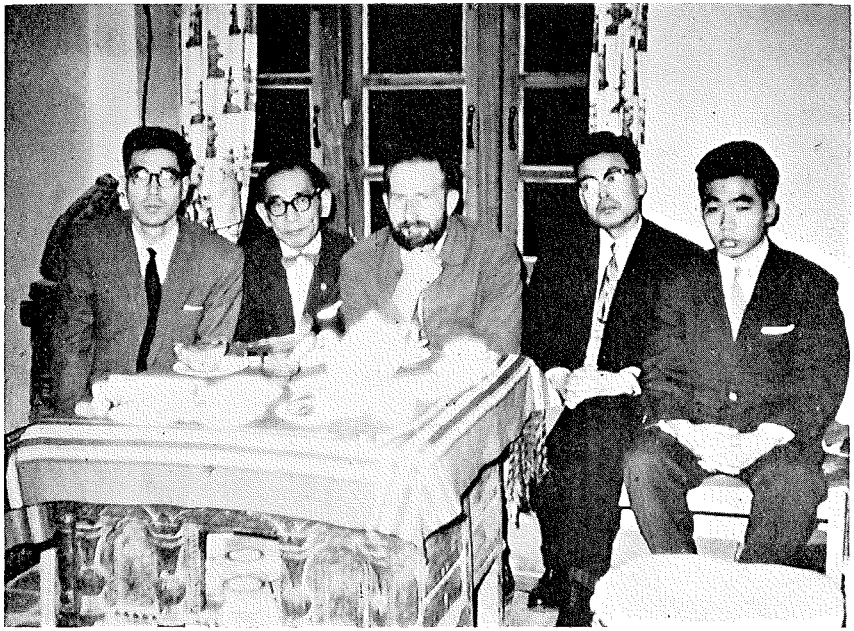
大阪府、大阪市、関西電力、大阪ガス、大阪私鉄五社（近鉄、京阪神、阪神、京阪、南海）、住友金属、住友化学、住友機械、日本板硝子、住友電工、久保田鉄工、東亜バルブ、岡野バルブ、東洋ベアリング、朝日工業所、寿屋、神戸製鋼、川崎製鉄、島津製作所、三菱電機、興亜石油、住友銀行、三和銀行、大和銀行、住友信託銀行、紡績協会（東洋紡、大日本紡、敷島紡、倉敷紡、鐘淵紡、大和紡、呉羽紡）、松下電子、日本触媒、日本生命、武田薬品、千代田光学（現ミノルタ）、平和発条、斎藤化工機、椿本チエン、汎建製作所、山村硝子、大日本セルロイド、日本鋼管、日本金属工業、吾嬬製鋼、東京製綱、久武商店、大阪百貨店協会（大丸、そごう、阪急、高島屋、近鉄、阪神、三越、松坂屋）、日立造船、川崎重工、新三菱重工、日本セメント、黒木製作所、有恒倶楽部、大阪ライオンズクラブ、太田敬次郎氏、松丸秀夫氏などの援助を頂いた。

装備関係では

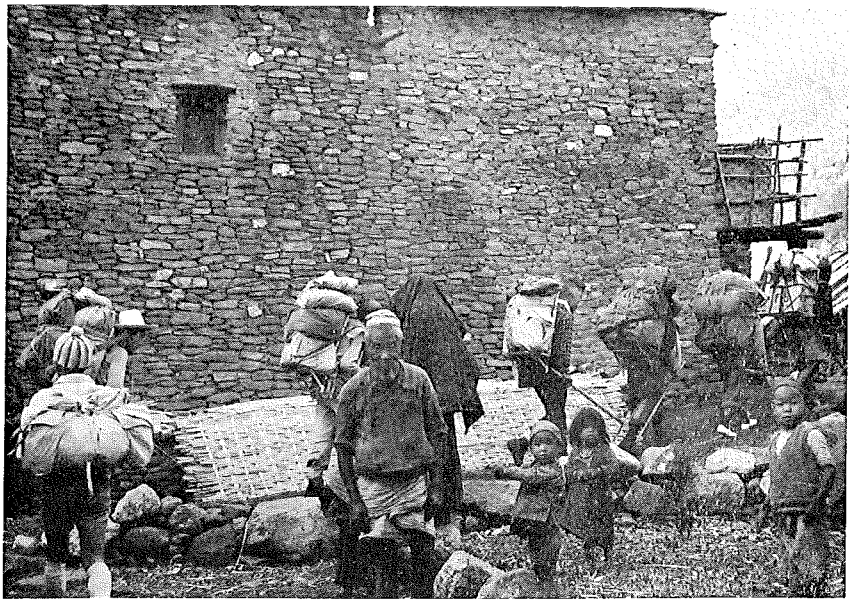
東洋レーヨン、倉敷レイヨン、日本レイヨン、日本トレーディング、福井精練、福助足袋、大西衣料店、那須藤、大阪莫大小、旭化成、美津濃、東京製綱、大有産業、帝国産業、日本アルミ、大阪アルミ、日東アルミ、イーグル・マホー瓶、共和運動具、積水化学、小野市商工会、昭和アルミ、山晴社、福井商事、ゼネラルＫＫ、黒田黒光堂、塚田印刷、



カイザー元師邸にて
（カイザー元師と夫人（左），元師の右は令嬢，その後右は夫の陸軍大将）



住吉　　篠田　　ハーゲン博士　　恵下　湧氏　　神原　達氏
（通産省）



ナ ジ エ の 村

マルシャンディのほとりの部落

太陽テント、藤倉ゴム、紀伊産業、山本防塵、大幡産業、明光社、三油興業、大建油業、ロック製作所、楠灰製造、共進油脂工業、サンスター歯磨、奥田藤兵衛商店、湯浅電池、ソニー、松下電器産業、日立製作所、富士写真フイルム、ミノルタカメラ、キヤノンカメラ、日東紙器、菅原工業、富士工業、神東塗料、住友化学工業、中央ペイント、日通ボックス工業、浩洋商会、日本楽器、東京機器工業、古河電工、岩谷産業の各社

食糧関係では

日魯漁業、朝日麦酒、台糖（神戸）、寿屋、徳島ハム、カゴメケチャップ、江崎グリコ、清水市柑橘農業協同組合、帝国食品、雪印乳業、日清食品、野田醤油、日本紅茶、味の素、前田産業、オリエンタル酵母製造、三立製菓、エース食品、キューピーマヨネーズ、松原喜八、珍々堂、明治製菓、森永乳業、日本水産、日本冷蔵、富岡ハムの各社、また近鉄百貨店食糧品部経由でつぎの各社からお世話になった。

ナガサキ屋、明治商事、野田喜商事、大市昆布、宝酒造、渡辺製菓、ニップン食糧、SB食品、日本食品工業、宝海苔、万国物産の各社、弥谷、玉屋、加藤、祭原、長井藤、松下の各商店

また医薬品関係は薬学部青木教授の御尽力で医薬品協会を通したり、また直接に

塩野義製薬、稲畑産業、大日本製薬、万有製薬、エーザイ、黒石製薬、参天堂製薬、武田薬品工業、山之内製薬、第一製薬、日本新薬、日絆薬品工業、藤沢薬品工業、吉富製薬、三共製薬、田辺製薬、日本ブラッドバンク、白井松薬品、丸石製薬、中外製薬、和協製薬、小西儀助商店、ロート製薬、大塚製薬、森下仁丹、小野薬品、マルホ商店、明治製菓、台糖ファイザー、持田製薬、興和、和光純薬、チバ薬品、湧永薬品、中島医療器械の各社、また阪大病院用度掛経由で板東医料器械製作所のお世話になった。

登山計画は最終的にはつぎのメンバーからなる実行委員会で審議、決定された。

篠田軍治、住吉仙也、徳永篤司、恩地裕、新谷五郎、水野健次郎、関集三、大島輝夫、山口次郎、高畠幸男

この下に準備委員会を置いたが、これには隊員全員と高畠幸男、梶原信男、吉見俊一、河原暉、新谷五郎、新保正樹、大島輝夫、徳永篤司、松久博、久保三朗、東雍、田島汎、四宮誠祐、坪井圭之助、宮本貞雄、近璋三、大村一生、抱忠男、三枝礼子、宍戸元、広橋茂、木村裕一、立花直治、李中勝、山本進一郎、岡田博司、坪井和子、平田彰のＯＢで、これを現役全員が積極的に手伝ったが、特に大工原恭はほとんど連日連夜事務室に頑張り通した。

表紙写真
ポカラ空港より、中央に
マチャプチャリ、大樹の
右上にアンナルナⅡ峰

昭和37年11月30日印刷
昭和37年12月10日発行

〔非売品〕

著者　篠田軍治
発行者　大阪大学山岳会
印刷者　松崎秀雄

大阪大学山岳会
大阪市北区常安町
大阪大学学生部内

印刷・松崎印刷　製本・洛陽製本所